



登場人物紹介。

登場人物

ノルン 廃棄処分を免れた人工生命体の少女。灰色の長い髪をしている。 能力 イッツ・ノット

キマイラ 殺し屋として戦闘訓練所で育てられた少女。羊の角を持っている。 能力 カクテル・パーティー

ガーデン <教会>にいる少女。心を閉ざした少女。

リーデラ <教会>で暮らす少女。「青」という色彩を怖がる、大人びた少女。

オルギア <教会>で暮らす少年。反抗期みたいだ。

ゼロム <教会>で暮らす少年。年長者。喫茶店でアルバイトをしている。

レデル <教会>を管理している女。

マミー・キャット 生体兵器開発をする零細企業に勤めるエージェントの女。 能力 インシニレート

※本作品は、バウンティ・ハンターの実力者であるキマイラの少女時代のエピソードである。

0日目（一日目以前）

十日ほど前。

経血が流れ始めた時、ああ、女になっていくんだなあと思った。

これで子供を産める身体になった。

お風呂場から出た後、鏡に自分自身を映して、溜め息が出た。

腰元まで伸びた灰色の髪が、裸の肉体を覆っている。

顔立ちは異常なくらいの美少女らしいのだが、自分ではよく分からない。自分の顔は毎日、毎日、嫌に成る程、見慣れているのでいい加減、飽きも来ている。

十代の頃、ずっと男だと思わされていた身体。カラダ。

体力的には男に勝てず、また『能力者』になる事も諦めた身体。

もう二十一歳を迎えた。

二十一でようやく生理が来た。この肉体は色々とおかしい。

二十一にも拘らず、外見年齢は十六、七くらいだ。ホルモンバランスがおかしいのだろう。

自分がどうやら人間じゃない、と知らされた事には軽いショックを受けたが、更にいえば、この小さな世界は始めからゴミのように捨てられるだけしか価値の無い場所だ、という事にも強いショックを受けた。

私のこれまでの人生とは何だったのだろうか？

十五歳まで“小鳥箱”と生じた、人工的に能力者を生み出す機関によって家の外に出る事を許されなかった。その間に得た知識は書物から手に入れたものばかりだった。

書物は私を勇気付けてくれた。

書物は私にとっての武器だった。

それから、頻繁に訪ねてくる者達との交流によって、私はこの家の外側の世界が存在する事が感覚として分かった。書物では得られない感覚。

他人との交流によって得られる感覚、知識。そして、次は自分自身の目で肌で確かめたい、この世界の外側を。

……………

最近では能力者の研究が色々な場所で行われていると聞く。

どうやら私は人工的に実験体として与えられた命らしく、頭に特殊な電波を送られたり、100時間以上にも渡って、食べる事、眠る事、排泄する事を赦されずに全身を拘束されたり、新しく発見された病原菌を体内に注入されたりして、この年齢まで過ごしてきたのだが、どうやらそれは人道主義とか言うものの規制に引っ掛かって、最近ではやれなくなっただけらしい。私以外にも私と同じ人工生命として、大量の少年少女達がいるらしいのだが、その大半は失敗作として“処理”されたらしい。たまたま私は処理前に人道主義とか言うものの規制によって救済されて、現在の私はつまり衣食住を保証されて、毎日、毎日、何もやる事が無く、上部から見捨てられて、やたらと広い家に置き去りにされているという状態だ。

最近ではマジメに毎日、退屈で過去の実験のトラウマとかがフラッシュバックして、もう死に

たくて死にたくて仕方無いのだが、家の屋上から飛び降りるなり、首を括って頸骨を折るなり、やろうと思えばやれるので、今はまだやらない事にしている。

第一、馬鹿らしい。私にだって、新しい人生があってもいい筈だ。

ルージュにいつも手紙を送っている。途絶える時期もあるが、大体は帰ってくる。

ルージュは娼館にて毎日、沢山の客を取らされているらしい。

文面を読む限り、彼女はそれなりに楽しそうだ。

私が見られない外の世界。

彼女はそれを知っている。

.....

私は死ぬ前にどうしてもやりたい事がある。

それは恋をする事だ。

自分が生まれてきた事。

好きな人に巡り会いたい。

たったそれだけのささやかな願い。

.....

何の価値も無い命。

何処までも意味の無い命。

それが私。

.....

『ヘッド・レス』と呼ばれている、首から上が欠損した機械人形達が、私の生活の全てを補ってくれる。彼らはいわば、脳無き召使だ。此処に生きた人間はいない。私は動く機械達によって生かされ続けている。掃除も洗濯も食事の支度も、全てヘッド・レス達が行ってくれる。

何処に自分の意思があるのだろうか？ 分からない。

私は鳥籠の中だ。実験動物の末路としての生を生き続けている。.....

十

十歳の頃、人の死は人間が神様の下へと帰っていくのだと、そう父親から教えられた。

ずっと、父子家庭で過ごしていた。.....

父の死を知ったのは、秋が近い頃だった。

彼が十五歳の誕生日を迎えた時だ。

父は柩に入るとき、全身を縫い付けられていたという。

バラバラ死体にされたからだ。

それは察そう、糸のお化けのような姿をしていた。そのまま、袋に包んで柩に入れてもよかったのだが、どうしても生前の父の原型を見たいからと、家族たつての頼みだった。

エンバーマーは、ほとんど困り果てていたらしい。

彼の父親を殺した殺人鬼は、今も指名手配されている。

きっと捕まる事は無いのだろう。

殺人鬼に対する恨みは強い。けれども、その傷痕は、父親の死だけには留まらなかった。それからというもの。

毎晩、彼の家の周りには囁く声が聞こえる。

そいつらは手、腕だけだ。

そいつらは、彼の家の中には入れないが、窓に大量に張り付いていたり、玄関の隙間から指を伸ばしたりする。

幻覚でしかなかったのだが。

確かに、彼の眼には、そいつは映っていた。

その頃は、頭が破裂しそうになった。何もかもが壊れていきそうな感覚になった。

それにしても。……。

此処、最近、雨が止まない。

雨がとにかく続いている。

記憶の中から掘り起こす。

この世界、他人。

全てが他人になっていく。自分自身ですらも。

彼の肉体はそのまま雨の中に溶けていく。途端、自分自身が闇の中に飲み込まれたような感覚に陥る。

このまま、彼は雨と同化して、流れて、地面に吸い込まれていくのかもしれない。

……。

余り、よい睡眠とはいえない。頭がくらくらとする。

夢だった。

しかも、白昼夢だ。

平日の喫茶店にて、少し休憩を入れているところ、この幻覚だ。

だんだんと、蝕まれていっている。

最近、本とかを読む機会が増えたからかもしれない。

余裕が出てきた。

それがいけないのだろう。

感情を無にする事、そして、まるで別人のように仮面を被って生きる事、それが僕の人生の命題であった筈だ。

そうしなければ、いつか自分自身の悪夢に追い付かれて、殺されてしまうだろうから。

外を見ると。

紫陽花が一面に咲いている。

街に来ると、街中に紫陽花が咲いている。

この街は年中、雨が降り注いでいる。

だから、みんないつも、レイン・コートを被って過ごしている。

彼が物心付いた頃から、雨が降り続いていた。

神様が永遠に泣き続けているのだと伝説では言う。

この街にやってきた外側の人間は、この街を不思議そうに言った。

何故、雨が止まないのかと研究者は、不思議そうな顔をしている。

湿気に満ちており、菌類ばかりが繁殖している。

此処の人間は、みな、青白い肌をしている。

雨を避ける為に、地下都市が作られていて、そこに住民達は住んでいる。

都市は地上区画と、地下区画に分かれており。

主に地上区画には、研究施設や工場。

地下区画には、住民達の住む家々や露店、喫茶店などが並んでいた。

地下区画には、剥き出しの地面が多く並んでおり、降ってくる雨を吸収しやすいように設計されている。それから、コンクリートの間にも沢山の溝があり、街の外れにあるダムへと雨水が向かうように作られてた。

この街の生活は快適なのだろうか。

それは、彼には分からない。

空の見える眺めのよい喫茶店、そこは僕が働いている場所だ。

ゼロムと、彼は名前を呼ばれた。

見ると、幼馴染のオルギアだ。

彼は頭に布切れを巻いている。

幼馴染といっても、僕とは七歳も年齢が離れている。

もう、彼は十五歳になるのだろうか。

彼は何気なく、僕の働いている喫茶店にやってきて言った。

「なあ、見てくれよ。仕事なんてっさっさとさぼって、これから広場に来てくれないか！」

ゼロムは溜め息を吐いた。

年齢なんだろう、オルギアがガキだ。

ゼロムは丁寧に食器を洗って、客の注文したものを運ぶ。

彼は無視するに限る。

この少年は、十四歳から煙草を吸っている、所謂、不良だ。

このままだと、どうしようもない大人に成長するのだろうか。

しかし、教会で育った子供達は、みな、僕自身も含めて酷い翳りがあるというのにも拘らず、オルギアはいつも元気そうだった。

実際、オルギアは他の者達のリーダー格に近かった。

一人で泣いていたり、刃物などで自傷している子達を元気付けたりしていた。

彼自身も酷い心の傷を負っている筈だったが、それでも彼はそんな陰のある部分を表には出さない。

……………。

二時間後、休憩時間を早めに貰い、オルギアの言う広場へと向かった。

広場といっても、地下街の中なので、人工的な光に照らされた植物が、奇妙な形で育って、そ

れが公園の周りを取り囲んでいる。

旅人の話いわく、こういう場所一つとっても不気味に見えるらしい。

けれども、見慣れた僕からすると、ごく自然で、極めて公園の景観を保っている素晴らしい景色に見える。

彼は満面の笑顔で、僕に言う。

「レデル先生が口にしていた、『エートル』を手に入れた。見てくれよな」

彼は指先を樹木の前にかざす。

そして、彼の右手が発光したかと思うと。

いきなり、樹木が爆発した。

しゅうしゅうと音を立てて、樹木には大きな孔が開いている。

ゼロムはまた、溜め息を吐いた。

「ああ、分かったから。僕は仕事に戻るよ」

と、面倒臭くなって、踵を返した。

.....正直、僕は今の彼をよく思っていない。

能力を持つ、という事は、それだけ危険な目に晒される可能性が上がるという事だ。

何よりも、教会の事もある。

ばん、ばん、とオルギアが樹木を打ちまくっている。

ゼロムは叱り付けてやろうかと思ったが、止めた。

昔からこいつは、彼の言う事などてんで聞きはしない。

頭が痛くなった、公園の樹木が孔だらけだ。

補導されるのならまだしも、機関に目を付けられなければいいが。それに、一体、オルギアは今、どんな気持ちなんだろう。力を手に入れたという事は。

オルギアは野心家だ。

どんどん、自惚れが強くなっている。

自分に出来ない事は何も無いと。

そういう時期なんだとは思っている。確か、彼も通った道だ。

自分には何でも出来るといったような全能感。オルギア程ではないが、僕も彼の年齢の頃には、そんな事を思っていたような気がする。

.....たとえばだ。

.....たとえば、自分の両親を殺した奴に、絶対に復讐してやろうとか。

それは、絶対に可能なのだと。

今のオルギアは、彼の頃よりもずっと強い自信がみなぎっているし、教会にいる者達の中でも、強い希望の光を持っている。

しかし、人生の先輩として思うのだ。

決して、彼の持っている感情が良いものではないのだと。

彼は“力”を身に付けて以来、何処か目付が変わっているようにも思える。

それは余りにも危な過ぎるものだ。

ゼロム自身は、彼のような力をついに身に付ける事が出来なかった。

だから、ひょっとすると、ゼロムも彼のように生きていたら変わっていたのかもしれない。
可能性はゼロではない。

オルギアは自分自身の能力をもっと、高めたがっているみたいだった。

彼の指の先から放たれる攻撃は、今や鉄板を削り貫く事が出来るらしい。けれども、それよりももっと破壊的で、もっと強く、自らの力を研ぎ澄ませたいと。……。

人を殺すのに、十分な殺傷力を持った力。

十五歳の彼では、余りにも扱いあぐねる力。

ゼロムは堪り兼ねて、彼に忠告した。

「なあ、そんな力の使い方じゃ。とても、お前の敵は殺せない。オルギア、聞いてくれ。そのうち、君は君自身を滅ぼす事になる……」

はっきりと、言ってやった。

オルギアは、ゼロムを見据える。

沈黙。

オルギアの眼は野心と不遜さに満ちていた。

ああ、駄目だ、と。

ゼロムは再び、溜め息を吐いた。

彼はやっぱり子供なのだ。

皆の中では、リーダーの気質が合ったとしても、やはり子供なんだ。

現実を知らない。

まるで、かつてのゼロムがそうであったように。

正直、自分とオルギアは似ていると思う。

現実と戦って、葛藤している。けれども、決定的な違い。

彼はもう大人であるからこそ、自分自身の可能な限界を知っている。

あるいは、それは只の諦めでしかないのかもしれないとも。

……そんな事をレデル先生に話すと、叱られる。

貴方もまだまだ若いのだから、と。彼女にとっては、オルギアも彼も、その年齢差に大した違いなど無いのだ。けれども。

15歳と。22歳。

その差異は決定的であり、その断絶は決して埋められない。

自分はもう、若くないと考えている。

現実の中で、若者らしく、現実を生きていかないといけない。

「なあ、見てくれよ。今回は前回よりも、もっと大きな木をなぎ倒せた。撃つ速さも上がったんだ。僕は、……俺はもっともっと強くなれるよ」

ゼロムは苦笑する。

まったく、彼は街のマナーも守ろうとしない。

「雑木林を教えてやるよ。今度はそっちで練習してくれよ」

ふん、と彼はそっぽを向く。

相変わらずだった。

生意気な性格が、どんどん助長していつている。

彼の方はといえば、今日は三時には仕事が終わりに、オルギアと話した後。朝に買った新聞を読んで、何処かでくつろぐ事に決めた。

いつもは五時、六時まで働いているが、今日は土曜日だ。だから、仕事の時間が短い。

そういえば、と思い出す。

そういえば、最近、教会に顔を出していない。

みんなどうしているのだろうか。

気になる。

……。

窓を開けて、空を眺めた。

風が長閑に、過ぎ去る。

何処までも広がる空。

その空は灰色の雲に覆われて、閉ざしている。

いつか、この地を離れよう。

その決心だけはある。

……僕は生きている。

その実感。

それだけは分かる。

十

「何の用だ？」

まだ年端もいかない、十五歳くらいの少女だった。

彼女は紅茶とコーヒーを両方注文して、紅茶の中にコーヒーを砂糖とミルクと一緒にぶちまけて混ぜたものを美味しそうに飲んでいた。

「いやいや、キマイラ。よくやっているそうじゃないか。その年でそれだけの実績を上げられるなんて将来が楽しみだよ」

彼女の向かい側に座っている女は、真っ白なカットソーの上に、真っ白なコート。そして、真っ白なショートスカートを穿いていた。全身、白尽くめの女だ。

何処か、他人を観察するのが好きで溜まらないといった風情の猫のような目付をしている。

対するキマイラは、黒いTシャツにジーンズ。それから頭半分をすっぽりと覆うニット帽を被っている。

「怖い事ばかりよ。この前の標的なんて最新式の散弾銃と爆薬を持っていた。下手を打っていたら私は死んでいた。ねえ、私はいつまでこんな事させられるの？」

女はくすくすと笑う。

「そうだね、降りてもいい。でも、両親を殺した弟君。本当なら危険因子として私達の側で“始末”するところだったのよ。でも、君の才能を買って、私が上司という立場にさせて貰い、君達を生かし続けている。君は降りてもいいけれども、君は一生、どのみち我々の監視下に置かれて、君の弟君は組織に始末される。それでも……」

「黙れ、『マミー・キャット』。私は貴様の部下という立場に甘んじているが、私は貴様に何の尊敬も抱いてはいない。私の力で、今すぐお前を始末してやろうか？」

キマイラはマミー・キャットと呼ばれる女を睨み付けた。

マミーはにやにやと笑っているだけだ。

「そんな事したら、君、組織中の人間から狙われる事になるわよ？」

キマイラは返す言葉を失った。

それに、彼女とて、もう他に行く場所も無いのだ。

「それで、次の仕事の件なんだけれども」

マミー・キャットは、キマイラから飲み物を引っ手繰ると、自分の口に入れて、そのまま飲み干す。

「雨の街に調査をしに行つて欲しいの。そこにある“教会”を調べてきて欲しい」

キマイラは眉をひそめた。

「その教会、麻薬の密売とか人身売買とかしているの？」

「いや」

マミーは笑う。

何かを言いかけたが。

「その仕事だが……」

彼女達の隣から、声が聞こえた。

一人の、身長が百九十センチくらいはあるであろう、長身の男が立っていた。

「あなたは、“三人目”の男？」

「ああ、この私に引き受けさせて貰えないかな？」

『三人目』と呼ばれている男が、二人の前に現れた。

二人きりで会話していると、突如、何処からともなく現れる三人目の男。

それが彼の“能力”なのだと聞く。

二人きりで会話している時のみ出現する事が出来る男。

彼は消えたり、現れたり出来る。

組織の者達ですら、そいつの正体は分からない。

そいつの持つ“能力”の実体は何なのか、誰も分からない。

謎の怪人。

「いいわ」

マミーは笑顔で三人目の男に言った。

「じゃあ、キマイラ。次の仕事に来るまでいつも通り待機しておいて。せいぜい今度も生き残れるように、能力の向上にでも努めておくことね」

と、マミー・キャットと三人目は店から去っていかうとする。

キマイラはどん、と勢いよく音を立ててテーブルを叩く。

彼女の拳がそのまま、テーブルの中に深くめり込むが、彼女がテーブルから手を離すと、何事も無かったかのようにテーブルが元通りになっていた。

「畜生。……何なのよ、私の人生は」

彼女は十五歳の少女とは思えないほど、深く、恨みに満ちた目付をしていた。

「待て、お前ら。私が行くわ、私が先に偵察しに行く」

キマイラは二人に言った。

怒りを押し殺したような声音だった。

マミー・キャットは世にも嬉しそうな笑顔を見せる。

「そう、だってよ。三人目、どうする？」

「……そうだな。分かった。君が言ってくれないか。今回の仕事はそれなりに重要な任務だから、後からやはり私も向かう。それでいいかな？ 先に事前調査をしてきて欲しい」

「……分かったわ」

キマイラは苛立ちを抑えきれずにいた。

一体、何に苛立っているのか。

自分でも分からない。

十

ルージュの話は私の好奇心をそそる。

客の事、客との関係の事。

愚痴ばかりが大半を示していたが、それでも私はルージュを羨ましいと思ってしまった。

彼女は、色々な人間から愛されている。けれども。

私は誰からも必要とされていない。

ルージュは本当に私を必要としているのだろうか。いや、きっと仕事の合間に、気紛れとして、私と文通しているに過ぎないのだ。

他人というものがどんなものか私にはよく分からない。

一体、どんな風にみんな話すのだろうか？ 生活しているのだろうか？

毎日、毎日、白いカットソーとパニエとドロワーズを纏って、全身、白尽くめで。

『ヘッド・レス』達の作る料理を食べて、服が汚れると勝手に洗濯してくれる。

ヘッド・レスは人間の骨格を模造した人形で、頭部が無く、ひたすらプログラムされた家事を行いつける。話し相手にすらなってくれやしない。

此処に人間はいない。正直、発狂しそうだ。こんな事がもう六年間も続いている。

私に課せられた使命は、私という存在を封印する事。

私は外界に行ってはならない。

十五歳を過ぎた後、私は廃棄されている。

本来ならば、父親がいて、母親の胎内から人間が生まれるのだろうが、私の場合は培養液のカプセルから産み落とされたらしい。最低だ。どうやら私は人間じゃないという事になるじゃないか。それを知らされたのは十五歳で、ショックで不眠症を発症してしまった。更に言うならば、十五歳を境に、めっきり人と交流する事が出来なくなった。

そして。

この家は森に囲まれている。まるで鳥籠の中だ。

私は自由になりたい。

けれども、私には生活力が無いのが分かっている。一体、外の世界で何をすればいいのかが分からない。何をして暮らそう？ 雇ってくれる仕事なんてあるのか？ というか私に出来る事なんてあるのか？

どうやら私の性別は女らしいので、ルージュみたいに身体でも売ろうか？ ああ、でもルージュの話聞く限り、女に残された最後の仕事すらもそれなりのコミュニケーション能力が無いとやっていけないらしい。それに最近では伝染病が流行っているらしいので、娼館の方も従業員を選んでいるらしい。それに所謂、私は処女だ。やり方なんてまるで分からないし、そもそも恋愛をした事が無い。

本の中の登場人物にしか、恋心を抱いた事が無い。

内側にいる者、自分の想像上の者。そういった者達にしか。……。

この家の外側はタブーだ。

私が踏み込んでではない場所。

しかし、きっとタブーの領域に向かう事によって私は人間になるのだ。

人工生命体から、人間になる。

思うに、人間は誰かと話して、他人との関わりの中で、自らが作られていく存在なんじゃないのかって私は思っている。

そう思った瞬間に。

何の為に生きているのか分からない。と。

毎日、食事して、排泄して、無駄に本ばかり読んで。……それだけだ。

私は生きているのか？

他人がいないからひょっとしたら、私はもう死んでいて、幽霊なのかもしれない。

だから、決意するしかなかった。

私は人と話して、人間関係という奴を築かなければならない。

六年間、白馬に跨る王子を待ち続けた。個人的には画家ヒュスリの描くような黒馬のナイトメアに跨る骸骨騎士にさらって欲しいのだが、抽象的な概念として理想の異性、比喩としての理想の異性、白馬の王子様を私は待ち続けていた。

しかし、そんなものは現れなかった。

だから、私が探しに行くしかない。

探しに行くしかない。

私の生きる存在の意味を。

……。

半日くらい歩いて、へとへとになり、家に戻る事になった。

森から出る事が出来ない。

高い山脈に突き当たり、その険しい道を登る事が出来ない。

牢獄。

そう、此処は天然の牢獄なのだと今更ながら改めて認識する。

私を初めから出さない為に作られた場所だ。

私の力ではとても抜け出せない、そのように此処は設計されている。

自分自身がどうしようもなく、無力なのだと突き付けられる。悔しい。

籠の中。外に出られない翼をもがれた白い小鳥。それが自分。……。

星月夜だ。

満天の空。

余りにも綺麗な賛美歌のような自然の唱和。

此処から、どうすれば抜け出す事が出来るのか。

そうだ。

私にだって、“能力”はある。

それは失敗作だと呼ばれた。

それは意味の無い能力だと言われた。

けれども、確かに私が存在している事と同じ事のように、私にだって“能力”はあるのだ。発現したのだ。

十

久々に教会へ向かう。

もう二ヶ月は、教会には行っていなかった。

特に忙しい仕事をしているというわけではないが、すっかり自立してからは、此処に来るのは正直、重い。

此処は孤児院のような役割を果たしているが、今いる者達は、運営者も含めて、五名といったところだった。

此処で預けられている子供達は、所謂、トラウマを抱えている者達ばかりだった。

庭では、一人の少女が掃き掃除をしていた。

ガーデンという名前の少女だ。

彼女は最年長で、今年、十八になる。

彼女はゼロムに軽く会釈する。

そして、人見知りそうにすぐに彼から目を逸らして、掃き掃除に戻った。

台所の方に向かうと。

此処の教会のシスターであるレデルは、夕飯の支度をしていた。

「ゼロム。久しぶりだね、年々、会いにくる日の間が開いてきているじゃないか。此処はあんたの家なんだよ。もっと顔を見せに来てもいいじゃないか」

「いえ……」

返答に困った。

「そうだ。今、シチューを作っている。あんたの好物の鶏肉とバジルが入っている。みんなと一緒に食べなよ」

「……ええ」

そして。

一時間ほどして、小さな聖堂の隣の部屋で、揃って夕食を食べる事になった。

全員で七名。オルギアの姿もある。

上座には誰も座らない。

本当は大きな円卓のテーブルが欲しいのだとレデルは言う。

みんな平等。誰かが偉いなんてのは在り得ない。

それがこの教会の信条だった。

「じゃあ、神様に祈りましょう。みんな心の中で、それぞれが思い浮かべる神様に祈るのよ」

レデルはいつもの調子で言う。

彼女いわく、別に教会だからって聖書の中の神様じゃなくてもいいらしい。好きな小説の中に登場する神様だとか、自分で勝手に思い浮かべた神様だとか。勿論、別の宗教の神様だとか。あるいは大切な人だとか。

そんな神様を頭に思い浮かべてお祈りをする。

……みんなそれぞれの席で、与えられた食事に手を付ける。

ガーデンは相変わらず、何も食べなかった。

それでも、レデルはいつものように笑顔で彼女に話しかける。

食事の素晴らしさ。

ガーデンは点滴のチューブによって、直接、体内に栄養を取り込んで生きている。

彼女は食事をするという行為が出来ないのだ。

飲み物を摂取する事すら困難みたいだ。

彼女といると、むしろそれが当たり前に見えてきてしまうが、やはり彼女の病気は特殊なものらしい。

食べ物を口に出来ない病気。まるで、生きる事を拒絶しているかのような。

ガーデンとは対照的に、ガイツォという少年はとにかく大量の食事を食べ続けていた。

彼はメンバーの中で一番、体格がよく、十六歳の少年なのだが、二十代くらいの年齢に見える。しかし、その行動は少々、愚鈍な感じがする。

「ガイツォ、いっぱい食べてね」

レデルは嬉しそうに彼に言った。

ガイツォは口の中に物を沢山、詰め込む行儀の悪い癖があり、スプーンを鳴らしたりする癖も直っていないみたいだった。

彼は落ち着きもない、どもりも多い。けれども、憎めない愛嬌のある顔と、ストレートな優しさが好きだ。

食事が終わり、みんなで後片付けをする。

皿洗いに吹き掃除、特に当番は決まっていなかったが、みんな呼吸を合わせるかのように、それぞれの役割を見つけていく。

食べ残しは、基本的に飼っている動物達の餌になる。

動物達に餌を上げるのはガーデンの仕事で、自身の食べられなかった料理も含めて、残飯を裏庭にいる豚や鶏達に与えに行く。

その他のメンバーは食器を洗ったり、掃き掃除をしたりする。

それが日課となっている。

家事をして、それ以外の時間には運動や国語や地理などの勉強をする。

そうやって、社会の中へと溶け込めるような訓練を施していく。

ゼロムは一人、レデルの部屋へと向かった。

ノックをして、扉を開く。

彼女はノートに何かを記していた。

ゼロムは中身をこれまで数度、拝見させてもらった事がある、僕の事も沢山、書かれていた。教会。

此処は、孤児院の中でも、特に心の病を発症した者達を請け負う施設だった。そんな人間ばかりが集められて、暮らしている。

レデルはシスター兼精神科医で、孤児達の行動日誌を、毎日、ノートに記している。

みんなを治療したい、そう真摯に願いながら。

「僕の頃は食事後に薬を出されました。今は皆に与えられないんですか？」

「薬物に、脳障害を齎す副作用が見つかったのよ。それに本当は日々の生活だけで治療を続けないと。今のところは、理想なんだけれどね」

ゼロムは、昔、毎日、何錠もの薬を飲んでいた。

けれども、ある時からそれを減らすように言われた。

どんな副作用があるか分からないから、と。

「オルギアとガイツォはともかく、ガーデンは厳しいでしょうね……。やっぱり症状がよくなっていない……」

「そうね。……でも仕方ないわ、ガーデンにはこの教会のシスターをやってもらうわ。どっちみち、私一人で、掃除や洗濯って大変だから……」

オルギアを最後に、レデルは孤児を引き取っていない。

多分、それが彼女の限界で……。

「でも、貴方を無事、社会に送り出す事が出来てよかったわ。此処に送られてくる子達は、やっぱり症状が酷い子が多いから……。専用の作業場で一生を送る子達も多いわ」

専用の作業場。

簡易な単純労働を与える、賃金の安い場所。

病気の間ばかりが、働く場所。

そういう場所に送って、果たして彼らは幸福なのだろうか。そういう場所で一生を終えるという事。

「だから、貴方は希望なのよ。みんなの。貴方はしっかりと生きて欲しい、それがみんなの道標になる」

一日目

私は車に乗せられていた。

体力の消耗が激しい。

私を見つけたのは、工場労働者風の中年の男だった。

汚い車だ、と思いながらも、私はこの中年男に感謝している。

「嬢ちゃん、何でまたあんなところに」

男は怪訝そうに言った。

まあ、当然だろう。

私は自分の能力を使って、この男に見つけてもらった。

窓から、車の外を見る。

深い、闇が消えていく。

気付けば、夜が明けようとしていた。

「何か、この辺りで働く場所ってありませんか？」

私はそれを精一杯、伝えた。

「この辺りって……、この辺りじゃ失業者ばかりだぜ？ お嬢ちゃんみたいな者が働く場所なんてないぞ？」

「身体、売ります」

即座に答えた。

男は眉を顰めた。

「馬鹿言っちゃいけない。売春婦ってのは此処じゃ差別されている。俺達みたいな、底辺労働者だって、彼女達の巣へは行かない。一生、抜け出せなくなるぞ？ みんな最後は病気に感染して死んでいくんだ」

ルージュの事を思い出して、悲しくなった。

私の友達は、と思わず叫び出しそうになった。

そして、何だか少しだけ悔しくて泣き出しそうになった。

「嬢ちゃん、今日はうちよっていきなよ。味の薄いスープくらいしか出せないけどな」

四十分くらい車を走らせた後、田舎町に着いた。

私は胸が高鳴る。

ここは紛れもなく、あの屋敷の外なんだって。

私はあの屋敷の中から出た。

これからは、一人で生きていくのだ。

更に、十分ほど車を走らせて、男は一軒のロッジへと案内した。

余り、綺麗な外壁ではない。草が生い茂っていて、ロッジを取り囲んでいる。

綺麗な場所ではないが、何となく、温かい場所なんだろうなあ、と思った。

「そうだな。今日中にでも、俺の古い友人に頼ってみる。此処から、十数キロ先の街なんだが、まあ、俺みたいな半端者には暮らしにくい街なんだけどな」

彼は少し、悪態を付くように言う。

「嬢ちゃん、とにかく。考えを改めなよ。俺は今でこそ、小金を溜めて“生ゴミ”から抜け出したけれども。昔はあそこで、女を売っていた。とにかく酷い仕事だった。今でも夢に出てくる。なんだろうなあ、あそこは。吐き溜まりなのかもしれない」

男は薄っすらと生えている顎鬚を摩る。

そして、何か物思いに耽っているかのようだった。

私は何だか、悲しく思う。

何故なのだろう、彼を見ているのは、何処かが辛い。

「まあ、いいや。お嬢ちゃん、とにかく新しい宿を紹介してやるよ。後、数時間、ドライブする事になるけど、待ってな」

先ほどの暗い表情を消して、男は笑いかけた。

十

仕事が終わる。そして家に帰る事にする。

また、雨の中のシーンが頭の中で復元されていく。

血塗れの死体達。

両親。

何もかもが、壊れた者達。

拙いなあとと思った。

今は一人でいない方がいい、そう考えて、彼は教会へと向かった。

教会に着くと、ガーデンが手招きしていた。

くり色の長い髪をした少女。

彼女は人間不信そうな目でこちらを見ている。相変わらずだ。

彼女の幸せを願って止まない、けれども、彼女自身の方はどうなのだろう。

教会の中では、白衣の上にエプロンを着けて、レデルが食事の支度をしていた。

「ああ、ゼロム、ちょうどよかった。今日、古い友人が来てね。ちょっと頼み事をしてくれた。お前も会ってくれないかな？」

連れて行かれたのは、寝室だった。

寝室のベッドの上で、一人の少女が寝ている。

髪は不思議な灰色をしていた。

この辺りでは見かけない髪の色。アッシュ・グレーというべきか。

粉雪のように、銀色も混ざっている。不思議な髪だ。

彼女は死んだように、眠っている。

まるで、人形のような顔立ちをしている。陶器のような美貌。

「相当、疲れているみたいだね。車の中でも殆ど寝ていたそうよ」

「そうか」

そして、レデルから少女の経緯を聞く。

少女は何者なのだろうか。分からない。けれども、家族。親はいる筈だ。連絡を入れなくてはならない。

突然、その少女は飛び起きる。

そして、辺りを見回した。

「私……、ここは？」

「ここは教会。あたしはレデル、よろしく、貴方の名前は？」

名前を聞かれて、少女は口ごもる。

そして、何やらぶつぶつと喋り始めた。

「名前、か……そうよね。人間同士、関係性を気付く上で名前が必要だ。私はその必要が無かった為、標記番号で呼ばれていた。しかし、それで呼ばせるのも何だかかえって失礼な気がするわ……」

妙な事を口走り出す、こんな場所に連れてこられて、錯乱しているのだろうか。

「……ルージュ相手だと。貴方、って呼ばせていた。番号でも呼ばせていた。でも、それはルージュが相手だったから。そうね……」

少女はふと、何かを思い出したように言った。

他の者達は彼女の独白を怪訝そうに聞いている。

当然だろう、彼女は独り言が習慣になっている。いつも相手は人間じゃなかったから。

ふと、何かを思い付いたように、彼女は口を開く。

「『ノルン』、私の名前はノルン。そう、呼んでくれませんかでしょうか？」

「そう、ノルン、よろしく。ちなみに隣の彼の名はゼロム」

「ゼロムです。君はここから北西にある村で倒れていたんだって？ 駄目だよ、あの辺りに近付いたら。あそこは、浮浪者と借金で頭が回らなくなった人間用の労働施設と、娼館と、ごろつきと幽霊しかいないんだから。君みたいな子が行く場所じゃないよ」

と、何だか世間知らずそうな雰囲気漂わせている少女に、彼は茶化すように言った。

実際、彼女のいた場所は、この街であぶれた人間ばかりが住み着いている場所だ。

「この教会にしばらく置いてあげようかと思うのよ」

レデルは言う。

もちろん、ゼロムも断る気は無い。

こうして、ノルンは教会の一員になった。

十

マミー・キャットは雨の街に来た。

彼女は降り続ける雨に打たれながら、酷薄な笑みを浮かべていた。

此処の何処かに教会がある筈だ。

それを探して、始末を付ける。

彼女は自身の唇を舐める。

雨が降っているという事は、彼女の能力『インシニレート』の媒体が浸透しやすいという事だ。水に濡れた人間は、彼女の能力の感染速度が上がる。

どうせ、こんな街、破壊しまくっても構わないだろう。

大義名分としては、組織の為、人類の繁栄の為だ。

組織の為というよりも、彼女自体、快楽殺人者の気質があった。

元々、好戦的な性格で、何よりも他人の苦痛を見るのが好きだ。

そして何よりも楽しいのは、自分が圧倒的優位にも拘らず、他人を陥れる事だ。

彼女の能力それ自体が、そういった欲望を具現化させたような現象を引き起こす。

彼女はその、サディズム性を満たす事のみの特化した考え方をしていた。

アップルという組織そのものではなく、彼女独自の素質。

敵を徹底的に追い詰めたい。なぶりたい、いたぶりたい。

その欲望に抗う事は難しい。

そんな彼女だが、組織においては優秀だった。優秀ゆえに、思う存分、自らの行為を肯定し続けていた。

彼女は街にいる人間で、適当に彼女の感染媒体になってくれそうな人間を探した。

一台の車が街を出ようとしていた。

その車は旧型で、一人の中年男が乗っている。

「……あいつを使うか」

マミー・キャットは、崖から数十メートル先の場所へと跳躍する。

そして車の屋根の上に飛び乗ると、窓ガラスを蹴破って、中へと侵入した。

その間、十秒にも満たない。

そして、中の男は何が起こったのかも分からず、ハンドル操作を誤って、車を転倒させていた。マミー・キャットは男の首筋に人差し指と中指を突き立てる。

そして爪の先から、彼女の体内で生成している薬物を注入した。

どくん、どくん、とマミーの指が血管を浮かび上がらせて脈打っている。

男は、爪を突き立てた部分の皮膚が、緑色に変色している。そのまま、しばらくすると、中年男は、白目を向いて、気絶する。彼女は爪を引き抜いた。

マミー・キャットは、車を出ると、まるで獣のように吼えた。

「キマイラは困だ。こんな楽しい事、奴にやらせてたまるか」

数分ほど、時間が経過した頃だろうか。

彼女が爪から薬物を感染させた男が立ち上がる。

男は白目を向いて、涎を垂らしながらも、口元はがたがたと両歯をかき鳴らして、笑っていた。それはマミーの笑いと重なる。

「行け、私の下僕よ。この街に新たな私を作り出してこい」

と。男は、のたのたと街の外へと向かっていく。

彼女はぴくりと、眉をしかめた。

「おい、お前、街はあっちだぞ？」

男の挙動が予想と違う。そして彼女は考える。

にやり、と笑った。

「.....なるほど、そうか、お前、この街の人間じゃないのか。帰巢本能は別の場所に向かっているのね。おそらくは、向こうの貧民街の方か。いいわ、行ってらっしゃい」

二日目

キマイラは雨の街に着いて、教会を探していた。

何名かの街の人間に話を聞き、実際に街の地図も入手したのだが、ここには一件も、教会は無いらしい。

キマイラは不審そうな顔をしていた。

「もしかして、教会ってというのは、他の建物に偽装しているのかしら？」

マミー・キャットは、確かに此処には教会があると言っていた。

「って事は、あの女の方が、何かミスを犯したのか？ 連絡してみるか？」

と、考えてから、止める事にした。

「教会ってのは何かの隠語なのかもしれない。たとえば売春宿とか、賭博場とか。取り敢えず、そこを片っ端から当たってみるか」

彼女の今回の任務は、これまでに行ってきた、マフィア組織や対立する組織の潜入とは違い、単純に敵地に侵入して、敵を倒しまくるというタイプではない。

ほぼ何も情報の無いところから、目的の場所の情報を集める。

それだけなのだが、中々、難しい。

「でも、マミーにすぐに頼るのは癪なのよね」

彼女のそんな感情を逆手に取って、上司はキマイラの教育を行っているのかもしれない。

だとすると、本当に癪だ。

教会とは、一体、何なのか、か。……。

それよりも、彼女はもっと奇妙な話が気に掛かっていた。

彼女が情報を聞いた相手は、ホームレスだった。

ホームレスは街の情報に詳しい。

だから、彼女達のような闇の機関に所属している人間はホームレスを重宝している。

大体において、ホームレスは社会からあぶれ出した者達。

そういった者達ほど、社会の全体像をよりよく知っている。傍観者の目を持っているからだ。

「……まあ、いいわ。そろそろ休むか。街に着くなり、歩き通しだったし」

と、彼女は喫茶店へと入った。

喫茶店では、痩せた若い男がウェイターをやっていて、注文を聞いてきた。

彼女はチーズ・ケーキとパフェ、ホット・ミルクを頼む。

また、いつもの癖で。

料理が運ばれてくると、またぐちゃぐちゃに混ぜて、食べたくなる衝動に襲われた。

ミルクの中に、ケーキを突っ込んで、それをパフェに溶かして食べる……。

彼女の悪食はいつもだった。

ハンバーグとラーメンと掻き混ぜて食べたり。

カレーライスの中にサラダとミルクを突っ込んだり。

それをせずにはいられない。

「……しかし、何というか今日は止めておこう。偵察場所では変な人間と思われたくない……」

それにしても、まったく、自分は一体、いつまで組織に属していればいいのか。

このまま一生を終えるのなんて冗談ではない。

夢、希望、そんなものが無くなっていくのだけは分かる。

「そもそも、私のしたい事って何だ？」

特に思い至らない。

両親が生きていた頃は、何か考えていたかもしれない。

けれども、弟が両親を殺してから、弟を守ろうと決意した。

大切に、どうしようもなく愚鈍な弟を。……。

自分にも異能の力がある事に気付いたのは、十二歳くらいの頃だったか。

元々、彼女は変な子だというのが、両親や親戚からの見解だったが。それは、彼女の能力に基づいているもので、彼女の在り方がそのまま自身の能力に繋がっていた。

彼女は、何かと何かを“混ぜる”という事に異常なまでに執着していた。

その混ぜる、という行為が、そのまま彼女の力に反映されたものだった。

異質で異形の力に。

「まあ、いいわ。私は負ける事なんて在り得ないから」

彼女は店員に金銭を渡すと、喫茶店を出た。

その眼には強い意志が宿っていた。しかし、強く押せば、すぐに粉々に砕けてしまいそうなガラス細工のような意志。

その店の店員はゼロムだった。

ゼロムは、不思議な雰囲気を持つ奇妙な客を、しげしげと横目で見ていた。

後に、彼らはまた再び別の形で会う事になる。

十

新しい人間がやってきた事になる。

彼女の名前はノルン。

彼女は衰弱していて、丸一日、ベッドで寝ていた。

そして、彼女が教会に来て、二日目の朝頃に彼女は目を覚ました。

彼女に積極的に話し掛けたのは、リーデラという少女だった。

リーデラいわく、ノルンはどういえばいいか分からないが、浮世離れした子だった。

世間の常識を基本的に知らない。

地理や社会問題も分からない。

しかし、本から得た知識はやたらと多かった。

年齢は十代くらいに見えたのだが、聞くところによると二十を過ぎているという。

これまで、どういう場所で暮らしてきて、どういう生き方をしてきたのか、答えてくれなかった。

聞いてみても、何だか曖昧に言葉を濁して、結局、聞けずにいる。

何か後ろめたい事でもあるのだろうか、とも思ったが。何というか、むしろ、言っても分かって貰えないというような感じがした。

何だか、どうしても、此処に送られてくる孤児と同じようなタイプに見える。

どこか寂しそうで、人との付き合い方が下手そうな。……。

彼女は料理もろくに作れないみたいだった。

その事に関して、とてもショックを受けているみたいだった。

たとえば。

卵の割り方が分からない。

その事実だけで、ノルンは酷く落ち込んでいた。

ゼロムはどうやって励ませばいいか分からないが、ノルンはすぐに、これから覚える、と意気込んでいた。

十

問題は、だ。

私は勝ち取らなければならない。

私には人生の背景がまるで無い。

これまで培ってきた私という人生の歴史が酷く希薄だ。私はきっと何物でも無い失敗作に他ならないときっぱりと宣告されているし、組織の微妙なルールによって生かされ続ける事が決定しているだけだ。

だから、私は自分自身を新たに創造しなければならない。

名前だって、自分で考えたし。何者かに付けられた標記番号じゃない。

私が処分されずに生き残った事には何かきっと理由がある。

それは、組織にとっての理由じゃなくて、もっと大きな存在から与えられた理由。

少なくとも、私はそれを信じたいし、それがある事を前提に生きているのだ。

……………。

リーデラとはすぐに打ち解けた。

金髪の巻き毛に、チェニックのようなゆったりとした服を着ている少女。

彼女は話しやすい子だったからだ。

とにかく、笑みに屈託が無い。

自然と話し掛ける事が出来る。

私のどうだって良い話だって、ちゃんと聞いてくれる。

それから、私の内情には深く突っ込まない。

それは、とても助かった。

私の人生なんて、とても外の人間には話せるようなものなんかじゃないから。

もし、話してしまったら、一体、どうなるのだろうか？ ……分からない。

「だから、ノルンは恋に恋をしているのよ」

そんな感じだ。彼女は年齢の割りに大人のようにも見えた。

自分自身の欠点についてもよく話す。

彼女はすぐに、ここを出て、自立したいらしい。

教会では、炊事洗濯を積極的に行っている。

彼女は、家事一般がとても得意で、とても好きらしい。

ちなみに私は、包丁でのタマネギの切り方とか、お椀の洗い方などがまるで分からなかった。

これはもうどうしようもない。

いつも、“ヘッドレス”がやってくれていたものに、今は自分でそれらに挑戦している。

多分、これが一人で何かをやるって事なのかもなあ、と思った。

「でも、何だろう？ ほら、恋すると女の子って変わるって聞いた事あるの、私は変わりたいから」

「恋ってするものじゃなくて、自然に気付くものよ」

「自然に気付くもの？」

「なんだろう？ ほら、いつの間にかしているのよ。気付いたら、好きになっていたって事」

「よく分からない」

ふふっとリーデラは笑う。

彼女はきっと、恋について知っている。

もしかしたら。今、好きな人がいるのかもしれない。

何だか不思議な感覚がした。

恋愛は幻想的なイメージがする。お話の中にある話。

それを『ノルン』はこれから行おうと考えている、頭の中でもやもや、と異性像を作り上げていっている。

素敵な男性。綺麗な顔をして、身長も高くて。きっと歌声も澄んでいる。

そう、私の名前は『ノルン』。神話の女神から取った名前。

運命を司る女神、私の運命もその女神が変えてくれないだろうか。

これから、私、ノルンは恋と共に生きていくのだ。

……………。

私には、製造番号以外の名前が無かった。

……………。

リーデラに誘われて、教会の周りにある花壇に水を撒く事になった。

井戸から水を汲んで、じょうろの中に水を入れる。

そして、丁寧に花壇に水を撒いていく。

そんな簡単な作業だったが、私にとっては初めての経験だった。

土の匂いが何だか心地いい。

花は色取り取りに咲いている。

赤や黄色、紫。白。

ただ気になったのは、青色の花が無かった。

「青い花って無いの？」

私は訊ねた。

リーデラは何だか、少し翳りのある声で言った。

「私、青って嫌いなの」

いつもは元気な彼女にしては、何だか変な感じがした。

しかし、すぐに彼女はその違和感をかき消すような笑顔を作る。

「そうだ、裏庭にいる動物達も見てこない？」

私は首を縦に振る。

しばらく歩いていくと、何だか鼻につん、とした臭いがこびり付く。

動物の臭いなのだという。

羊と豚が何頭か飼われていた。彼らは、じきに教会の者達の食糧になるらしい。

鶏達がたくさん、入っている小屋。

彼らは茶色の身体を震わせて、羽毛をまき散らしていた。

私は木で作られた柵に指を入れて、掴もうとする。

「あっ、この子、卵産んでいる」

と、リーデラは一羽の鶏から卵を取る。

「そうだ、オムレツ、一緒に作らない？」

私はふっと思った。

動物達を可愛がると、殺して食べる時、心が痛くならないのだろうか。

それを彼女に訪ねてみる。

すると。

「確かに、それは痛むよ。でも、私達の一部になるから。私達は彼らに感謝して生きなさい、っていつもレデル先生が言っている」

「そうなんだ」

「ええ。みんなに命の大切さを分かって欲しい、ってのもあって。ここでは食べるための動物を飼ったりしているの」

「そうなんだ」

命か。

分からない。……。私には分からない事ばかりだ。

「そうだ。オムレツに使う材料を買いに行かない？」

「買いに行く？」

「うん、タマネギとひき肉。それからケチャップも。この教会は、多少、自給自足しているとはいえ、やっぱり毎日、食べられる分の野菜や肉って買わなければならないから」

そういうことで、私達二人は、街の食料品売り場へと向かった。

「ここに、教会なんてものはやはり無いぞ？」

キマイラは溜め息を吐いた。

裏通りの人間に聞き込みをして、教会を探したのはいいものの、やはり、ここに教会なんてものは無いし。何かの別名で、いかがわしい場所を教会と呼んでいるわけでもないらしい。

教会は無い、と素直に報告するべきか。

でも、それは自分の無能さを晒す事になるのですごく悔しい。

やはり、年齢相応の事しか出来ない。

そんな事を思われるのがすごく悔しい。

あの女に嘲笑われる事が、もうどうしようもない程に悔しい……。

それにしても、今晚は何処に泊まるべきか。

適当な宿を見つけるしかあるまい。

ふと、市場を何気なく歩いていると。

二人の少女を見かけた。

特に、ことさら、何があって目に留まったわけでもない。

ただ、一人のうち、髪が腰まである方の少女に違和感を覚えたからだ。

灰色に、少し銀が混ざっている。

この雨の街に住んでいる住民達の髪の色は、大体、金髪やブラウン、それに黒ばかりだ。そういった髪の色に混ざって、やはりその少女は一人、浮いていた。

はっきり言ってしまうえば、彼女は目立っていた。キマイラ以外の他の道行く人々の何人もが、灰色の髪の少女にちらちらと目をやっていた。

止せばいいのに、と彼女は思う。

何処の地方の者か知らないが、こんな場所では目立ってもトラブルに巻き込まれやすいだけだろう。

彼女というもう一人の方は、淡い金髪を二つに分けて巻いている。

二人のうち、金髪の方が持っている買い物カゴには、タマネギが入っていた。

彼女達は市場の店員に話しかけていた。

どうやら、ハンバーグか何かに使うひき肉を買おうとしているらしい。

しかし、どうも様子がおかしい。

「ねえ、お嬢さん達。こっちの黒魚も買っていかないかい？ 安くしておくからさ」

少女二人は、困った顔をしていた。

「これ、すり潰して口にするだけでいいんだ。料理に入れてもいい、どうだい？」

「あの、その……」

店員の眼の色はおかしかった。少し黄色く濁っている。

彼女達二人は、どうやらろくでもない店に引っ掛かったみたいだった。

どう見ても、店員はバイヤーだった。

気付けば、身体が動いていた。

「おい、お前。それ焼いた魚なんかじゃなくて、“黒ムカデ”だろう？ 何で、堂々とドラッグなんか売りつけているんだ？ ここの警察は何をやっている？ お前、それで未成年を薬漬けにして、食べ物にしようというのか？」

キマイラは二人の間に割り込んだ。

店員はキマイラを見て、ぷっと笑い声を漏らす。

「おやっ、これはまた。可愛いお嬢ちゃん。駄目だよ、お嬢ちゃんのようなのが、そんな汚い話し方しちゃ。それにねえ、これは魚だよ。スープのダシに使ったりするの。駄目だよ、そうやって大人の人を困らせちゃ」

「そうか、なら。お前、それ全部、体内に注入してやろうか？」

キマイラは、カツオ節に似たそれを掴むと、目にも留まらぬ速さで、その店員を殴り付ける。しかし、殴打した音は聞こえなかった。

キマイラの手の中から、その黒いカツオ節に似た塊は消えていた。

ぷふっ、と店員は口元から笑い声を漏らす。

そして、笑い声は大きくなり、店員は唾液を大量に吐き出しながら、狂ったように笑い続ける。

。

キマイラは二人の少女の手を引くと、店から引っ張り出す。

「行くわよ。あの手の人間は余り、関わらない方がいい。貴方達、災難だったわね、ひき肉だったら、別の店で買いなさい」

三名は、市場から離れる。

しばらく走って、市場を抜けた。

雨を防ぐ上部区域と下部区域を繋ぐ、階段がある辺り。

この辺りは、人が少ない。

少し走ったので、少女のうち二人はぜいぜいと、荒く息を漏らしていた。

帽子を被った少女の方は、呼吸一つ乱していない。

十

「まったく、この街は治安がよくない。貴方達、本当に気を付けなさい」

帽子を深々と被った少女は、市場から私達二人を連れ出していた。

「肉料理でも作るの？ なら、あんな胡散臭い連中が集まる市場なんて止めて、普通の肉屋とか雑貨屋に向かえばいいじゃない」

「.....確かに、地下区域の西ブロックはあんまり良い場所じゃないけれども。重宝する食材とかもあって」

リーデラはしどろもどろに言う。

「それよりも、人体の汚染から身を守る事を考えた方がいいと思うわ」

その少女は、私達よりも年下のように見えた。

しかし、物腰は私達よりもずっと、しっかりしている。

「あの店員、どうしちゃったの？」

リーデラが訊ねた。

「さあ？ 急性薬物中毒で死ぬかもね。何せ、口からでも粘膜からでもなく、丸ごと全部、血管などに直接注入しちゃったから」

「えっ、ちょ……！」

「……………冗談よ、冗談。まあ、死にはしないでしょ。たぶん」

と、笑って見せたが、明らかにあの店員の命は保障出来ないだろう。

「それにしても、この辺りで泊まる場所って無いかしら？ 安くて、人が多くない静かな場所がいいんだけども」

彼女は、周囲を見渡す。

「えと、名前、何て言うんですか？ 私はリーデラ、この子はノルン」

「ああ、私はキマイラ。ギリシャ神話の色々な動物の頭と身体が混ざっている怪物と同じ名前。よろしくね」

「そう、ちょっと変わった名前ね。そうだ、キマイラ、宿を探しているんだったら、どうせなら教会に来ない？」

「……“教会”？」

それを聞いて、キマイラは明らかに訝しげな顔をする。

「この街に、教会があるの？」

「ええ、教会といっても、レデルや私達がそう呼んでいるだけなんだけれども、とにかく、来て貰えれば」

彼女は頬に手を当てて、少し何かを考えているみたいだった。

しかし、すぐに私達の後に行く。

リーデラと私は、キマイラを山沿いの場所へと案内する。

そこには、洞窟があった。明らかに人工的に加工された形跡のある洞窟だ。

洞窟の方を抜け出る。

すると、所々に十字架が掛けられている。

キマイラはちょっと驚いたような顔をした。

「なるほど。……精神病院を教会と呼んでいるの」

「ええ。病院といっても、もうやってなくて。今は孤児院みたいな形になっているんだけども」

辺り一面は、傾斜のある森に囲まれている。

まるで、閉ざされた空間のようだ。

「ここ、すごいわね。位置的に、病院を隔離していた場所のように見えるわ」

「昔は、そう使われていたらしいわよ」

「なるほどね」

と、キマイラは頷いた。まるで、何かを分析しているかのよう。

レデル先生はどうやら留守のようだった。

それから、この時間帯はどうやら誰もいない。

キマイラはまるで、吟味するように教会の内部を見回していた。

「さて、オムレツ作ろう、キマイラも一緒に作らない」

キマイラはリーデラからそう言われて、きょとんとした顔をしていた。

キマイラは、うーんといったような顔をする。

取り合えずは、三人でオムレツを作る事になった。

十

「調味料が足りないわね」

「あんまり塩とか胡椒とか多く入れちゃうと、身体に悪ってレデル先生がよく言うわ、大体、ケチャップだってどんな化学薬品が入っているか分かったもんじゃないから」

「ああ、……これ殻入っている……」

私はオムレツを租借していると、中で異物を見つけて、口から出した。

「だれ？ 卵割ったの。……って、私か」

「殻くらい、いいじゃない」

キマイラは胡椒とマヨネーズをオムレツの上に振りかけて食べる。

他には、昨日の夕食のときに余ったバターロールとサラダを三人で食べていた。

「ねえ、病気になるわよ？」

リーデラはキマイラの食べ方を見て、怪訝そうな顔をする。

それにしても、もうすぐちゃんとした夕食の時間だ。

そろそろ、レデル先生や、他の者達が帰ってくる頃だろう。

「いつも、ここは人がいないの？」

キマイラはリーデラに訊ねた。

「今日はたまたまよ。ガーデンですらないし。作業所に見学に行ったみたい。私はノルンを見ているように言われて、残っているだけで」

「作業所？」

「何？ それ」

私とキマイラはほぼ同時に聞いていた。

「作業所。まあ、教会の外に行って。あたし達のような子でも働ける場所を見に行くの。そこでは、比較的、普通の人間よりも柔らかかに仕事とかさせてくれるから」

彼女の声の裏側には、何処か沈鬱な感情があった。

まるで、普通の人間と自分達は溶け込めないのだろう、と言っているかのような。

「それって幸せなの？」

私は思わず、訊ねていた。

明るいが、何処か陰のある少女は沈黙する。

聞いてはいけない事を思わず、聞いてしまったんだと気付いた。

罪悪感。駄目だ。

私はちゃんとこれまで、人とコミュニケーションを取ってこなかったんだと。

数年前に屋敷に来ていた者達も、知らない者達ばかり。中には名前すら教えてくれなかった者もいた。私に剣術の真似事や、外国語、楽器を気まぐれで教えたりしてくれた人達。きっと私の反応が見たかったのだろう。教えて貰った事の全てが、今では生活の何の役にも立っていない。

.....

「私達は、レデル先生は否定するけれども。.....生きているだけで、幸せだろう。って言われているくらいだから。.....」

回想から引き戻される。

私は困惑していた。

何だか、自分が凄く酷い人間のような気がしてきた。

どうフォローすればいいのだろう。分からない。

「えと、ねえ。たとえば、リーデラは変なの？」

「私は.....色が怖い。外の世界で、もし青に出くわしたら、どうなるんだろうって.....」

彼女はそれだけ告げた。

十

私とキマイラは同じ部屋で寝る事になった。

それから、新しい生活のストレスの為か頻繁に躰される私を気にして、リーデラが部屋に入ってきた。

そして、何故か、ガーデンもリーデラの隣に寄り添うように着いてきていた。

女、四人だ。

みんなそれぞれ、枕に抱きついたり、毛布の中で何度ももそもそと動き回る。

眠れないのだ。

「ねえ、みんなって何歳？」

キマイラはベッドの上で何気なく聞いた。

「あたしは十七、キマイラは？」

「十五、他の二人は？」

「私は21かなあ。22かもしれない.....」

「.....十八、です」

ガーデンが小さく答えた。

「一番、年下のキマイラが何か大人よねえ」

リーデラは言う。

「そうかしら？ 別に私はそんなつもりはないけれど、ただ」

彼女は言葉を濁らせる。

「色々、あったから」

それ以上は答えない。

なので、私を含めた他の二人もそれ以上は聞かない。

この施設にいる者達は、多かれ少なかれ、何かあって生きてきたのだ。

「なんだろう。早熟だったのよね。周りの大人達が物心付いた頃から馬鹿に見えたし」

「そうなんだ。私は逆に遅熟だったかなあ」

と、私は言う。

ガーデンが何か言いたそうだったが、彼女は口をつぐんだ。話す事が苦手な少女だ。

それでも、他人の話には熱心に興味を持っているみたいだった。

「そういえば、キマイラ、何でこの街に来たの？」

その質問に対して、彼女は口をつぐむ。

そして、確かに口の中で舌打ちするのが聞こえた。

私には気付いた。聞かれて返答する答えを用意していなかったのだろうと。

「……………家出、よ」

「家出ですか？」

ガーデンが小さな声で訊ねた。

「そう、家出。気に入らない親でさ、思わずね」

それ以上は聞くな、といったような顔をする。

嘘を付いているのが私には分かった。

「ねえ、ノルン。貴方は何でここに来たの？ おじさんに連れて来られて。貴方も家出なんじゃない？」

と、リーデラが聞く。

「そうね、私も家出。私もそれ以上は答えられない」

リーデラは、ふうん、といった相槌をする。

私は理解した。

キマイラと私は、全然、タイプは違うけれども、きっと同類なのだろう、と。

少しの間、沈黙が訪れた。

リーデラはマズイ流れになったなあ、といった顔で話題を変えようとする。

彼女は少し目線を泳がせる。

そして、何かを思い付いてそれを口にした。

「ね、ねえ。みんな、好きな男の子のタイプとかってある？」

私はぶっ、と苦笑した。

まるで、昨日の話の続きだ。

私が恋をしたい、といったから、それを蒸し返しているかのよう。

「ねえ、どんな男の子が好き？ キマイラ」

「ううん、そこのところ、分からないのよね。そういうものとは無縁に生きてきたから」

リーデラは心底楽しそうだった。

「ガーデンは？」

「私は……」

彼女は顔を赤らめる。

誰か意中の人がいる。でも、恥ずかしくて言えないのか。

それとも、単にこんな話を聞かれる事自体がとても恥ずかしいのか。

「この施設の男達は怎なの？」

私はリーデラに訊ねた。

「それは、ゼロム、オルギア、ガイツォの三名のこと？」

「ああ、そうそう。まだ、全員の名前覚えてないけれど」

「うんとね、内緒ね。私、ゼロムの事が好きなんだ」

リーデラは頬を赤らめた。

何だか、自分のスカートを弄ったりして、とても女の子っぽい仕草をする。

「あーあ、言っちゃった。何だか、恥ずかしい。ねえ、ねえ、他のみんなも何か、秘密、打ち明けなよ」

屈託の無い笑み。

他の三名は少し困惑したような顔をした。

帽子を目深に被った少女が、ふと思いついて話す。

「そうね」

キマイラはずっと被っていた、ニット帽を取った。

すると、私も含めて、他の三名は驚いた顔をする。

角だ。

羊の角のようなものが頭の両サイドから生えていた。

「ああ、やっと帽子を取れた。蒸れて気持ち悪いのよね」

そう言いながら、金色に、少しだけ深緑の混ざった髪をぼりぼり、と掻いた。

「それ、本物？」

「ええ、生まれつき。両親は切除手術を考えていたけれど、私は気に入っていたから。なんか、悪魔の角みたいでしょ」

彼女は楽しそうに笑っていた。

周りからみれば、不憫にも取れるが、当の本人は気に入っているみたいだった。

「それ、大変じゃなかった？ 学校とか」

「そうね、年齢を重ねるごとに大きくなっていっているし。あと、学校は行った事が無い」

キマイラは淡々と言う。

まるで自分自身が異形の怪物である事が当たり前なのだと受け入れているかのようだった。

その事に対して、私は少し心が痛む。

「私の秘密も教える」

私は自分の右袖をめくり上げる。

すると、製造ナンバーの印刷された刺青が現れた。

みんなそれを何ともいえないといった顔で見つめる。

「それは？ 何？ なんか商品のラベルのようにも見えるけれど」

「商品のラベルなんじゃないかなあ？ 私、両親いなくて、どうやらカプセルの中で育ったみたいなんだよね、ほらクローン技術とかって聞いた事ない？」

リーデラとガーデンは絶句したような顔をしていた。

キマイラは、興味深く、私の製造ナンバーを見ていた。どうやら、彼女にはこれに何か見覚えがあるのだろうか。そうでなくとも、いずれにせよ、彼女はおそらく、こういうのには馴れているといった顔をしていた。

何だか、話の流れからしてまずい事になったのかなあ、と元々、教会に住んでいた二人は微妙な顔をする。

けれども、私と羊角の少女はへらへら、としているような、あるいは淡々としているかのような表情を浮かべている。

私は右袖を戻す。

何だか、やはり自分はマトモな人間ではないのではないかと、という疑問が浮上してくる。

けれども、マトモな人間とは何なのだろうかとも思う。

十

三人が寝静まった頃、キマイラはベッドを離れた。

そして、すうっと、外に出る。

何だか、仲良くなってしまったというか、馴れ合ってしまった。

ここの事は早めに報告するべきなのだろう。

自分は彼らにとって異物以外の何者でもない。

更に言うならば、組織に報告した後、彼らの命の保障など何処にも無いのだ。

だから、決して感情移入するべきではない。それでは任務に明らかに支障をきたしてしまう事になるのだろう。何故ならば……いざとなれば、キマイラの手で、彼女達を始末しなければならないのかもしれないから。……。

しかし。

「もう少し、こんな気分にも浸ってもいいわよねえ。私、友達あんまりいなかったし」

さっさと切り上げた方がいいに決まっている。

長く馴れ合うと、後々、後悔してしまうかもしれない。

こういう空間、こういう時間を共有し続ける事。

それがどれだけ恐ろしい事なのか分かっている。

きっと、自分自身の心が、酷く鈍っていく。

もし、そういう事態になっていたら。一体、自分がどうなってしまうのか。

取り合えず、ベッドに戻ろう。

踵を返して、玄関に戻る。

すると。

ノルンだ。

灰色の髪をした少女。いや、外見こそ少女なのだが、どうも成年には達しているらしい。

「あら、貴方も月でも見に来たの？」

とはいつてみたものの、相変わらず、空を見上げれば天井に突き当たるので、やはりここは地下街なのだろうと理解する。

しかし、街中の明かりはぽつりぽつりと消えているので、今は夜中である事が分かる。

「ねえ、キマイラ。これからどうするの？」

ノルンは訊ねる。

「家出なんでしょう？ これからどうするの？」

もちろん、家出というのはでまかせなのだが、彼女はふうっと息を吐いて言った。

大体、組織の事なんて話して通じるのか？ 何と言えればいいのだろう。

「さあ？ どうすればいいのか自分でも分からないわ。まあ、なるようになるんじゃないかしら」

本当に、どうするべきか迷っていた。

このまま、マミー・キャットに報告してもどうせろくでもない毎日が待っているだけだ。それならば、少しでも、今の時間を大切にしたいのかもしれない。

時間が止まればいい、彼女は確かにそう思った。

こんなに。

こんなに、安らげる時間は、此処しばらくの間、果たして合ったのだろうか。

十

寝室に戻る途中で思った。

.....私は優しさを知らないんじゃないのだろうか。

キマイラは苦悩していた。

しかし、そんな苦悩もすぐに、新たな任務やら何やらによって考える時間を奪われていく。

きっと、自分は非情な人間に育つのだろう。それくらいは覚悟している。

ならば、きっと決断が必要になる。

そして、何よりも怖ろしい事。

そう、何よりも。

何よりも、怖ろしい事は、自分もまた、闇の部分が確実に存在しているのだという事。

まるで、悪夢的だが。

いつの間にか、マミーの支持、戦闘方法、訓練を少しずつ身に付けている。

まるで、嫌いな母親にいつの間にか似てしまう子供そのものだ。

最低な気分だ。

最悪な気分。

何で、あいつが大嫌いなのか。もう、どうしようもないほどに。

怪物と戦う者は、自身もまた怪物にならぬよう、気を付けなければならない。

何かの本で読んだ、一説。

彼女の苦悩をそのまま現している一説。

何に書かれていたものだったか、大体において、本は大量に読んで、気になった文章などは暗記していたりするのだが、肝心の書かれていた本の名前を思い出せない。

「記憶力もちょっと鍛えた方がいいかもしれないわね」

そんな事を、つれづれと思った。

昼食の時に、ガーデンがまた吐いた。

無理に食事を喉に通そうとしたからだ。

大体、彼女は食事の度に、何度も無理に口に含みながら、噛まずに飲み込む作業を続けていた。時には、口の中に溜めて、後で吐き出す事もあった。

好き嫌いが激しいとかいう次元ではない。

どんな飲食物でもそうなのだ。

本当は水を飲むのですらも、苦しくなる事が多いらしい。

人間は食事をしなければ生きてはいけない。

けれども、彼女にとって食事とは悪夢以外の何物でもないのだ。

だから、相変わらず、ビタミンや鉄分の錠剤を口に、酷く調子が悪い時は、点滴を受けて生活するしかない。

しかし、やはりレデルとしては、彼女の症状を治したいと思っている。

彼女が外の世界で生きていく為に……。

キマイラはまだ、教会に滞在していた。

何だか、此処が気に入ったのだろうか。

レデルからは、そのうち、親に連絡を取ると言われたらしい。

しかし、もう何日かは置いてくれるそうだ。

リーデラは思っていた。

ノルンとキマイラ。

彼女達が、何かガーデンのきっかけになってくれればいいと。

かくいうリーデラも、あの症状が一番酷い彼女の事を言える立場ではないのだ。

リーデラも持っている重たいモノ。

この世界に、お前は存在してはいけないんだと言わんくらいの重い荷物。

それは、いつもいつも迫り来るように、彼女を付け狙うように存在している。

それは、世界に偏在している、避けられない存在だった。

街を歩けば、空を見れば、ふとしたありとあらゆる場所にある。

それは何処にでもある。

そう、それは一色の色だった。

“青色”だ。

……………。

……私は青が嫌いだ。

みんな私に青を好きになれと強制する。

私は青について考えるだけで頭がおかしくなりそうなのに。

みんなみんな、私に青を好きになれという。

青を克服しろだとか、青を大切にしろだとか。

しまいには、青が怖いだの嫌いだのは、変だのおかしいだの。
間違っているだの。そんな事ばかり。
私は青が嫌いという理由だけで、この世界では独りぼっちだ。

……。

青が嫌いというものを、共有出来ない。
みんな、きっと青が好きなんだ、何でそんなに好きなのだろう。
目に映るもの全ての景色が嫌で嫌で嫌で嫌で。
何度も、二つの眼を潰してやろうと思った。
気持ち悪い、恐ろしくとてもとても怖いんだ。
抑圧、過去の傷。心理学用語。
止めて欲しかった。
全てが私を傷付ける。

……………。

色々な精神科医、精神分析医をたらい回しにされて、みんな彼女を傷付けた。
彼女の心の傷を切り開こうとした。
それはとてもとても、凌辱的でした。
レデルだけだった。
彼女の“青色が怖い”という恐怖を、そのまま受け入れたのは。
レデルも精神科医だったが、彼女を傷付けたりはしなかった。
只、自立に関しては真剣に話してくれた。
病気という檻に閉じ込められて、あるいは異端という檻に閉じ込められて、自分自身の可能性を潰されるのは、余りにも不憫過ぎる、と。
人はパンで生きるのではなく、言葉で生きる。
偉い哲学者の思想、発言、用語という名の世界観なんかじゃなくて、只、認められた、それが、リーデラを生かした。

十

キマイラが危惧する前に、既に、この街には危機の芽が伸びていた。
マミー・キャットは、車を襲って、彼女に従う怪物を作り出した他にも、行動を起こしていた。
マミーは街にいる一人の男を口説いた。
彼女好みの美青年を見つけたのだ。
どうやら、顔を見る限り、軽薄そうな印象を受けたので、近付いて話しかけてみた。そして、そのまま、お茶をした後。彼の家を招かれた。
そして、そのままベッドを共にした。
美青年は金髪に青い目をしており、身長は高く、筋肉の付き方が良かった。年の頃、二十代半

ばだろうか。体毛の量も彼女好みだ。

まるで、仄かな獣欲の薫りが漂っている。

「私は軽い女じゃ無いわよ？」

男は笑う。

「僕も軽い男じゃないぞ？ 何だか、君とは運命みたいでさ。でも、声を掛けてきたのは君の方からじゃないか」

ベッドの中で、二人の獣がまぐわう。

男は彼女の白いカットソーの中へと手首を這わせていくと、更に、中のブラウスを潜り抜けて、そのままランジェリーの下へと指を這わす。彼女は艶やかな声を出した。

二人は、接吻し、お互いの舌と舌を軟体動物のように絡ませ合う。

「此処も舐めて」

女は自分の下腹部の下を指した。

「いきなりかい？ もっと手順を踏ませてくれよ」

「そうね、あら、私っただはしたないわ」

その後、二人のやり取りは続く。

しばらくすると、二人共、身に何一つ、着けていなかった。

そして、男は彼女の下半身に自分のモノを入れていく。

「本当に避妊しなくていいのかい？」

「ええ、お願い」

生殖行為。

種を残す者達の肉体に植え付けられた構造。

分泌液同士が混ざり合う。

二人の肉体は痙攣する。

二人とも、恍惚と絶頂の表情を浮かべる。

まるで、蟲と蟲のまぐわりのよう。

数十分くらい、そうしていただろうか。

男の眼は明らかに空ろで、唇の端から涎を垂らしている。

マミーは服を着ないまま、男を地面に座らせる。

そして、自分の足の指を丁寧に舐めさせていく。

「私、女夢魔、サキュバスなのかもしれないわねえ」

男の寝台の上に夜中現れて、男の精を吸い尽くすと言われる悪魔。

彼女、マミー・キャットは、自身の性欲がそのまま能力となっている。

『インシニレート』。それは、彼女の肉体の体液、分泌物を通して、他人を支配する能力だった

。

先ほどの、車にて、首筋に指を突き立てて作り出した“スレイブ”は、彼女の命令に余り忠実ではない。手軽なゾンビーのようなものだ。

しかし、今回は一時間以上も掛けて、男に汗などの体液、体内で精製される下腹部の体液の混

合によって、彼女の能力を完全に“感染”させたので、完全な奴隷が出来上がったのだった。

彼女はこの街に送り込む、忠実な手駒が必要だった。

彼女は男に、長く太い鎖の付いた、鉄製の首輪を嵌める。

「さて、あなた、お名前、何だったかしら？ 聞いたけど、忘れちゃった。でも、あなた、あたし好みの美男子なのよねえー。だから、なるべく壊れないように使ってあげる。でも、ちょっとあなた、下手糞よ。それも教えてあげないと」

マミーはぐりぐり、と男の頭を踏み付けていく。

蔑みと憎しみが、彼女の中で渦巻いていた。

「さて、他にもいい男いないかしらねえー？ あたし、これが楽しみで生きているようなもんなのよねえ」

彼女は舌なめずりをする。

十

ノルンはキマイラの後に付いて、教会の中を探索していた。

教会は四階建てで、使われていない部屋も多い。

此処は、元々は精神病院なのだ。

空き部屋へと入っていくと、窓の所は鉄格子を外した形跡などが見られた。

キマイラは何かを探しているみたいだった。

ノルンは聞いてみる。

「何を探しているの？」

「本当は、あのレデルとかいう元精神科医。あいつの部屋を覗きたいんだけど、もしかしたら、他の場所にも残っているかと思ってね」

軽く指に歯を当てて、爪を噛もうとする。

しかし、少し品が無い癖だな、と思い直して止めた。

「この教会が使われているのは、二階までだ。一階は団欒場、二階には各々の部屋が当てられている。三階、四階はどうなのだろう？ ひょっとすると、何かあるのかもしれない」

彼女は何かをいぶかしんでいるように見えた。

「ねえ、何？」

「……貴方には言っていないか。あいつ、あのレデルとかいう女。あいつは何者なんだ？」

「何者って、この教会の持ち主で孤児院の主任。そして、前は精神科医じゃないの？」

素朴な疑問を聞いてくる。

キマイラは首を横に振った。

「……………マミー・キャットの奴は何を企んでいる？ この教会に何の用だ？ 何かある筈だ。私を派遣した理由も。『アップル』は何を考えている？」

ノルンにはよく分からない独り言を言っている。

彼女は唇に爪先を当てた。

「ひょっとすると、あのレデルとかいう女。……だからなのか？ この教会の調査は。...
...、しかし、なら、.....」

そんな事を口に出して言う。みる。

傍らの少女には分からない内容。

四階の部屋だった。

そこは、物置になっている。

埃臭く、何かの書類などが積まれている。

彼女は何かを探しているようだった。

ノルンは途中からキマイラに付き合うのが面倒臭くなって、窓から見える景色などを眺めていた。そろそろ、夕食の支度が済んでいる頃なんじゃないか、そう思う。

早く、戻らなくてとは。

「ノルン」

突然、名前を呼ばれた。

キマイラは何かに憤っているみたいだった。

彼女は一枚の写真を握り締めていた。

写真には二人の女性が写っている。

一人はレデル。もう一人は。

「やはり、そうなのね。レデル、彼女はマミー・キャットと同僚だった。この“教会”.....、いや、精神病院は、能力者の被検体の実験場。あの元精神科医、此処に能力者のサンプルを集めて、何らかの実験を行っているに違いないわ」

ノルンは微妙な表情を見せた。

彼女とて、部外者だ。

他の者達に、どう言えばいいのだろう。

「ノルン」

キマイラは再び、彼女の名を呼んだ。

「貴方を作り出した組織、ひょっとしたら、うちの組織か、関わりのある組織なのかもしれないわ。『アップル』か、同盟を組んでいる組織か。私が調べてみようか？ 本当は、自分が何の為に生み出されて、生きてきたのか、その全貌なんて知らないんでしょう？」

それを言われて、ノルンは当然のように困った顔をする。

首を横に振って、何と書いていいか分からない、といった表情をする。

少し、意地が悪かったかな、とキマイラは反省した。

たとえそれが事実だとしても、一体、それを叩き付ける事に何の意味があるのだろうか？

「私は、自分が何者かなんてどうでもいいの」

灰色の髪少女は屹然と言う。

まるで、それは彼女の信念のような。

キマイラは微かに笑う。

彼女は世間を知らない。けれども。

覚悟があるのだろうか、そう思った。

ふと。

ふと、キマイラは思う。

自分の人生において、本当に心を開ける人間はいたのだろうか。……。

両親だけが、彼女の理解者だったが、彼らは死んでしまった。

友達と呼べるもの。

そんなものが、あるとするなら。

十

今日も、夕食の時間がやってきた。

ガーデンは部屋に閉じこもっている。やはり、昼の食事ですしぶりに、吐いてしまった為、レデルも虐待的に彼女を皆と同じように席に座らせるのは酷過ぎると考えたのだろう。

ここの施設の者達は、多かれ少なかれ、心に傷を負っているか、あるいはどうしようもない他人とのズレを抱えている。

ノルンとキマイラ。

彼女達はいつまで教会にいるのだろう。

ノルンは身元を一切、明かさないし、キマイラもキマイラで、早く親元へと送らなければならぬ。

彼女達も、そのうち、何か仕事をあてがわれるだろうが、今の処は特に思い付かないので、二人とも、適当に遊んでいる。今日は何処に行ったのだろう。

僕は相変わらず楽な昼間の仕事が終わった後、一通り、教会の掃き掃除を手伝った。

ガイツォは食事が待ち遠しいのか、たまに奇声のようなものを発している。

オルギアは風で壊れた教会の窓の修理をしていた。

リーデラはレデルと一緒に台所でパスタを茹でていた。

僕は、箒とチリ取り、モップを倉庫へと片付けて戻ってくる。

夕食はいつも通りに行われた。

ノルンがやってきてから、三日目。キマイラがやってきてから、二日目だ。

ガーデン以外の皆が、揃っている。

レデルは柔和な顔で、皆を見渡すと、手を組んで祈りを奉げる。

「みんな、沢山、食べてね」

テーブルには、切り分けられたフランスパンとミルクココア。スパイスを盛り込んだチキンの骨付きチキンに、コーンサラダ、それからナポリタンのスパゲティーが大皿に載っている。

レデルとリーデラの二人が作ったという。

キマイラは全員を観察していた。

ノルンとリーデラ、ガーデンの事は、少しずつ分かってきた。

男性陣、ガイツォとオルギア。それから、ゼロムという名の一番、年上の男。

もし、彼女の推測が正しければおそらくは。……。

キマイラはパスタをくるくる、フォークに巻いている。

そして、それを口にしながら、フライドチキンを骨ごと、ぼりぼりっと食べていく。

レデルはむっとしたような顔をする。

「こらこら、お行儀悪い事しちゃ駄目でしょう」

言われて、彼女はきょとん、とする。

「行儀が悪い？」

「そう。ナポリタンはちゃんとナポリタンだけで食べる。それに、沢山、一気に口に含んじゃはしたないわ。こらこら、ミルクココアを一気飲みしない。まったく……」

キマイラはずるずると大きな音を立てて、パスタを啜る。

「ちゃんと、親御さん、しつけなかったのね……」

キマイラは少しムッ、とする。

少しでも、両親の悪口を言われるのは嫌いだ。

「別に、口に入って、美味しく食べればそれでいいんじゃない？ テーブル・マナーなんて、くだらない、って私思っているわ」

「駄目なの。みっともないから、それに女の子じゃない。少しでも品性は持たないと」

「馬鹿みたい」

ノルンは笑った。

リーデラも笑った。

二人のやり取りが微笑ましく見えるのだろう。

キマイラは大人びているが、やはり、子供な部分も多少あるのだ、みんな、そう思った。

彼女だって、きっと普通なんだと。……。

十

「ねえ、ノルン。一緒にお風呂に入りましょうよ」

と、リーデラは言った。

教会では、最低でも、二日に一度は入浴が義務付けられている。

あんまり、身体を洗わないと、不潔で仕方が無くて衛生にも悪いとレデルは言う。

浴場は、教会の別館に設けられている。

そんな事を誘われて、とても困惑してしまう。

キマイラは、相変わらず、つん、と構えていた。

「ねえ、キマイラもどう？」

「……人に裸って見せたくないのよねえ」

リーデラは、小さく溜め息を吐く。

「ほら、恥ずかしがってしちゃ駄目だって。レデル先生も言っていたよ。ガーデンなんかも、ず

っとお風呂、嫌いだったんだけど。今では、一緒に入ってくれているし」

羊の角を生やした少女は、少し、口元を歪め、目を吊り上げてから言った。

「私には、必要無い。……それに、……私の身体は見ない方がいい」

と、リーデラを少しだけ睨み付ける。

「お風呂、自体、私必要無いのよね」

「えーっ、不潔。それに、キマイラは女の子でしょう？」

キマイラは考える。

彼女の能力ならば、風呂など入らずとも、肉体の代謝の促進によって、発汗、垢などを処分する事が出来る。皮膚の表面に付着した汚れも、掌や足の裏へと集中させて、そこから排泄し、処理する事が出来た。

そんな化物じみた能力を、余り彼女達に明かしたくない。

それに。

『カクテル・パーティー』のせいで、首から下の肉体は、今は少し人間の肉体構造をしていない。見られるのは不快だ。

「あのね、じゃあ、着替え。着替えは流石に必要なだから。それでいい？」

と、彼女は自分の服に、触れる。

奇妙な事に、着たきりの、この服は。汗の臭いがまるでしない。

というわけで、キマイラは頑なに、入浴を拒否したので、さすがにリーデラは、それ以上は、話を振れない。

リーデラは、“女の子同士でお風呂に入りたい”という、コミュニケーションを行いたいのだろう。キマイラはそんな彼女の微細な感情に気付いている。

……まったく、人前で無防備な裸を晒すって。余り、頂けないわね。

服の中に武器を隠す事も出来ないし、もし襲撃された時、迂闊にも恥ずかしくなってしまう、全力で敵と戦えないかもしれない。

そんな事を考えて、心の中で溜め息を吐く。

……私は、彼女達を、未だに警戒しているのか。

生きてきた、というよりも、今、生きている環境が環境なだけに、どうしても、そのような発想を頭の中に思い浮かべてしまう。

……………。

そんな風に、戸惑っていたのは、キマイラだけではなかった。

ノルンもノルンで困惑していた。

彼女は生まれてこの方、他人と一緒に入浴するという体験をした事が無い。

加えて、身嗜み、礼節を一応の処、教えられていた為、他人様の前では、生涯を共にする殿方以外は、裸を見せるものじゃないと言われた。

……表向きはそうだが、もしかすると、彼女の肉体構造は、見る人間が見れば、完全に把握されてしまう為、そう告げられていたのかもしれない。

「わ、わあ、分かったわよ。ノルン、じゃあ、バスタオル、もしくは、バスローブを更に身に付

けて、一緒に入浴しましょう？ それでいいわよね？」

リーデラは思わず、あんまりしつこいと、変態みたいだななあ、と思わず苦笑してしまった。何だか、自分が馬鹿みたいだ。

浴場の中へと向かう。

浴場の前には、ロッカーが作られていた。

男子と女子では、使う時間帯を明確に決められている。

今は、女子の入れる時間。

男達は、そういった集団での入浴を気にも留めないというのに、女の子達は本当に、微細な性格の子ばかりだなあ、と。リーデラは改めて思った。

……………。

彼女が、他人との入浴を好むのは、実は偏執的な病気のせいもある。

“青が怖い”。

浴場の壁は、灰色のペンキで塗られ。床のタイルも薄い黄土色をしている。

昔は壁が青かったが、レデルの気配りによって、灰色に塗り替えられたらしい。

青、青を排除していった。

けれども、怖いのは。

水を見た瞬間から、青を思い出す。

水は、青の色だ。

無色透明でこそあれ、水は青を映す鏡に近い。

怖い、怖い、とても怖い。

そういった苦悩を少しでも排除する為に。

リーデラは、青に対する認識を頭の中から追いやろうと、意識を他の人間に向けるように、入浴仲間を探す。

どうしても、青が在る場所、青に近い場所に向かう時も、いつもそうだ。

彼女は表層的には、一番、この世界に適応しているように見えるが。実は、そういった小さな努力の積み重ねによって、殻を纏うように、自分を作り上げていった。

他人との入浴が苦手。もしくは、入浴それ自体が苦手。

ひょっとすると、二人にも、そんなリーデラには分からない苦悩があるのかもしれない。だから、無理に強制する事は、本当は駄目なんだ、と思う。

リーデラはシャワーを浴びた。

一糸纏わぬ姿。

ノルンは明らかに恥ずかしそうな顔をしている。

リーデラから、目を背けている。

同性だからいいじゃない、といった話を振ろうとするが……よく考えてみれば、ノルンには、同性と共に生きてきた経験が無い。……………。

ひょっとすると、ノルンはノルンという性別であって、みな異性に感じるのかもしれない。

「ね、ねえ。ノルン」

ノルンは、湯船の中に浸かっていた。

まるで、寝顔のように安心している。

「ノ、ノルン、い、一緒に……」

一緒に背中の中の流しっこしよう、と口に出そうとして、言葉を止めた。

そして、一人、首を横に振る。

「ね、ねえ、ノルン、その、あの、よければ、ノルンの髪の毛、梳いていいかな？」

ガーデンが、徐々に心を開いていった時。それを思い出す。

こんな風な、スキンシップを積み重ねていった。そうやって、ガーデンと裸の付き合いをした。彼女は自分で作った“青の否定”の証を見せて。ガーデンからは普段は厚着によって覆い隠している、肋骨が浮き出ている酷くガリガリに痩せ細った、今にも壊れてしまいそうなガラス細工の身体を見せて貰った。お互いに綺麗だよ、と言いつつ。

ノルンはまだ、駄目だ。

まだ、もうちょっと彼女の心の壁を突き抜けるのは早過ぎる。

リーデラは少々、自己嫌悪に陥る。

……これじゃ私。まるで、レズビアンみたいじゃない。

リーデラは、女の子同士の触れ合いに憧れている。

みんな、仲良くすればいいと思っている。

けれども、ここの施設の女達は、みな、彼女自身も含めて、男達以上に難しい連中ばかりだ。抱えているトラウマの量が大きいの、何が引き金になるのか分からない。

そういえば、レデル先生から聞いた話なのだが。

男性に性的な暴力を振るわれた女性で、たとえ、同性同士であっても、裸を見せる事が出来なくなった、というケースを聞いた事がある。

出来ない事、やれない事、触れられたくない事は誰だってある。

それは、自らが痛い程に、身に染みて分かっている。分かっているのだが……。

十

「あんまり、人と一緒にお風呂に入る習慣と違って、戴けないと思うのよねえ」

キマイラは冷めた声で言った。

さすがに、服は着替えている。着替えの服くらい、自分で幾つも用意してある。

その着替えの服を入れる鞆だって、いつも着ている服の中に閉まっていた。

しかし、代謝機能をコントロール出来ると言っても、身体にこびり付いた垢や汗などを好きなように排出出来ても。どうしても、服の方には汚れが付いてしまう。

歩いている時に付着する埃だとか、食事中に付いたパスタのシミだとか。

洋服を洗おうか、と言われたが、それも拒否する事になった。

……服の中に仕込んだものは、他人に見せるべきものではない。

「本当に、キマイラって難しいよね」

リーデラは不満そうに言った。

「みんなの方が変なのよ。たとえば、部屋。部屋とか壁ってのは、領域を作るって事。自分の領域を。余り、そこに他人がずかずかと踏み込むべきじゃないわ。本当、みんな他人の部屋に行きたがるわよねえ」

ガーデンは、びくっと慄いたような反応を示す。

心当たりがあるのだろう。

部屋に籠りたがるタイプなのか。

他人の部屋に行きたがるタイプなのか分からないが。

ひょっとすると、その両方かもしれない。

……………。

ああ、それにしてもだ。

キマイラは考える。

自分の思考の奇形性。十五の癖に、何でこんな事を考えてしまうのか。

大人達が彼女を見る視線が、とても不快だった。

同い年の人間と見ている世界が違うんだろなあ、と思う。

あるいは、普通の人間と見ている世界が違うのかもしれない。

人とズレて生まれてしまうと、他人の見えないもの、感じないものを、見えたり、感じ取ったりしてしまう。

それが、どれだけ苦悩を伴うのか、知らない人間は、本当に知らない。…………。

それにしてもだ。

この教会に来て、もう三日も経つのか。

何だか、だらだらと居つく事になってしまった。

彼女は思う。

少しだけ、諦めていた。日の光のような。

“任務”など忘れてしまいたい。あるいは、全てが無かった事に。

そうすれば、どれだけ楽なのだろうか。…………。

自分の心境の変化に、彼女は困っていた。

…………居心地がいい。

未だ、心の開き方とか分からない。どんな会話だったら、人に喜ばれるのだろうか？

そんな風に、暗いながらも前向きな事を考えられるとは思わなかった。

だが。

彼女は眼を閉じる。

「十代の頃。監獄に行ったら、一生、監獄だって聞いた事がある。子供の人格形成だとかも、将来だとかも。十代の頃、作られる、と聞く。…………」

「えっ、何？ キマイラ？」

ノルンは屈託の無い笑みを浮かべる。

彼女は年齢の割には、人格が幼い。むしろ、キマイラにとってはそれが何処か羨ましくもあり

。寂しくもあり。

「私達は何にも為れないし、どこにも行けないんだ。きっと……」

キマイラはそう呟いた。

「えっ、何？ キマイラ。ぼそぼそと喋っていても、聞こえないんだってば」

ふと、ノルンは立ち止まる。

そして、道端にしゃがみ込んだ。

何やら、花を手を取った。

赤い花だ。彼女は嬉しそうに、それを撫でている。

この街には、青空は無い。いつも、どんよりと曇っている。

キマイラはノルンの強い少女性を見て、口元に笑みが浮かぶ。綻ぶ。

彼女は辛くないのだろうか？ ふと思う。いつも何だか、楽しそうだ。

そして。

自分自身の思考に言葉を失う。

キマイラは、自分のこめかみの部分に指を当てる。

そして、そのまま瞼のふちを軽くマッサージするようになぞった。

涙腺を押さえていた。

ああ、泣きそうだ。

他の女の子みたいに、泣いてしまいたい。崩れ落ちるように。

けれども、キマイラはこれも生まれ付き持ってしまった、強靱な意志が、それを赦さなかった。人前で泣けない。無意識のうちに、防御してしまう。

本当は、ずっと辛い。ずっとずっと辛い。

けれども、自分自身の強さがそれを赦さない。

更に、恐ろしいのは。

自分自身の感情、情緒すらもコントロールしてしまえる、自分自身の能力。物心付いた頃から、持っている。他人とは違う異形の力。

平気で、その姿も、精神さえも、人間らしさを止めてしまえる能力。

そう、彼女は気付いている。

この能力故に、自分の先天的な明晰さ、強さが備わってしまったのだと。……。

自分自身の内なる怪物を抑える為に。

そしてふっと、思い出したように。

「ノルン。恋愛がしたいかあ」

と、訊ねた。

「うん。……キマイラはしたくないの？」

「無いのよね。そういう感情が。欲望が。私。……自分で自分の脳、弄っているから……」

「へえ、そうなんだ。……って、えっ？」

「そんな事も出来る能力だから。それに」

キマイラは、少し逡巡する。

「それに、私は先天的に狂っている。ちゃんとした、診断は出されなかったけれども、サイコパスの素質が強い、って言われている。感情が希薄で、人格に欠損があるのよ。この角が関係しているかどうか分からないけどね、私は頭、おかしいらしいの」

「そうなの……？」

「ノルンが。実験体であるように、私も奇形」

自嘲。

そして、何処か空虚感が溢れ出していた。

きっと、孤独さえも伴っているのだろうか。分からない。

「私、リーデラともっと話そうと思う」

キマイラは呟いた。

「考え方とか、違うんだろうけれども。噛み合わない部分とか。……ひよつとすると、もうすぐ、二度と会う事が出来なくなるかもしれないけれども。それでも……」

彼女は、強く決心していた。

「そう……。じゃあ、私はガーデンと仲良くなる。リーデラとはもう仲良しじゃん、私はガーデンと話してみたい、たくさん」

二人は笑った。

会ってまだ、二日だけれども。とても大切な。

そんな相手になるのかもしれないと。

予感。

ゼロムは、工作中に眩暈がする。

意識を失いそうになる。

見えるのは、深い夜の景色だ。

沢山の雨粒。赤、赤。

真っ赤。

それが、フラッシュバックして脳内を駆け巡り、視界に映る。

ふと、気が付くと、仕事場にいる。

大量の汗が浮かんでいる。

コップを手にして、それを洗う処だった。

落としていない、大丈夫だ。

そう、大丈夫。

決して、過去の記憶に負けるつもりはない。

これから、何年も何十年も生きる。だからその為には、今を生きないといけない。

仕事を覚えるのは大変だった。……いや、もしかしたら、逆に楽だったのかもしれない。無心で覚えていれば、過去を思い出さずに済んだ。

けれども、仕事に慣れてきた今が危険なのかもしれない。

頭の中に過ぎ去る雑念。何とかしてそれを拭い去らなければならない。

生きる上で、思考する、思念が入ってくるという事は、こんなに苦痛である事を、みな、知っているのだろうか？

客が店に入ってきた。

彼は明るく言葉を投げ掛ける。

客は無愛想で、少しへこんだ。

こういう客は頻繁にいる。

それでも、いつも笑顔で笑っているようにしている。

たとえ、頭の中で。

絶えず、悪夢的なシーンの映像が甦っていてもなおも。

笑顔で笑えるようにしている。

たとえ、両目が見ているものが。

血塗れの光景がフラッシュバックした映像ばかりだったとしても。

客のいる辺りを、把握して、笑い掛けるようにしている。

「いらっしゃいませ。ご注文は何に致します？」

自らが放つ言葉の一つ一つが、何処か虚構の自分を作っているかのようだ。日々、自分が無くなってかのような感覚。離人感。今、生きているのだろうか？ 分からない。

見える景色が酷く希薄だ。まるで映画でも観ているかのよう。

頭の中の方が、きっと現実なのだろう。どうすればいいのか、分からない。

「オルギア、今日は元気かい？」

ゼロムは、少年に話し掛ける。

少年は頭を掻きながら、言った。

「すごいぜ、ゼロム。今日は一度に十二発、命中出来た。俺はもっと強くなると思う。なあ、俺には、やりたい事があるんだ」

最近では、木々に孔を開ける事に飽きて、空き缶を使った射撃訓練をしているみたいだった。たまに、中身の入った缶も打ち抜いて、中身が溢れて破裂する様も楽しんでいる。

「ふうん。君はその力を何に使うんだい？」

「戦争に行きたい。沢山の兵隊を殺したい。そこで、俺の力を認めさせてやるんだ。俺の強さをみんなに見せてやりたい」

やはり、彼は人を撃ちたがっている。

そういえば、国によっては、紛争が続いている場所がある。

漠然としているが、彼の将来の夢は傭兵なのだろう。

「戦争に行きたいのか？ 怖くないのか？」

「俺だったら、みんなの役に立てる。怖くない、俺はこれからも、もっともっと強くなる。なあ、ゼロム。見ていてくれよな？」

彼は、とてつもなく自信過剰な顔だ。いつもそうだ。

そういえば、先日、キマイラという少女が教会に来た。

彼女は家出少女らしい。

しかし、少し話してみると、かなり理知的に思えた。それも、まるで年齢にはそぐわない程。彼女はオルギアと同じ、十五歳らしい。

ゼロムはオルギアを見る。

彼はあぶなっかしい。

戦争に行って、役に立ちたいと言った。

しかし、疑問に感じたのは。

誰の役に立って。何を成し遂げたいのだろう？

国だろうか？ 上官だろうか？

ゼロムの顔は複雑になる。オルギアの強く生きようとする意志は好きだ。尊重したい。

しかし、その方向性の向う処が、正直、怖い。……。

彼は、思春期特有の肥大化した自我を形成しつつある。

周りの大人に自分を認めさせたい。

そんな事ばかり考えているのだろう。

かつて、彼もそうだった。

もしかすると、少年時代には、誰も通る道なのかもしれない。

今では、そんな気持ちは何処かへと行ってしまったが。

この訓練場のように使われている公園の木々は、彼の能力で孔だらけだ。

正直、街の住民から苦情が出なければいいと思うが。

ふと、ゼロムは気付く。

木々の中に、一人の少女が立っていた。

帽子を目深に被っている。

それからもう一人。

腰まで伸ばした灰色の髪の子供。

「キマイラ？ ノルン？」

二人の子供は、まるでわざと見つかるような隠れ方をしていたように思えた。

二人はこちらに歩いてくる。

「貴方は、ゼロムだけ」

帽子を被った子供は言った。

彼は軽く会釈する。

「ああ、そうだよ。こうやって、話すのは初めてかな。どうだい？ 教会の暮らしは」

「そうね。素晴らしいわ。ご飯も美味しいし、まだ、もう少し居たいなって思うわ」

「うん、私も！」

灰色の髪の子供が同調する。

ゼロムは笑った。

家出の経緯を聞こうかどうか迷った。しかし、何と切り出せばいいのだろう。

それに、何故だか、決して真実を答えてくれそうな気がしない。そんな感じだ。

「もうすぐ、夕食の時間ね」

キマイラは言う。

「今日は何かなあ？」

ノルンは無邪気に笑った。

彼女はあの教会に、完全に溶け込んでいるみたいだった。

「処で、ゼロム。あの彼、オルギアだけ。彼の事なんだけど」

子供はまるで射抜くような視線を向ける。

彼は、少したじろいだ。

彼女は本当に、十五歳なのだろうか？ オルギアと同じ年齢なのか？

まるで、ゼロムよりも遥かに年上のような、老獺さすら感じる声音だ。

「あの子。堂々と能力使わせていいの？ 止めさせるべきよ」

同い年の少年を、まるで小さな赤子のように言う。何も知らない子供を嗜めるように。

そしてどこか、呆れている。

「彼は周りが見えていないみたいね。これはそうね、忠告というよりも警告。貴方が、叱り付けてでも止めさせるべきなんじゃない？ もっとも言って聞きそうな性格に見えないけれど。でもね、分かっていると思うけれど」

「ああ……」

彼は頷いた。

「そのきっかけが起きなければいいんだけど。僕は正直、どうすればいいかわからない」

「ええ」

少女は彼に同意する。

「彼、そのうち、故意か過失かわからないけれども、人を殺めるわよ。さっき、立ち聞きさせて貰ったんだけど。戦争で人殺すとか何とか。その前に、街の中で人を殺すわ。彼の手にしたナイフは余りにも、彼が扱い切れるものじゃない」

ゼロムがずっと悩んでいる事を、少女ははっきりと口にした。

まるで、突き付けるかのように。

「こういう場合。自分の無力さを突き付けてやるべきなんだけれども。彼の力を制限する大人っていないじゃない。レデル先生も甘やかしているようだし。それに、ああいう子は、やっぱり、男性社会でもっと強い先輩だとか年上の男に負かされるのがいいんじゃないの？　どんどん自分が絶対だ、って思い込み始めているように見えるわ」

完全にオルギアの事を分析し切っている。

そんな彼女の洞察力に驚愕を隠せない。

彼女は、何かを思い付いた顔をする。

「女の私に負かされるのとかどうだろう？　彼的には相当、屈辱でしょうね。でも、どうなのかしら？　逆上して、変なプライドを築き上げなきゃいいんだけど」

「……………どういう事だい？」

「ああ」

彼女は露骨に溜め息を吐いた。

「私にも彼のような力があるから。そして、彼よりもかなり早く発現していたし。彼よりも早く、自分が持っている力の怖さを理解していた」

そう言って、さりげなく、木々の枝を折る。

そして、その枝を、別の木へとまるで、水の中へと溶かすように突き刺した。

ゼロムはそれを見て、絶句する。

突き刺した枝が、木の幹に、融合したかのように一体化している。

異常な光景が当たり前のように行われた。

「私の力は『カクテル・パーティー』と名付けている。あの彼もそろそろ、自分の力に名前を付けている頃なんじゃない？　統計的に見て、このような力を手にした者の90%以上が、自分の力に名前を付けたがる。それが特別な印だと考えて」

皮肉るように言う。

「ああ、そうそう。みっともないから、神話の神様から名前を取るのとか止めときなさい、って伝えておいて。みんな付けたがるらしいのよ。分不相応にも。そういう奴らに限って、自分の力使いこなせないのが多いから」

少し悪戯っぽい笑みを浮かべた。

ゼロムも合わせて、苦笑する。

何だか、本当に可笑しかった。

「キマイラ、君は何か、本当に物知りなんだね。育ちがいいのかな？」

「そうねえ。親は十歳にも満たない私に、発達心理学の本とか読ませるような人間だった。まあ、生まれ持った力をコントロールする為の教育の一環としてね」

何で、そんな両親の元から離れたのかは聞けなかった。

やはり、何処か言わせない圧力を言葉の裏に持っている。

彼女は抱えているものを、決して人に見せたがらない。

少しして、射撃の訓練に一通り満足したオルギアが近付いてきた。

「おい、ゼロム。何、女と話しているんだよ」

彼はとても機嫌が良さそうだった。

「俺も混ぜろよな」

彼はさり気なく、二人の少女に自分の隆起した筋肉を見せる。

毎日、トレーニングを欠かせていないのだろう。本当にこういった努力を認めて欲しいみたいだった。

キマイラは完全に彼に呆れているみたいだった。

ずっと黙っているノルンは、やはり困惑している。

「ねえ、オルギア。せっかくだから、私に貴方の腕前を見せてよ。見たいなあ」

少年の顔は赤くなる。

物凄く嬉しそうな表情になった。

「ああ、見ていてくれよ。なあ、缶使った方がいいか？ それとも、あの大きな木に、大きな孔開けてみるか？」

「木を狙ってよ。貴方の凄い力、見たいなあ、ねえ、ノルン？」

「う、うん」

寡黙な少女も頷く。

彼女は物珍しそうに、彼を見ていた。

オルギアは指先を銃に見立てて、木へと向ける。

実際、彼の両手は機関銃と同じ役割を果たしていた。

指先から衝撃波の弾丸が発射される。

木には大きな孔が開く。

太い樹木だった為、倒すのに十何発か命中させる必要があった。

木々がよろめきながら、倒れていく。

そろそろ、公園の管理人だかに本気で怒られるなあ、とゼロムは憂鬱な気持ちに襲われた。

キマイラはそれを見て、驚嘆の笑顔を少年に向ける。

「凄いなあ。格好いい」

少年は満面の笑顔になる。

「だろ？ そうだろ？ すげーだろ？」

本当に彼は嬉しそうだった。とにかく誰かから絶賛されたい。

それが、同い年の女の子からならば、願ってもみないものだろう。

キマイラはさり気なく、自分の服の中をまさぐる。

そして、左手を勢いよく、頭に叩き付けた。

何かが突き刺さる音。

彼女は左手で頭を押さえながら、右手で小石を拾う。

そして、ぴっ、と小石を、オルギアが破壊した樹木よりも大きな木へと投げた。

その間、数秒。

一体、何が起こったのか、オルギアもゼロムも理解出来ていなかった。

樹木が勢いよく倒れる。

投げた石は一つ。無駄な狙撃はせず、樹木の芯のみを正確に狙った。

そして、少女は左手を頭から離した。

帽子に、小さな孔が幾つか開いている。

彼女は、少年の方を向いた。

「私も凄いでしょ？」

満面の笑顔。

オルギアは何が起こったのか、理解出来ていないみたいだった。

少女は続けて言う。

「私の周り。もっと凄い、男の人が沢山いたの。みんな強かったなあ。ねえ、オルギア。女の私
でさえ、これだから。もっと貴方には鍛錬が必要かなって。それから、絶対に人に向けちゃ駄目
。私、散々、怒られたんだから」

当然、彼女を超える男の能力者など、周りにいなかった。

それ程、彼女は優秀過ぎた。

少年は完全に黙視している。

「それから、戦争は、こんなもんじゃないわよ。オルギア、貴方の力、他にも生かし方があると思
うんだ」

強く、念を押すように言った。

二人の男を背にして、少女達は歩き出す。

「ねえ、キマイラ。一体、何したの？」

ノルンが訊ねた。

「ええとね。人間の脳って、普段は使ってない部分が多くて」

彼女は淡々と説明していく。

そして、おもむろに服の中から、小さな針を何本か取り出して見せる。

「これを自分の頭の中に幾つか刺し込んで刺激を与えて。一時的に筋肉を飛躍的に上昇させた。
まあ、やろうと思えば。あの子の出来る事くらい、私だって出来るってだけ」

そう、冷たく言い放つ。

「本当、キマイラって何でも出来るよね？」

「まあ、それが幸福な結果に繋がっているわけでも無いけれども、ね……」
何処か、寂しそうな声音。

私は、ここ数日ほど、キマイラと一緒にいて、彼女がとても魅力的な人間に映った。

実年齢のみなら、私の方が一回りも年上だ。

しかし、年齢に何の意味があるのだろうか。

私は生まれてから、二十年以上も箱の中に住んでいた。

世界のどんな景色も美しいと思う。

街の景色、人の会話。雑踏。

全てが見知らぬ異世界のものばかりだ。

これが外の世界。

むしろ、神秘的にすら感じられた。

だから、観ておこうと思う。この世界のありとあらゆるものを。

「ねえ、ノルン。そんなに露店の果物とかが面白いの？」

「うん、本でしか見た事が無かったから。実際に見て、すごい面白い」

私は眼を輝かせながら、色取り取りの果物に魅入っていく。これが、どれ程、幸福な事なのか
みなには分かるまい。

私は、世界の事を、何も知らなかった。

だからこそ、今はきっと幸福なのだ。それを放したくない。

あの教会に住めたら、どんなにいいだろうと思う。

みんなと仲良くしよう。

これから、どうなっていくのか分からないけれども。

人との付き合い方なんてまるで分からないのだけれども。

きっと、そこには未来が開かれている。

それに。

キマイラは優しい。

自然な気遣いをしてくれる。

そんな事を彼女に告げた。

「私は優しいか……」

少し寂しそうな顔。

何だか、失言をしてしまったような気がした。

私は悩む。

どんな言葉を掛ければいいのだろう。

よく分からないが。

しかし、気付けば、この数日、いつも二人は一緒にいた。

だから、私の方としても彼女の事を理解したい。

きっと、色々な苦悩を抱えて生きてきたのだろう。

聞きたい。彼女の苦しみを少しでも分かち合いたい。

けれども、今はまだそんな時期じゃないのだろう。

まだ、会って数日。

きっと、本当はもっともっと沢山の時間を共有しないとイケないのだ。

もっともっと。

私はキマイラの事が好きなのだ。

それだけは確かだ。

教会はいつも通りに、まるで此処が本当の家のように存在している。

私とキマイラは、今日も二人一緒に街へと遊びに行く。

リーデラの姿は見えない。今日は何処に行っているのだろうか。

探しに行こうと思ったが、何となく、キマイラと二人でいる時が一番、落ち着くので、他の子達には内緒で出掛ける。

「ねえ、キマイラ。キマイラって、何処から来たの？」

「さあね。どこかしらね」

何度か聞いている質問。

いつもはぐらかされる。

「きっと、風に乗ってきたのよ。私は」

いつもこんな感じの調子だ。

「ねえ、丘を見に行かない？」

私は言った。

この前、ゼロムから聞かされた。そういえば、レデル先生も口にしていた。

この街にある丘。

そこから、街全体を見下ろす事が出来るのだと。

「ああ、それから、リーデラも誘ったんだけど。彼女、行きたくないって行っていたから、やっぱり二人で行こう」

十

この街は、二つの層に分かれている。

地上部分と、地下部分。

地下部分からは、光の屈折のせいか、余り空の色が見えない。空が濁って見える。

けれども、地上部分に向かえば、空の上が青み掛かっている事に気付く。

この街は、何かの虫の巣みたいな構造をしていると言われる事があると聞く。

私とキマイラは丘へと続く、階段を昇っている。

途中、疲れて休憩する。

休む場所として、木で作られた椅子とテーブルが地面と接着して置かれていた。

「ノルン、だらしないなあ」

キマイラは汗一つかかずに言う。

そして、服の中から水筒を取り出した。

中には冷たく冷えた、紅茶が入っている。

水筒に付属したコップに紅茶を注いで、私はそれを口にした。

とても甘い。

「キマイラ、砂糖入れ過ぎ……」

私は苦笑した。

彼女はううん、と唸った。

「私はこれで適量なんだけど？」

「普通の人とは、キマイラと違って。身体をすぐに悪くするの、糖尿病になるじゃない」

「ノルン……貴方、何でそんな事知っているのよ。二十年もずっと外の世界に行かなかったんでしょ？」

「本で読んだ」

「そう」

二人とも苦笑する。

階段の途中から見える景色。

この街は、階段と橋ばかりが所々に掛けられている。

雨ばかり降る為に、このような構造にしたのだと言われている。実際、上部の地上部分で降った雨を、下部の地下部分からダムへと送り込める構造になっているらしい。

しかし、本当の処は分からない、もしかしたら別の目的があったのかも。

「何だか、この街自体、実験しているように見える」

「そう？」

「うん、だって。何だろ、他に雨ばかり降る地域って多いんだけど。ここは何ていうか、まるで都市そのものが何らかの実験的に作られているみたいっていうか。だって、やっぱり、変な景観かな、って」

「ノルン……貴方も鋭い処、あると思うわよ」

キマイラは紅茶を飲み干すと立ち上がった。

「さあ、丘の頂上まで後、もうちょっと。頑張ってください」

十

頂上から見える景色はとても美しかった。

美しい、しかし、同時に奇妙さも感じた。

所謂、奇景と呼ばれる奴か。

まるで、街は何か昆虫の巣のようにも見える。

地上部分の区画と、地下部分の区画。

所々に地下部分が見える孔ばかりが開いた地上部分。そして、区画と区画同士を繋げている橋の数々。

地上と地上を結ぶ、幾つもの階段。

二重構造になっている街。

丘の頂上にある展望台には、一人の少年が座っていた。

彼の事は知っている。余り話した事は無いが。

彼の名前は、確かガイツォと言う。

何だか、じゃがいものような顔。少しだけ太った体格。

彼は私達を見つけると、手を振って、のそのそと歩いてきた。

「ノ、ノルン。キ、キマイラ。こんな、こんな所で何してんだ？」

少しどもりながら、あるいは赤面して緊張しながら話し出す。

「街全体を観たくなって。二人で来たの！」

彼は何だか、おどおどしている。

そして、いきなり私達から駆けるように離れると。ごそごそと、草むらの中へと向かった。

そして、十数分後、彼はまた私達の下へとやってくる。

彼は両手を広げる。

それは、紫がかった青い花だった。

「花壇。教会の花壇。花壇に無かったら？」

私とキマイラは顔を見合わせる。

ああ、教会には青色の花が無かったという意味か。

「リ、リーデラに見せたら。ダメだぞ。絶対に、持ち帰っちゃダメだ。お、俺。持ち帰って、間違っ
て見せてしまった事があって。きっと嫌われている。だから、ここで、見て」

私達は青い花を手取る。

このガイツォという少年は、本当に粗忽者だな、と思った。

花の所々に、植物の汁が滲んでいる。そして、花の一部が潰れ掛けている。

彼は更に、緊張して、赤面したような顔をしていた。

青い花か。

そういえば、空を見上げた。

この雨の街では、基本的に空が灰色をしている。

けれども、この丘から見える空は、少しだけ青み掛かった景色が見えた。

それは太陽と混ざり合っ、て、不可思議な色をしている。

「ありがとう、ガイツォ」

キマイラは淡々と、このじゃがいものような顔をした少年に礼を言う。

「いつ此処に来ているの？」

私は訊ねた。

彼はしきりに、首を縦に振る。

「いいね。此処、とっても見晴らしがよくて綺麗」

何だか、この前は彼女の機嫌を損ねてしまったかなあと思いながら。

キマイラはリーデラの部屋へと向かう。

鍵が掛かっている。

彼女は鼻を鳴らす。

.....まったく。人の事をどうこう言っておいて。自分だって、自分の領域を欲しがるじゃない。
まあ、やっぱりそういうものよね。

そう思いながらも、彼女は特にリーデラに対して悪意が湧き上がったわけでもない。

ことり、と部屋の置くから聞こえる物音に気付く。

がりがりがりっ、という音が中から響いてくる。

「.....リーデラ？」

それは、どうやら何かで壁を搔き毟っている音だ。

爪音だ、とすぐに気付く。

キマイラは、服の中から一本の針金を取り出すと、鍵の掛かっている部屋を、鍵を壊す事無く、難なく開ける。

そこには、髪の毛を振り乱して、全身を痙攣させているリーデラの姿があった。

「.....何があったの？」

彼女は血の気を失った顔をして振り返る。

「か、壁の染み。.....く、黒づんでいたものが、あ、ああ、あ、青、青、青になっていて.....それで」

キマイラはリーデラが、眼を背けて、直視出来ずにいる場所へと赴く。

元々は黒かった壁の染みだ。何かの汚れだろう。

それは、長年の時を得て、薄っすらと群青に近い色へと変わっていた。

「この染みがどうかしたの？」

「きょ、今日、へ、部屋の掃除をしようと、タンスを少しどかしたら、こ、こうなって.....」

キマイラは溜め息を吐く。

そして、染みを軽くなぞった。

すると、綺麗さっぱり、その青い汚れは消え去っていった。

「リーデラ。これで、あなたの“お化け”は消えたわよ。大丈夫」

髪を振り乱した少女は、半泣きになりながら、振り返る。

口元がかちかち、と鳴っている。

キマイラは思わず、彼女の袖をつかんだ。

白い腕。

腕には、無数の切り傷が抉られるように、彫られるように付けられている。

「あら。あなた、その所謂。そうそう、リスト・カットって奴していたの？」

リーデラは、無言のまま首を縦に振る。

この事は、昨日、一緒にお風呂に入ったノルンも知っている。

が、ノルンの場合も、特に彼女の傷跡を見て、何の感慨も抱かなかった。

リーデラはみんなと一緒に風呂に入りたい。切実な願い。

裸の自分。

それを晒したい。

キマイラは無言のまま、彼女の腕を指先でなぞっていく。

すると、なぞった部分は、真っ白い腕へと変わっていった。

リーデラは絶句していた。

「な、何で？？ キマイラ、あなた.....」

「ああ、私は“奇跡の子”だから」

両親がそう言っていた。彼女を溺愛していた両親。

リーデラは泣き出していた。

キマイラは泣きじゃくる彼女の頭を撫でながら、彼女の服に手をかける。

肩。足。特に、その辺りも酷い。

切り傷が抉られるように、開いている。

キマイラは、それも指でなぞって消していく。

「.....ほ、ほ、本当は。眼、眼をね。切り裂きたかったんだけど、こ、怖くて.....怖くて、とても怖くて.....」

「そう」

キマイラは理解する。

この少女が、今くらいまで立ち直るのに、相当な時間が掛かったのだろうと。

しかし、時折、何かの拍子に、今みたいな恐慌状態に陥るのだと。.....。

青、か。

「ああ、そうそう。改めて謝っておくわ。リーデラ、ごめんね。この前、一緒に風呂に入ってあげられなくて」

「うん.....いいの、キマイラも、キマイラで、抱えているもの、沢山あるんでしょう.....？」

「.....そうね」

少女は泣き止んでいた。

キマイラは分かっている。

此処の施設にいる者達は、みんな無理をして生きているのだと。

抱え切れないものを持って生まれてきた。あるいは、そういった傷を負って生きてきた。

此処は、外界から閉ざされた場所。

外界で生きていけない者達の居場所。

酷い弱さに晒される。

今にも、崩れ落ちそうな自分がある。感化されたのか。

「何か飲み物、取ってこようか」

キマイラはそう告げた。

そして、部屋を出る。

噉り泣き声が続く。

台所には確か、ティーパックがあった筈だ。それから、コーヒーの豆も置かれていた。

コーヒーの作り方はよく分からないので、紅茶を選ぶ事にした。

レデルの部屋の近くを通る。

声がぼそぼそと聞こえてくる。

.....そう、あなたは決心したの。

声は聞こえてくる。どうやら、誰かと電話で話しているみたいだった。

レデルの声、それから。

キマイラは気配を殺した。

受話器の向こう側の声に聞き覚えがある。

よく知っている声だ。そう、よく知っている奴の声。何故、こんなやり取りが行われているのか。

.....レデル。あなた、いつまで待つつもり？

.....さあ。あなたはどうしたいわけ？ 此処を。

.....引き渡してくれないかしらねえ？ 子供達を。

.....今は、まだ無理ね。皆、欠陥品ばかり。

.....それでも、いつまでも待ってられないのよ。私は向かったわよお。

その声を知っている。彼女は唾を飲み込んだ。

マミー・キャット。

やはり、此処に気付いている。そして、キマイラは間違いなく、踊らされている。

どうする？ レデルという女。

彼女を尋問してみるか？

キマイラは、服の中から、数本の針を取り出した。この針だけで、相手の意思を簡単に破壊する事が出来る。拷問道具。

レデルはやはり、此処の施設を使って、子供達を観察している。

そして、やはり彼女は『アップル』の側にいる。腹立たしいが、何とかしてその状況を覆さなければならない。

.....あのね、マミー。私は子供達を守るわ。

電話の相手は、沈黙する。

そして、その後、哄笑が聞こえた。

.....やはり、あなたは裏切ったわね。いや、あなたからしてみれば、裏切りも何も、そもそも、私と目的、方向性が違っていたか。でもいいの？ あなただって、組織の幹部なのよ。

そう言って、電話が切れた。

「もう、私は組織の幹部じゃないの。放っておいてよ！」

そう叫んで、彼女は受話器を叩き付ける。

沈黙。

「そこにいるんでしょう？」

女は優しく声を掛けた。

キマイラは息を飲む。

バレた。……。

大人しく、しかし警戒しながら、扉を開く。

「レデル……先生、貴方……」

白衣の女はにっこりと笑う。

「気配を消す時は完全に。それこそ呼吸もちゃんと消さないと。ダメでしょう。ね？」

キマイラは舌打ちする。

少しの腹立ち。

改めて、白衣の女を吟味していく。

服越しに分かる。よく鍛錬された肉体だ。元々は傭兵か、ひょっとすると暗殺者だったのかもしれない。更に、立ち振る舞いを見る限り、攻め込む隙が見当たらない。

「私がマミー・キャットの下、アップルによって派遣されてきた事は分かるわよね？」

「ええ。先に電話で聞いていたから。でも、ちょっと遅かったかな？」

キマイラはぎりい、と歯を噛み締めた。

レデルはふっふっ、と笑う。

「冗談、冗談。早かったわよ。この教会を見つけるの。あなたはとても優秀。マミーがそう言っている。アップルの期待の星だって」

「いい殺人マシーンになれる、って言われているわ」

キマイラは強く彼女を睨み付けた。

「何か、誤解しているようだけれども。私はマミー、それにアップルとは切れているわ。完全に離別している。だから、私はあなたの敵じゃない」

最後の言葉を、強く、感情を込めて言う。

敵じゃない。

キマイラは困惑したような顔をする。

「レデル……先生、貴方は何者なの？」

少しだけ、緊張を孕んだ空気が緩んだ。

「話さないといけないわね。あなたには」

机の上に置かれているコーヒーに口を付ける。

そして、それを一気に飲み干した。

「私はアップルの創始者の一人。そして、戦闘訓練を受けた暗殺者もしていた。そう、人を殺した事だってある」

最後の言葉は、とても辛そうだった。……。

「この教会は何？」

「アップルや友好組織、派生組織によって集められたエートルの素質がある者達を集めた実験場という事かしら？」

「……そう、やはりそんな所だったのね。何となく、そうなんじゃないかって思っていたけれど

」

彼女はそれを淡々とした表情で吟味していた。

「それどころか」

レデルの顔に少し翳りが見える。

まるで、それは審判の日の告白。

「この雨の街。それ自体がアップルの実験場なのよ」

キマイラはそれを聞いて、驚きを隠せなかった。

「どういう事？」

「そのまんま、この街自体が実験場。みんな今では普通に生活しているけれども、元々は、アップルが作り出したエーテリオン達のエートルの実験動物として生かされていた。その事を知っている街の住民はいないわ。みんな神の作った世界の中において、神を知らない。この世界のシステムなんて知らされずに、日々、生活している」

世界のシステム、と聞いて、キマイラの額がぴくりと動く。

「雨の降り続ける異常気象も元々はアップルの実験によって、大気汚染が行われて。今のようない結果になったのよ。異質な気候がどのように、人間の心理状態に変化を起こすか知りたくてね。でも、その実験の方は失敗だったわね。みんな普通に環境に適応している。まあ、当然よね。熱帯の地、寒冷の地だって。人間は人間らしさを止めていないから」

彼女は少し陰鬱そうな顔をした。

「でもね。実験のまた違うアプローチの仕方もあった。そう、それは此処の教会の子供達。彼らはエーテリオンになれる素質のある者達。私は管理者として任命されている、でも、止めた」

「止めた？」

「子供達が好きだったから。好きだったから、アップルとは絶縁するつもりだった。けれども、それは許されなかった。今はとにかく、私は子供達を守る事だけ考えて、生きている」

「そう」

彼女の言葉に嘘は無い。

だから、信じよう、と思う。……。

「キマイラ、あなたに会えてよかった……」

女は微笑する。

「あなたはまだ幼いけれども、強靱な意志と理性を備えている。だから、その能力を決して間違った事には使わないで欲しい、そう思っている」

「……手遅れよ」

キマイラは冷笑を浮かべて言った。

「既に、私の両手は沢山の死体でいっぱい。積み上げてきた屍の数がちょっと多くなっている。マミーにやらされていたとはいえ、事実は事実だから」

「まだ、戻れるわ」

彼女は強く言った。

「あなたはまだ子供。ほんの幼い子供。世界の事を何も知らない、一人では生きていけない子供

。だから、これから色々な人に会って、色々なものを見て、前を向いて生きて行って欲しい。私のこの言葉はすぐには分からないかもしれない。いい？ 覚えておいて、あなたは沢山の可能性に溢れている。あなたは何にでもなれるの」

「何にでもなれるか……」

……本当はそれを、自分に言いたかったんじゃない？

と、キマイラは思った。けれど、口にするのは止めた。

「ねえ。レデル先生、幼少期に監獄に入った人間は、一生、監獄を行き来するって聞く。私は例外になれるかしら？」

「なれるわ。なれる。絶対に。人間は希望を持って生きられる、忘れないでね？」

静寂が生まれる。きっと、彼女の口から、それ以上の言葉は出てこないのだろう。

キマイラは決心した。

決して、自分は変わらずに、生きよう、と……。

そうでなければ。

余りにも自らが殺した人間に申し訳が立たない。

それから両親。

決して、そんなキマイラの決意など望まないだろう。

彼女を溺愛した両親。

大切な、守らなければならなかった者達。

これからも、どうしようもなく、未来なんて無いだろうけれども。

曲げられない。

変わらない、自分。

それを愛しく思うしかない。

けれども。

もう少し、少しだけ。この理想を求める女性の言葉を聞いていたいのだと。

まるで、普通の人間のように生きる事を願いたいのだと。

キマイラは考える。

たとえば、裕福な人間が貧困に陥ったとしたら、環境ゆえに変わらざるを得なくなるだろう。しかし、貧困な人間を急に裕福さを手にしたら、果たしてそいつは変われるのだろうか。

十

自分の幸福像が思い描けない。

レデルの話は正直、もう少し、聞いていたいような気もした。

幸福像が思い描けないのは、今はまだ闇しか見ていないから、ときっと、レデルの場合だったら言うのだろうか。ひょっとすると、彼女は生涯の師になるのかもしれないなあ、と思った。そういう未来像を描いても良いかもしれない。

レデルは家族が欲しかったのだろうか。好きな男性と一緒にあって、子供を持って、暮らし

たかったのかもしれない。間違いないのは、レデルは教会の子供達を家族として愛しているという事。

それが、彼女をずっと支え続けているのだ、と。

キマイラは両親の事を思う。

かつてもっと幼い頃に思った事。

自分自身が異形として生まれてしまった事。

その事実から、両親を守らなければならないのだと。

人からの疎外。キマイラの方はそれでよくとも、父親も母親も、周りからの奇異の眼によって迫害を受けてしまう。そんな風に思った。

だから、彼女は学校という場所にも行かなかったし、なるべく親戚を相手にもしなかった。友達も作らなかった。

一人、部屋の中で本を読んだ。

父親がよく、仕事帰りに、色々な本を買ってきてくれた。

母親は、ケーキの焼き方だとか、洋服の縫い方だとかを熱心に教えてくれた。

そんな思い出があるから、今を生きていける。

未来が無い。けれども。

空を見上げた。空は何処までも灰色で。灰色だからこそ、澄んでいる。

十

キマイラが去った後、レデルは再びコーヒーを入れる。

そして、それを飲み干す。

少しだけ、溜め息が出た。

辛い。……。

……何で、私は知ったかぶりのように言っちゃうんだろう？

自分の甘さに気づき、赦せなくなった。

キマイラはレデルの話を素直に聞いてくれた。笑顔で。

あの笑顔を見るのは、とっても苦しい。

あんな笑い方を子供にさせる自分が赦せなかった。

あれはまるで、……虐待された子供が、親以外の大人の前で、取り繕った笑顔。そう、なんと
いうか、大人に媚びる、大人の言いつけを守る理想の子供像を演じている子供。

……何で、私は偉そうなのかしら？ 何で私は偉そうにしか物を言えない？

実際、此処にいる子供達の、誰の傷も癒せていないのではないかと思う。

ゼロムも、オルギアも、ガイツォも。

リーデラもガーデンも。

本当にみんな、良い子だ。

駄目な子なんて一人もいないと思っている。

そう。

レデルにも力はあった。

それは、研究施設で発現したもの。

それは、まるで靈感のように発現した。

人を見ていると、もやもや、としたものが見える。

それは、まるで空気中に溶けるように、人間一人一人にこびり付いている。

たとえばそれは、手の中を包む炎だったり、両目を覆う闇だったり、背中に背負った大きな十字架のようなものだったり。様々な形で現れる。

彼女は、それは人間一人一人の抱えている“心の傷”と呼んでいる。

そう、レデルには他人の心の傷が視えるのだった。

薄っすらとだが、それが像となって現れる。

人間一人一人の持つ傷の形は違う。

分かった事は。

誰しものが、心に傷を抱えているのが分かる。

それを覆い隠そうとしている者、剥き出しにしている者、変わった傷の形を持つ者、みんなそれぞれだ。

その傷と傷の衝突によって、争いが起こる。小さな人間関係から戦争まで、傷同士の争いなのだ。それが、レデルのしている世界。

そして。

キマイラの抱えている大きな傷。

それはまるで、自らを焼くような傷。何度も何度も、自分で自分の傷を焼いて塞いでいる。まるで、よく訓練された兵士のように。そんな兵士は大抵、自ら死を選びたがる。誰にも自らの傷の苦しみを与えず、撒かず、誤魔化さず。生きていつている。

そういう人間は、自らをどんどん追い詰めていく。

それがどれ程の苦痛なのか。

レデルの言葉は、きっと届かない。

余りにも自分が傲慢に思えてしまう。分かっている。

けれども、言わずにはいられなかった。

彼女の傷を癒やす事は自分には出来ないのだと分かっている。

いや、それどころか、誰の傷も癒やす事など出来はしない。自分の能力は他人の心にある、“傷の形”を覗き見るだけだ。まるで、無理やり心のガードを取り外して、覗き見ているかのよう。誰にだって、触れられたくない部分はある筈なのに。

.....自らの傲慢さに失望する。

自分はキマイラに何もしてやれない。

それだけは確かなのだ。

たとえ、彼女を取り巻く環境を壊したとしても。

彼女の心の中まで、心の在り様までをも変える事なんて出来はしない。

がちゃがちゃ、と皿洗いをしている。

今日は、客が少ない。

雨が降り続けている。

この街に、晴れた日なんて無い。青空なんて無い。

それでも、太陽は眩く輝いている。

ゼロムはふと、頭の中に景色が甦る。

それは、赤だ。世界全体を染めかねない真っ赤。

自分自身が、今、何処に立っているのか分からない。

目の前に、シャッターが降ろされてしまったかのような感覚。

両手の感触も無い。今、ティーカップを洗っている筈なのだが。カップが果たして、本当に手の中にあるのか分からない。

初めの頃は、よく店長に怒られていたっけ。

最近では、仕事をちゃんと任されている。だから、そんな自分を保たなければならない。

耳元では、幻聴が聞こえてきた。

それはまるで、メロディーのようだ。

囁き声、だんだんと激しくなる。

それは雨の音だ。

その中に、吐息が混ざる。

それらの気配を発しているのは、死者達だった。

過去からの死者達。

まるで、押し込めた顔形のように、そいつらはゼロムの記憶の中からやってくる。

死体。

死体達の散乱。バラバラになった者達。人の形を止めた者達。

今、何処に現実があるのだろうか？

手探りで何とか、自分を確保しなければならない。

最近、頻繁にこういうフラッシュバックが引き起こる。

此処、二、三年程は収まり掛けていた筈だ。

一体、何故なのだろう。

不安。

胸の鼓動も激しくなる。

薬。

薬を飲みたい。

けれども、この症状を改善する薬は、今はまだ開発されていないと聞く。

レデルと何度も話し合って、職に着いた。社会の中で生きていく事が出来るようになった。...

...そう思い込んでいた。

それでも、今みたいに、現実と幻影が交差して、普段見ている現実とは違う世界の中へと放り込まれると。自分自身の希望が少しずつ、消えていくかのような気分になってくる。

自信喪失だ。

普通の人間の持つ、日常が欲しいと思っているのだが。

それでも手に入らない。どうしようもなく。

かつて子供の頃。

こんな風になるとは思えなかった。

ただ、真っ赤な死体。

父親の死体。バラバラにされた。死、死、死、死。

そいつの姿も覚えている。

父親を殺したそいつの姿。……。

そいつは、青い服を纏った少女趣味の人物。

巨大な傘を差していた。

そいつは、殺人鬼なのだと聞く。沢山の人間を殺してきた殺人鬼。

中性的な顔立ち。金色の髪。

そいつは、有名な殺人鬼だ。彼の父親はそいつに殺されてしまった。

悪夢。……。異常過ぎる体験。

その日は雨の日だったっけ？

いや、ちゃんと、覚えている。……。

そんな日々の苦悩から、生きている自分。

でも、そんな弱さは教会にいる他の子達の前では見せないようにしている。

自分は彼らを導いて行かなければならないのだと。

見本になって。希望になって、生きていかなければならないのだと。

十

マミー・キャットは『ガルページ』を訪れた。

そこは、雨の街から数キロ離れた場所にある。

貧困街の中でも、もっとも近付きがたい場所だ。

ガルページは、隣国によって経済的に搾取されている場所だ。だから、此処の街の住民は成り上がれない。此処で育った人間は墓石で生まれたのと同じ。希望なんて無い。

窓ガラスの割れた家々が並んでいる。

此処では、窃盗や強盗や婦女暴行が頻繁に行われていると聞く。

街の所々には、売春婦が立ち商売をしている。安く売りさばかれているシンナーのバイヤーもいる。露店も並んでいたが、魚や果物には蠅が集っていた。

地面には鳥の糞がこびり付いている。

腐臭がする。

マミーにとっては、心地よい香り。

おそらく、此処が“繁殖地”になるだろう。

「……どうせ、生まれてきて可哀相な人達なんだから。いいよねえ？」

マミーはそう、呟いた。

そして、自分が“付着”させた匂いを頼りに、その場所へと向った。

そこは、娼館だった。

外装だけは小奇麗に作ってある。

金箔を塗りたくった外壁。階段の上に掛けられた、綺麗に洗った赤いカーペット。昼間見ると所々の汚さが露になるが、夜にはとても綺麗に映るのだろう。

貼り付けられた女達の写真。

マミーは館の中へと入る。

もぞもぞと、蟲が動くような音が聞こえる。

かさかさと、黒い羽虫が床の隙間から這いずり出してくる。

黄土色のカビが床を浸食している。

変色したシャンプーの容器。腐臭を誤魔化す為だけに作られた、それ自体が異臭を放つ香水。回し打ちに使われているであろう、注射器。

ドアノブが壊れかかった扉を開ける。

所々が破けた寝台のシーツ。

そして。

そこには、大量の人間が群がっていた。

いや、人間だったもの、とでも言うべきか。

彼らは日光を嫌って、部屋の中に大量に横たわっていた。

時折、小刻みに動いている。

女が大半を占めていたが、男もいる。

彼らは、マミーの『インシニレート』に感染した者達だ。

所謂、“歩く死体”となって生かされ続けている。

彼らは人間の肉を好み、その血を啜った者を同じような歩く死体へと変える。

その中に、先日、雨の街に向う途中に下僕に変えた、車に乗っていた中年男。

彼は此処の出身だったのだろう。

だから、帰巢本能の赴くまま、此処にやってきた。

マミーは入ってくる日光を遮る為に、煤けたカーテンを閉めていく。

すると、彼らは緩慢に動き出した。

所謂、動物の原始的な本能というもの。彼らは動き出して、それぞれの相手を見つけると、貪り喰うように絡み合う。

しかし、脳が致命的に破壊されているせいか、あるいは肉体が腐敗しているせいか、生殖行為は巧く行かずに、暴食という形を取って、互いの肉を貪り喰らう。

部屋に闇が入り込んできたせいで、それまで隠れていた黒い羽虫などが何処からともなく集まってくる。虫達は、地面に付着している髪の毛や垢などを食べ始める。

わっさわっさと、白い蟲達が、寝台の下では蠢いていた。

それは一つの饗宴だった。

「さてと、此処だけじゃなく。他にも感染者は多い筈。そいつら全員を使って、そろそろ追い込みを掛けようかしら？ 雨の街にも何名も私の“スレイブ”を残してきた事だし」

マミーは踵を返す。

背後では、カーニバルが続いていた。

ぐちゃぐちゃになるまで、人間の形を止めてもなお、死体達は踊り続ける。

マミーは館を出た。

自分のマーキングした匂いは、数十キロ以内なら、何処にいても嗅ぎ取れる事が出来る。

ポイントは四つ。

他の四つのポイントで、あの男は、仲間を増やしている。

マミーは含み笑いを浮かべる。

上出来だ。

彼女は電話ボックスを探した。

見つけると、硬貨を入れて、覚えている番号に掛ける。

「もしもし、久しぶり。レデル。私よ、マミー。……………ねえ、本当に久しぶりねえ。……………会いたいなあ、何年ぶりかしらあ？ ……教会の件なんだけど」

マミー・キャットは愉悦を浮かべて、舌なめずりをしながら、電話相手の話を聞いていた。彼女の双眸は暗い。何処までも暗い。

十

マミー・キャットは、自分自身の肉体が改造されている処を覚えている。

大量の器具。コード。点滴。メス。

白い寝台の上に寝かされている自分。

アップルはこの界限においては、弱小組織だ。

だからこそ、功績を上げる必要があった。

彼女の肉体に手術を施したのは、マウスという名前の男だった。

科学者なのか医者なのかは、自分でも分からないという。

機械類の計算式と、人体の遺伝子配列の区別が付かないと。

マミーは、服を脱がされて、寝台に寝かされる。

最初、塩酸を皮膚に塗り付けられた。

爛れてくる肉体の上に、消毒液を塗られる。

注射器で、大量の薬品を注入される。

そして、身体を切り開かれて、中の内臓や骨を別の容器に詰められて、点滴だけで生かされた

。彼女が生きたまま、ミイラにされていった。

マミー・キャットという名前は、所謂、『コード・ネーム』という奴だ。彼女が人間である事を止める際に、元の名前を捨てて、この名前を名乗る事に決めた。

古代エジプトにおいて、猫は豊穡を司るバステト女神の象徴だ。

そこからの着想。

当時の、アップルの技術の全てを、マミーの肉体へと取り込まれた。

アップルの所長はスピネルという男だった。

彼は元々は何処かの大企業の幹部をしており、新薬の人体実験が発覚した為、解雇されてしまった後、アップルを立ち上げたのだと。

その企業が果たして合法的なものなのかは、みな知らない。

何の新薬の開発をしていたのかもしれない。

マミー・キャットは元々は普通の大学を出て、医薬会社に勤めた後、所長のスピネルと似たような経緯を辿って、アップルに流れ着いた。

元々は、普通に結婚して家庭を持つ事も夢だった。

アップルは他の医療関係の仕事を追われた者達を中心に、結束された組織だった。

組織の名前の由来は、聖書から。禁断の果実という意味。更には、知恵という意味を込めて付けられた。楽園において、最初の人類であるアダムとイブを誘惑した果実。

最初の人類に、知恵を与えて神の国から追放された果実。

最初の二人の男女を誘惑した果実は、林檎ではなくて、無花果という説もあるが、分かりやすい、という印象から、林檎の方を選んだと聞く。

所長も自ら研究に携わって、人類がまだ手にしていない知識を得ようとした。

そう。

その中の一つが、“魔法”や“能力”と属に呼ばれるものの研究だった。

アップル内では、それらの未知の力を、存在を意味する『エートル』と呼んだ。

そして、エートルを使う者達を、エーテリオンと呼んだ。

研究所が知りたかった事。

エートルは、何処からやってくるのか分からない。

しかし、意図的にエートルを作り出す事が出来るとするのならば。

それは一国の軍隊すらも凌駕する程、強力なものに。……。

アップルの科学の集大成を使って、一人のエーテリオンを作ろうという企画が生まれた。

不死の肉体を持ち、更に、その不死性を与える力を持つ人間。

そういったコンセプトの元、作られた。

そうして。

危険な実験を得て、マミーは自らが被験者となり、見事、実験に成功した。

彼女の全身には、大量の毒素が溜まっている。

手術から一ヶ月半。

マミーは服毒自殺を図ろうとした。

鏡に映った自分を見て、余りにも変貌ぶり、化け物ぶりに正気を保っていられなくなったからだ。

これは、失敗だ。失敗作だ、と。

.....

マミーの全身は所々が腐敗している。

腐敗しながら、新しい細胞が生成されていき、更に急速に生成された細胞が壊死していく。

さながら、それは。

ゾンビ、という生きた死体。化け物。

あるいは、フランケンシュタイン・モンスター。

ただの化け物だ。

マミーは原始的な本能に従っている。

以前では考えられなかった攻撃性。暴力性に支配される事となった。

それは薬物が脳にまで浸透してしまったからか。

それとも、普通に生きている人間への憎しみ故か。

最初は、皮膚の一部を刃物で切り開いていった。そして、剥き出しの筋組織を見つめる。やがて、肉体は徐々に再生していく。

切り刻んでも、切り刻んでも、内の皮膚や筋組織は腐りながら、再生していった。

同僚であり、親友とも言えたレデルは、彼女の事を心から心配した。

そして、レデルもまた、不眠症に陥った。

酷い、罪悪感によって苦しむ事になった。

しばらくして、レデルは彼女の元を訪れた。

彼女は全身を包帯で覆っていた。

そして、今、何が欲しいか？ 何をして欲しいか？ とレデルは訊ねた。

全ての者が醜くなればいい。

マミーはそう告げた。

彼女は自身の力を『インシニレート』と名付けた。火葬という意味。

生きながら火に焼かれ、葬送されるような苦痛。

そういった情感を、そのまま手に入れた力の名前に付けた。

六日目

キマイラとノルンは街へと出掛けよう、という話をした。

昨日の件に関して、キマイラは彼女に黙っている。

リーデラの事。レデルの事。

「今日は何をする？」

日々、時間は流れ続ける。

もう、此処に来て五日目の朝を迎えた。

最初の頃、キマイラやノルンを家に送り返す事を暗に言っていたレデルだったが、既に二人の身辺が知れ渡ってしまった為、事情は変わっている。

ひよっとすると、このまま教会に置いておく事になるのかもしれない。

このまま、教会のみんなと一緒に過ごす人生。

それも悪くないな、と彼女は思った。

おそらく、レデルはマミー・キャット及びアップルとの交渉に取り掛かっているのかもしれない。キマイラの身元を引き渡してくれと。

教会での暮らし。

それはこれからも続いていくのだろう。

悪くないとは思う。

もし、今の人生ではない新たな人生を送る事が出来るとするのならば。一体、何を目指して生きていくのだろうか。

しかし、その前にやる事がある。

.....アップルによって、人質にされている弟の確保。

レデルに切り出すべきだ。

しかし、どうするのだろうか。

まさか、彼女が弟を見捨てるとは思えない。

だが、アップル側としても、どうやら優秀な人材らしい、キマイラを手放したくはないだろう。

。

彼女は頭の中で首を横に振った。

今は、それはいい。せめて後、何日か。

後、何日かくらいは。そんな夢物語を思い続けてもいいだろう。

弟の事は忘れて。弟が両親にした事も忘れて。組織の事も忘れて。

後、何日かくらいは。

現実を何も見なくても。

きっと、いつか、それは幻想ではなく、勝ち取った現実になるのかもしれないから。

ぼつりぼつり、と色々な事を考え始める。

たとえば、今とは違った将来像。

そういえば、これまで学校に通った事が無い。普通の人間は学校に通って人生を築いていって

いる。

「学校に行ってみようかなあ」

そんな事をふいに呟いた。

そういえば、自分の年齢を思い出す。

同い年の人間なら、みんな学校に通っている筈だ。

どうせなら大学に入学してみるのもいいかもしれない。自分は勉強を得意になれるのだろうか。自分の頭脳は、そういった分野に生かせるのだろうか？

「ねえ、ノルン。これから、どうやって生きていきたい？」

「うーんと。娼婦になりたい！」

キマイラは頭を抱えた。

この少女は……。

「なんでまた、そんなものに……」

「ルージュが好きだから。そういえば、また手紙のやり取りしたいなあ。娼館での素敵な事、殿方との出会い。淡い恋の話。また聞きたい」

「ノルン……。あの職業はねえ……。性病とか蔓延しているし、性病で死んでいく女達も多いし。全部、作り物の幻想なんだから。それから、まず心が壊れると聞く。どんどん心が壊れていくと。ノルン、たとえば、貴方、嫌いな異性に毎日、何十人と触れ合うのって出来る？」

「うーん……ルージュはとても素敵な人ばかりだって言っていたよ？」

「そのルージュとかいうの、会った事ある人？」

「無いよ。いつも手紙をくれる、職業の話とか恋の話とか、色々してくれる」

「……………なるほど」

キマイラは話を聞いて行って、それに至った。

おそらくは。

おそらくは、彼女の言っているルージュという女。

そいつは存在していない。

何者かが、彼女を分析する為に。あるいは精神面においての実験の一環として、架空の女性を作り出して、彼女に手紙を送っていたのだろう。

彼女が話してくれた生い立ち。

森の中に閉ざされた屋敷での生活。

他者の存在しない少女。

おそらくは、そんな少女に特殊な認識を与え続けて、どのような発達を遂げるのかを実験したかった、という処だろうか？

「お互い、不幸よねえ……」

キマイラは呟いた。彼女には聞こえないように。

「私、不幸かな？」

しっかり聞こえていた。意外と耳がいい。

「ノルン……貴方がしたいのは恋愛。あるいは他人との時間の共有なんだと思う。娼婦は止めて

おきなさい。この仕事をしていると、そいつら道具に使う任務だってやるから。彼女達の悲痛を少しは知っているつもり」

ふう、と溜め息が出る。

この仕事とは、彼女の行っている暗殺や諜報、虐殺などの事。

そういえば、ノルンにはまるで彼女の生い立ちや、この街に来た理由を話していない。

「駄目かなあ？」

「駄目。私、彼女達、見てきたから。抜け出したい者が多かった」

それから、様々な理由で、彼女達を殺さなければならない事だって、あった……。

ノルンを見ると、微妙に落ち込んだ顔をする。

「そっか」

と何だか少し、寂しそうに呟いた。

「ええ、それに……多分、貴方。……女性としての役割を果たせない。肉体の構造的に」

ノルンは首を傾げた。

キマイラはひょうひょうと、話題を切り替える。

「ノルン。分かったわ。貴方はきっと、誰かを愛したいのよ。もしくは愛されたい。ずっと一人で生きてきたんでしょ？ だから、貴方が本当に望んでいる事は違う事なんだと思う」

キマイラは優しく、彼女の灰色の髪に触れる。

「だから、いい人見つけなさい」

彼女の髪の毛はとても柔らかい。天使の羽毛のよう。

二人はかなり打ち解けていた。

ノルンはキマイラに自分の事を沢山、話す。

キマイラは話せる事だけを話す。

そんな関係。

気付くと。

公園に来ていた。

見覚えのある場所だ。

所々の樹木に孔が開いている。

公園には、めったに人が訪れないが、一応、街の体裁の為に作られた場所。

そこで、一人の少年がろくに掃除の行き届いていないベンチに座って、不機嫌そうな顔をしていた。

オルギアだ。

二人は彼に一瞥すると、そのまま通り過ぎようとする。

彼の方が二人を見つけて、恫喝するように喋った。

「おい、無視かよ。なあ、おい、お前。俺と勝負してくれよ！」

キマイラは呆れた顔をする。

駄目だこいつは。

やっぱり、どうしても自分の自尊心だとかを守りたいらしい。

「俺はな、女ごときに負けてちゃいられねえ。俺にはこれからもずっとずっとな、この力を自信に変えて生きていくんだよ」

キマイラは読み違いを起こしたと思った。

巧く、やれるつもりだったが。

しかし、これで彼の行き場の無い征服欲、攻撃性は、少なくともキマイラへと向けられたという事になる。

何で、こういう人間に育ったのかなあ、と彼女は思う。

そして、ふと思い出した。

このオルギアという少年、こいつは。

そう。

弟に似ている……。

自分の持て余している力で両親を殺した弟に……。

「何の勝負？」

キマイラは冷淡に聞いた。

「射ち合いだよ。お互いの手に持った空き缶を射ち合うんだ。どうだ？」

「何で貴方と命を賭けないと行けないの？」

面倒臭い。

本当にこいつは馬鹿な男だ。

「失敗したら、指が千切れるじゃない。分かっているの？」

「怖いのかよ？」

「ええ。怖いわ、とても怖い。だから、止めましょう」

挑発にはまるで乗る気にならない。

「へっ、やっぱり女だな。臆病だ。いいか、俺の勝ちだ」

「はいはい。分かったから、貴方の勝ち。私の不戦敗。だから、ねえ、もういいでしょう？」

オルギアは複雑そうな顔をしていた。怒りと悔しさ。

「何で、そんなに勝ちたいの？ 強くなりたいの？ 何か理由でもあるの？」

少年は黙る。

キマイラはノルンの手を握り締めて、公園を離れる。

ノルンはぼそり、と彼女に囁く。

「あの彼の事は気になって、レデルから聞いたんだけど、あの子、オルギアって戦争孤児なんだって。だから、敵兵を沢山、撃ち殺してやりたい。そういう憎しみだけで生きようとしているって」

へえっ、とキマイラは興味無さげに相槌を打つ。

やはり、面倒臭い。

自分は彼の、彼らの保護者じゃない。

そんなもの、全部、レデルが解決すべき事だ。本来ならば知った事ではないのだ。

二人は立ち止まった。

風の音。

キマイラの全身が勢いよく、跳ねる。

鮮血。

赤いものが、宙に舞う。

ノルンは顔面蒼白になる。

振り返ると、その行動を起こした少年の顔も、真っ青になっていた。

「お、お、俺はそんな、そんな撃つつもりじゃ。髪の毛、帽子を吹っ飛ばしてやれば、幾らなんでも怯えるだろって……」

そう言いながら、少年は走ってこの場を逃れる。

ノルンは彼に対する怒りが湧き上がってくる。

キマイラは地面に倒れていた。

帽子が落ち、剥き出しの角が晒されている。

しばらくして、オルギアが去った後。

キマイラは起き上がった。

「馬鹿。前頭部に正確に命中しているじゃない。……ああ、でもこれであの子、人殺せなくなったかも。けれども、私だったから良かったものの……」

そう言いながら、キマイラは自分の額の傷口を弄くる。

そして、無色透明な弾丸みたいなものを取り出す。

しばらくすると、それは彼女の掌の中で徐々に消滅していった。

「大丈夫なの？」

ノルンは泣きそうな顔をする。

「平気、平気。構える体勢に入っている気配を感じたから。その時に、脳の位置をズラした。まあ、何を言っているか分からないけれども。これが私の能力の一端。……やっぱり、凄く痛いわね。……腕の筋肉やお腹の脂肪なんかを代わりに持ってきたから」

そう言いながら、キマイラはふらふら、と歩きながら、ベンチに腰掛ける。

「ああ、お腹が空いた。ダメージを回復させる為に食事がしたい」

そう言いながら、彼女は空を見上げていた。

ノルンは彼女に近付き、彼女の身体をきつく抱き締める。

ありがとう、と彼女は呟いた。

青空の無い、灰色に塗れた昼間の太陽は焼けるように暑かった。

十

教会の前にある階段。

そこで、二人の少女が蹲るように座っている。

リーデラとガーデンだ。

ノルンはリーデラに話し掛けた。

リーデラは、少し陰鬱な顔で本を読んでいた。

ガーデンが隣で寄り添っている。

「こ、こんにちは！」

話し掛けてみる。

何だか、声が裏返ってしまった気がするが、気にしないようにした。

ガーデンはびっくりした顔をした。

そして、何だか泣き出しそうになる。

「今日、リーデラ元気無い……」

ぼそぼそと消えそうな声でガーデンは言う。

リーデラは本を閉じて、ノルンに笑い掛ける。

「違う、違う。今日は、そのね。“あの日”だから」

「あの日？」

灰色の髪をした少女は思わず聞き返した。

余りにも自然体で。

「……ノルン、あの日はあの日よ。……。ほら、女の子がね、大人になる為の」

ああ、とノルンは思い出す。

「そっか、リーデラ、今日、生理なの」

彼女は奇妙そうな眼でそれを口にする。

リーデラは顔を真っ赤にする。

「こらこら、ノルン。恥ずかしげもなく、言わないの」

「生理って痛いなの？」

ガーデンがくすくすと、二人のやり取りを見て笑っている。

「痛いわよ。本当に、動きたくなくなるし。苛々するし。ノルンの場合はどうなの？」

「……この前、初めて生理が来た。取り敢えず、血が流れるのは分かったけど。正直、痛みは感じない。徐々に痛くなってくるの？」

リーデラとガーデンの二人は目を丸くする。

……ノルンは幾つだったか？

この前、初めて？

三人の間で、少しだけ微妙な空気が流れる。

「あ、この前って言っても。三ヶ月くらい前だよ、それから来ない。でも、びっくりしたよ。本当に。本で読んだ通りだった。でも、キツいって思っていたんだけどね」

「……ノルン。生理の日は月に一度くらいの周期で来るよ……」

リーデラは少し困惑したような声で言う。

ノルンはそれを言われて、引き攣ったような顔をする。

「そうか……」

灰色の髪をした少女は、自分の長い髪をかき上げる。

「やっぱり、私。人間じゃ無いのか……」

階段の処に、また、一人の少女が現れる。

「それは本当に経血の血なの？」

キマイラは何だか、少し憔悴したような顔で現れて、奇妙な事を言った。

「えっ？」

ノルンは更に混乱したような顔をする。

「ノルン。思うんだけど、貴方の肉体は子孫を残す力があるとは思えない。ひょっとすると、内臓を傷めているとかじゃないの？」

ノルンの腕に刻まれた、バーコードの事は三名とも知っている。

ノルンが人工生命体だという事も、四人だけの秘密だ。

「ああ、ちなみに私も生理無い。身体の排泄機能は完全にコントロール出来るから。その一環で」

キマイラはノルンの腹を軽く摩る。

「腎臓を損傷している可能性がある。でも、三ヶ月前なら。もう治っているのかも。ノルン、貴方の身体、定期的にメンテナンスした方がよくなって来るかもしれないわよ？」

ノルンは困った顔をする。一体、どうすればいいのか分からない。

彼女に心配されなくとも、メンテナンスなら、頻繁に行っている。

でも、ふと思う。この身体が屋敷の外に出て、何か異常をきたすかもしれない。

ひょっとすると、一度、あの屋敷に戻った方がいいのかもしれない。

でも、今はまだ戻りたくはない。……。

「とにかく、貴方が何者なのか私が調べておくわ。でも、多分、私は貴方の製造元を知っている。そして、貴方がどういう存在なのかも、調べておく」

「頼もしいな」

と、ガーデンが口を開いた。

「キマイラって、とっても頼もしい」

少し、か細い声。

ノルンよりも、更に内気な彼女。

消え入りそうな声。

けれども、他の三名は、彼女の声をちゃんと聞き取ろうとする。一字一句、漏らさずに。

みんな、優しい。

みんな、人とは違う異端を抱えている。だから、他人の傷に敏感なのだ。

誰も、ガーデンの事を変だと責める人間なんていない。

それぞれがみな、抱えているのだから。

「私の事も教えて欲しい……」

ガーデンがそう言った。

「何で、ご飯を食べられないのか。ご飯が怖いのか、分からない。キマイラは何でも出来る。何でも知っている。だから、教えて欲しい……」

帽子を被った少女は困った顔をする。

「そんな事、言われても、ねえ」

「私、いつも点滴とかで栄養を取って。ご飯の代わりにしている。ダメなんだって分かっている。けれども、食べられない。お水だって、本当は怖い……」

彼女の両目からは、涙が零れ落ちていた。

どうしようもない程の恐怖、嘔吐感。苦痛。苦悩。それらが入り混じった。

でも、分かり合えなくても、分かり合えない、という事を分かり合える。……。

代わりに、リーデラは嬉しそうな顔をした。

「ねえ。ガーデン。私、決めた」

彼女は笑う。

「私、ゼロムに告白する」

そう言った彼女の顔は、何だか晴れ晴れとしていた。

少しでも、希望を、と。言わんばかりに。

十

軋んだ糸が途切れるように、それは訪れた。

店長にこっぴどく叱られた。

ティーカップを割ってしまった事と。

アイス・ティーを出す筈の客相手に、アイス・コーヒーを出してしまった事。

そして、更にその時、八つ当たりに半切れを起こしてしまい、客を不快にさせてしまった事。

溶け込める筈だった。

雨に混ざる景色のように。

自分は一介の風景になりたかったのだろう。

その日も、教会を訪れた。

あら、ゼロム。嫌な事があったのね。

レデルがいれば、すぐに彼の状態を察して、そんな事を言って気遣ってくれるだろう。

そして、ゼロムは笑顔で、彼女の笑顔に応じるだろう。

「ああ、すみません。最近、ちょっと眠れなくて。あのですね、少し睡眠薬を分けて貰えませんか？」

独り言を、無人の部屋で呟く。

部屋の鍵が開けっ放しで、彼女は外出しているみたいだった。

そう言って、彼はレデルの部屋にある棚から、睡眠薬の錠剤が入った瓶を取り出す。

そして、ふらふら、と自分が暮らしていた部屋へと向う。

「それにしても。今日は疲れたなあ」

そう言って、彼は瓶の蓋を開く。

ざらざら、と錠剤が手の中に流れ込んでいく。

もう、何も考えたくない。

もう何も聞きたくない。……。

十

ゼロムが自殺未遂を図ったのは、今日の夕方頃だった。

リーデラが横たわる彼を見つけて、他の人間に知らせた。

レデルは買い物から戻って、買って来た食料品の袋を置くと、すぐに彼の下へと寄り添った。

そして、何とか胃の中にある薬物を吐かせた。

おそらく、助かったとしても、最低二日くらいは目が覚めないだろう。

何より、このまま死んでしまう可能性だってある。

どうやら、睡眠薬の他にも、色々な向精神薬を口にしたらしい。

「ゼロム……、必死で生きようとしていたのに。……」

レデルは沈鬱な顔になる。

少し、奥歯をかりかりと、噛み締めている。

「衝動的な行為みたいだけど、首吊りや飛び降りじゃなくて、本当に良かったわ。薬物摂取なら、助かる可能性は高い」

キマイラは小声でノルンに囁く。

「ねえ、キマイラ。治せないの？」

リーデラがキマイラへと泣き付いてくる。

彼女自身、今にも死にそうな顔をしていた。

もし彼が助からなかったら、後追いをしようと言わんばかりに。

「私は何でも出来るわけじゃないって。薬物でしょう？ 他人の身体には、注入する事は出来るけど、放出させる事はちょっと無理」

キマイラは困った顔をする。

「私の傷、治してくれたじゃない？ 壁の染みだって」

「貴方の傷は内側に押し込んだだけ。壁の染みも同じ。そして、何より私は心の傷を塞ぐのは絶対に出来ない。だから、祈るしかないのよ」

言って、自らの言動の冷たさに気付いた。

リーデラは泣きじゃくって、キマイラに対する怨嗟の言葉を吐いている。

ノルンも彼女の両手を握り締めて、哀願しているかのような視線を向ける。

「大丈夫、……だから」

レデルが、三名の下に来て、言った。

そして、それぞれの手を握り締める。

「あなた達の辛さを、私も感じ取りたい。ゼロムとも、もっとちゃんと話すべきだった。だから、彼が目を覚ましたら謝ろうと思う」

レデルは泣いていた。

感情の洪水が湧き上がっている。

三名とも、何も言えない。

そう、彼女だってそんなに強い人間じゃない。

きっと、彼女だって強い痛みを抱えている。

きっと、この施設の子供達を救済するという行為、使命感が、彼女自身の救済へと繋がっている。そうとしか思えない。

十

「さてと」

マミー・キャットは街の一角に潜んでいた。

そこは地下区画の隅。橋の下だ。

普段は余り人が通らない場所。

そこに、沢山の“下僕達”を集めていた。

彼女が選んで作った忠実な動く人形達。

大体が美形の男や、筋骨たくましい男達だった。

みな、空ろな眼をしている。仄かに腐臭が漂っている者もいる。

彼らの牙や爪、体液などによって、更に感染者を増やす事が出来る。

「やはり、レデルは裏切ったか。キマイラも多分、彼女の側に付くなあ。だとすると、やっぱり私がやらなければならぬ。ね、お前ら、存分に暴れて、存分に食っていいからさあ。その時が来たら」

彼女はつかつかと、橋の近くにある階段をよじ登る。

そして、適当な男に声を掛けた。

「あら、こんにちは」

男は顔が真っ赤になる。

顔面を化粧によって誤魔化しているとはいえ、美人の造詣は保たれている。

男が何か口にしようとした瞬間。

ふと。

二人の間に、一人の人影が現れた。

彼はコートに目深く帽子を被っている。顔はよく分からない。

「おや。『三人目』じゃないか。どうしたんだ？」

マミーは訊ねた。

「そろそろ様子を見たくてな。それにしても、やはり私の存在は不便だ。そこの男、そいつが去ると私は消える」

三人目の男。二人で会話していると現れる三人目の余計者。

彼の正体は幽霊だった。

元々はアップルの被験者だったが、死んで、自身の能力のみが現世に存在している。

マミーに声を掛けられた青年は困ったような顔をした。

何か、やっかいごとの匂いがする。そんな様子。

「あのね、貴方って映画とか好き？」

マミーは彼に話し掛ける。

三人目は独り言のように呟き続けた。

「キマイラを始末したいのか？ 教会だけでなく。あそこは貴重な場所だぞ。みな、未知の力を現出させる可能性を秘めている。特にリーデラという少女を私は気に入っている。彼女の異常な色に対する恐怖。レデルからの報告によれば素晴らしいじゃないか。青が怖い、か。何か巨大な力を押さえ込んでいるのかもしれない」

マミーは興味が無さそうな顔をする。

そして、そのまま青年に駆け寄った。

「何か、あの人、変質者みたいなものよね。ねえ、守ってくれる？」

青年はマミーから溢れてくる妖艶さに魅了されて、どんどんまともな思考を失っていく。

三人目の男は話を続ける。

「一応、オルギアという青年。あれは駄目だな。鉄砲玉にしか使えないだろう。彼の破壊願望は凡庸だ。もっと強い歪み、狂った憎悪の形が必要だ。もし教会を潰すとなると、あのオルギアという少年が牙を剥くだろうが、彼は始末してやれ。その代わりに、リーデラとキマイラは生かすべきだ。彼女達は強力だ。マミー、私からすればお前も異物だ。アップルにとって害になる危険性がある。お前はこの街の住民の命を丸ごと使ってでも、彼らを追い詰めようと考えているが。この事を忘れるな」

三人目は帽子を直す。

帽子の下に存在しているのは、何も無い虚無だった。

夜の空気だけが、帽子の下、服の下に存在している。

マミーは軽く、青年の首筋を引っ掻く。

すると、彼は痙攣したように崩れ落ちた。

余計者としての存在を不可能にされた三人目の男は、夜に溶けるように消える。

「ふん、私には私のやり方があるのよ」

そして、マミーは青年を背中に背負う。

階段を降りていく。

彼女の兵隊達の群れ。

マミーは青年の服を脱がせていく。

そして肌に触れる。

マミーは彼に覆い被さる。

そして……。

十

「生きる気力を取り戻させなければならないのよ」

キマイラは言った。

レデルは項垂れている。

何で、この少女はこんなに強いのか。

レデルはまるで、年上と話しているような錯覚を覚える。

しかし、やはりどこかあどけない。

ゼロムはまだ昏睡状態から抜け出していない。

仕事先には急な病で倒れていると電話を入れた。

余り長く休むような事態になれば、仕事を止めてもらう事になる、と言っていたらしい。

レデルは露骨に憂鬱そうな顔をする。

「子供達の前で、こんな顔をするわけにはいかないのだけどね」

「何、貴方一人で抱え込んでいるのよ」

キマイラは彼女に強く言った。

「貴方、幾つなの？」

少し嫌みっらしい言い方。

「私の倍以上は生きていますでしょう？ 三十代？ 四十代？」

「キマイラ……」

レデルは少しむっ、とする。

「あなたねえ」

「人間が生きられるのってせいぜい八十年くらいじゃない。樹木は何百年も生きるし、そこら辺の石ころなんて何千年？ 何万年？ 私達はねえ、ああいうのから見れば、大差無いのよ。だから、レデル先生。お願いだから、一人で抱え込まないで、貴方の方なんじゃないの？ 子供達に心を開いていないのは」

容赦無く言う。

「私はまだ生きてきた時間は少ない。その、人生経験？ それを語らせたら、貴方の方がずっとずっと上だって分かる。でもねえ、私には力があるの、他人の心を微細に読み取る力とか。だからねえ。貴方が抱えている者を教えて欲しい」

レデルは改めて、この少女の凄さを思い知らされている。

適わないなあ、と思う。

もし、彼女が成長して、自分と同じ年くらいになったらどんな人間になっているのだろう。

逆に、そんな彼女の力を煙たがる人間から向けられる憎悪はどれ程のものなのだろう。

多分、彼女にはそんな経験は無い。

それが重ねてきた年齢の違い。

そう、彼女には他人から嫉妬される、という経験に乏しいのだろう。分からないのかもしれない。自分自身がどれだけ強く、明晰なのかが分からない。

この社会は弱い人間も嫌うが、強い人間も、また嫌う。

この施設の子供達の大半は前者、レデルも前者。そして彼女は後者。

真っ直ぐで、平らのような平均値を好む人間の社会。

それを彼女は知らない。

アップルに所属していた者達、アップルの幹部達が、みな社会の平均値から外れて組織に入ったように。

彼女も、自分自身の強さに耐えられなくなるのかもしれない。

だから、その時の為に支えになりたい。

「ゼロムはどっちだったのかしらね？」

ふいに、そんな事を呟いた。

キマイラはレデルの言葉を聞いて、元々の話の流れを思い出した。

「そうね。彼は決して弱くなかったんだと思う。でも、自分自身に押し潰された。そんな気がする」

強さと弱さという言葉を出していないのに、彼女にはレデルの言いたい事がすぐに伝わったみたいだった。

「彼には大きなトラウマがあった。それは彼だけのもので、本当はみんな触れるべきじゃない。けれども、私は彼を癒やしたかった。でも、出来ない。薬を使ったら、一時的には彼を癒やせる。私は薬以下なんだって思ったわ」

自然と言葉が出てくる。

二人の間に、もう年齢という壁なんて無い。

レデルは自分が少女のように。

キマイラは自分が大人の女性のように、相手と会話している。

時計を見ると二時を過ぎている。

もう寝る時間。

それでも、二人は話し続けていた。

「私の少女時代もこんなに明晰だったらなあ、変わっていたかも」

「レデル先生の少女時代？」

「ええ、本が好きだった。それから優しい物語。昔から人を助ける仕事がしたくて。人の笑顔が好きだった。クラスでいじめられている子をかばって、私もいじめられたっけ」

キマイラは好奇心に満ちたような顔をする。

「学校ってどんなところ？ 面白いの？」

「良いところも悪いところもある場所。沢山の子供達で集まって。勉強したり、遊んだりする。でも、その中で疎外される子達が絶対に出てくる。私はそんな疎外される子達の味方になりたいってずっと思っていた。一人で机で俯いている子とか。木の下で一人でご飯を食べている子とか。そういう子ばかりと仲良くなった。でも、それが悪い事のように言われた事だってある。あいつらは弱いか、自分勝手な奴らなんだって……」

キマイラは困ったような顔をする。

「何か良い思い出とか無いの？」

「そうね。そういう子達と一緒に、テストの点とかを見せっ子したりするのは面白かったかなあ。どっちの点数が低かったか、って。その後、答案用紙を破いた。それから、嫌いな先生は多か

ったけれど、好きな先生が一人いた。クリスチャンの女の人で、いつも聖書の話とかしてくれた。彼女といると何だか安心した、包まれているような感じで。私はきっと、その先生みたいになりたいんだと。いつも心のどこかにその先生の姿がある」

「聖書の話以外に、どんな話をしてくれたの？」

「男の子の話。どんな子がタイプかって。それから俳優の話。すごいでしょ？」

キマイラはうーん、と頭をひねる。

「それって面白いの？」

「私は、それから私の友達はとても楽しんで聞いていた。窮屈な授業ばかりだったもん。お昼休みにも会って話してくれた、すごく良い先生だった」

レデルはふと思って、コーヒー・ポットを手にする。

そして、コーヒーをカップの中に注いでいく。

「いつもその先生、コーヒーを水筒の中に持ち歩いていて。私達に分けてくれたなあ、甘くて美味しかった。あの味は生涯忘れない」

それから、他にも色々な事を話した。

レデル先生の若い頃の恋の話。

キマイラの家族の話。

それから、施設の子供達の事。……………。

そういえば、とレデルは言う。

ガーデンは絵を描きたがっている、と彼女は言った。

ああ、あの無口な少女にはそういった面もあるんだ、とキマイラは返す。

でも、自信なさそうで行動に移そうとしないのよね、と彼女は愚痴を漏らす。

何か後押し出来るものがあればね、とキマイラは言う。

それから、ゼロム。もし、どちらも同じ年くらいだったら、彼、私のタイプなの、とレデルは無邪気に言った。

まったくしょうもないわね、とキマイラは返した。

まるで時計の針が止まったように。

穏やかな時間が流れた。

会話をするって何て素晴らしいんだろう、とどちらかが思った。

心の壁の壊し方って難しいのよね、ともどちらかが思った。

あるいは、二人とも同じ事を思ったのかもしれない。

夜は更けていく。

十

リーデラは、ゼロムの寝ている寝室へと向かった。

夜の風が、カーテンをはためかせている。

静寂だ。

ゼロムは睡眠薬によって、深い眠りに付いている。

彼女はそっと、耳元で彼に囁いた。

「ゼロム、私、あなたの事が好き」

彼女は全身を震わせるように言った。

夜の静謐の中、それは力強く響く。

彼女は彼を強く、強く抱き締める。

そして、そっと、その頬に口付けをする。

大切なもの、守りたいもの。

あなたが生きている意味は、私の為にある。

彼女はそう願った。

決して、いなくなって欲しくない。

私の為に、生きていて欲しい。

彼と共なら、きっと生きる苦痛を乗り越えられる。そう思っている。

この世界は、余りにも怖いものによって浸食されている。

青、青、青、青、青、青、青、青。

青の世界が色々な場所に満たされている。それに囲まれる事が、もうどうしようもなく、拷問なのだ。そこら辺に転がっている小石だって、見ようによっては鈍く青色に輝いている。それがどれ程の恐怖なのか、私には分からない。

ゼロムの部屋を出る。

すると、灰色の長い髪をした少女が立っていた。

「どうしたの？ ノルン」

「私もゼロムを見に来て。それから、貴方が心配だったから」

そう言って、彼女は指先をリーデラの顔へと当てる。

リーデラはきょとん、とした顔をする。

ノルンは後ろを振り向くように告げた。

すると、闇の中に伸びた影が変形していく。

それは、動物の形へと変わっていく。

ウサギから狼に、狼から羊に。様々な動物達へと。

巻き毛の少女は言葉を失っていた。そして、高揚するかのような顔色になる。

「ノルン？」

「ふふっ。私の魔法だよ」

彼女は笑った。

リーデラも笑った。

まるで、ノルンそのものが魔法みたい、とリーデラは言う。

ノルンは首を横に振る。

ノルンは今度は、影の中に色取り取りの虹を作った。

金髪巻き毛の少女はまた驚いた声を上げる。

影の中に、沢山の小さな虹を作っていく。

オルギアのように、人を傷付ける力も、キマイラのように何でも出来るような力でもない。でも、これはとても素晴らしい魔法なんだって、ノルンは思っている。

十

それは夜明け頃だった。

一本の電話が部屋の中に鳴り響いた。

いつしか、レデルとキマイラ、二人とも眠っていた。

レデルは電話の音で目を覚まして、受話器を取る。

「もしもし……」

電話相手からの話声が聞こえる。

それは、ぼそぼそっ、と囁くように話しかけてきた。

レデルは電話の声に返事をする。

彼女は眼の色を変えた。

レデルは受話器を置く。

キマイラはぼんやりとした顔をしながら、両目を擦っていた。

そして、レデルの顔色を見て気付く。

「まさか……」

「マミー・キャットは。アップルは、とうとうこの教会を潰す決断をした。だから、子供達全員を引き渡せって。私は断った」

「そう」

「アップルの決断はそう。……でも、マミーは、彼女は。きっと、何でもする。何でもやってくる……。キマイラ……」

レデルは唇を強く噛み締める。

「あなたはきっと、裏切るだろうから。出来れば、始末する、って……。アップルの意思というよりも、マミー個人の意思で」

「そう」

キマイラは自分の角を撫でる。

そして、そのままぐしゃぐしゃになった髪の毛を手櫛で直す。

「分かったわ。……私も覚悟を決める」

まるで、底冷えするような声だった。

……何かを守る為に、何かを仕方なく、捨てる、といったような。

七日目

オルギアは罰が悪そうに、ゼロムの寝室を訪れる。

キマイラと顔を合わせたからだ。

キマイラは確かに、オルギアの弾丸によって頭を撃ち抜かれた筈なのに平気にしていた。彼を一瞥して、面倒臭そうな顔をしているだけだった。

それよりもゼロムの自殺未遂。

オルギアは、それでかなりのショックを受けていた。

半分くらい兄貴分に見ていて、半分くらい弟分に見ていた年上の青年。

それが、オルギアにとってのゼロムだった。

それにしてもだ。

キマイラとノルンが来てからというもの、調子が狂う事ばかりだ。

八つ当たりでしかないかもしれないが、彼女達が疫病神に思えて仕方が無い。

それから、彼はキマイラの無事を確認すると、また延々と彼女を打ち負かす方法ばかりを考えていた。

何かと、言葉ではぐらかして、彼の意識を別の処に向けさせようとする彼女。

どうやったら、彼女の気を引く事が出来るのだろうか。

「たくよおっ」

やはり苛々する。感情を掻き乱される。

.....しかし、あの女、何をやったんだ？ やっぱり俺のような力があるってのか？

悔しい。自分の存在が否定されているかのようで、悔しい。

何とか、彼女の心をへし折ってやりたい。そんな考えばかりが頭の中で巡っている。

.....連射して全身に射ち込んでみるか？ さすがに避けられないだろ？

思って気付いた。

今、彼女を殺す事ばかりを考えている。

自分の発想に寒気を覚えた。

そして、次の瞬間に頭に浮かんできたのは。

刑務所、少年院。

人を殺すという事。

漠然と戦争に行ったら、殺してもいいんだと考えている。

でも、こんな場所で殺した場合、どうなるのだろう。

そういえば、とオルギアは思う。自分は勉強が苦手だ。施設内で頻繁に行われる、国語や数学、社会の勉強に余り身に入れていない。

とにかく、自分には力がある。それさえあれば、何もいらなないんだと思った。

.....やっぱり、あの女のせいだよ。たくっ。

考えれば考える程、悔しい。

スポーツでも挑んでみようか？勝てる気がしない。

何か勝負を仕掛ければ仕掛ける程、プライドをくじかれるイメージしか湧き上がってこない。
それでも、頭の中が真っ赤だ。灼熱している。
一体、彼女は自分にとってどういう存在なんだ？

十

「ゼロムだけは大丈夫だと思っていた……」

リーデラはショックで塞ぎ込んでいる。

隣には、ガーデンが付いていた。

教会にいる人間は、やはりみんな弱い。

外の世界で生きていくだけの力が無い。

私はどうすればいいか分からない。

キマイラとレデル先生は、二人してゼロムに付いている。

途中、レデル先生は用事があるから、と言って、出て行った。

一番、頼りになるのはガイツォなのじゃないかと私は思う。

彼はこんな時でも、鶏に餌をやったり、草むしりをしていたりする。実は、教会を陰で支えているのは彼だ。

私はどうしたら、いいのだろう。

私はリーデラとガーデンの下へと向かう。

リーデラの部屋。

彼女は枕に顔を沈めて、泣きじゃくっていた。

ガーデンは隣で悲しそうな顔で、彼女を見ている。

どんな言葉を掛ければいいのだろうか。分からない。

「ノルン」

ガーデンが呟いた。

私は何だか、申し訳無い気持ちに襲われる。

「……いてくれるだけでいいから」

彼女は言った。

「ノルン、いてくれるだけでいいから……」

私は困惑する。

人との距離感。人との付き合い方、分からない。

でも。

今、とにかく一緒にいてくれるだけで。力になれるのだろうか。……。

十

キマイラとレデルは打ち合わせていた。

ゼロムの事は悲しい。何とか助かって欲しいと思う。

だが。

それどころではない結果も迫っている。

アップル、マミー・キャット。

完全に宣戦布告と取れる電話を、先ほど貰った。

だから、戦わなければならない。

教会を守る為に。

自分達の大切なものを、守る為に。……。

掛け替えのない、日常を守る為に。

未来を守る為に。

レデルは街に向かっている。

マミー・キャットの戦略を考えていた。

教会の子供達は、キマイラに任せる事にしていた。いざとなったら、彼女が全員を守らなければならない。

二人は、マミーの能力『インシニレート』の概要を大体、知っている。

人間をゾンビにして、支配下に置く事が出来る。でも、司令塔となる彼女を倒せば、ゾンビ達は徐々に活動を止めていき、動かない骸へと変わっていく。ゾンビ映画のように、無限にゾンビ・ウイルスが感染していくという危機は訪れない。その辺りは、アップルが先に調整して、彼女の肉体に改造を施している。

レデルは地図を片手に、街を回っていた。

自分だったら、どこから攻撃してくるか。

レデル自身もかつて、戦闘訓練を行っていた。

今は、その頃のコツを思い出しながら、

銃器の扱い方。咄嗟の対応法。体術。

……アップルで行ってきた軍事訓練は、本物の軍隊を模範した。そして更に、対エーテリオン対策の為に改良を施されたものだった。

……まるで、役に立たない。

このままでは、駄目だ。考えなくてはならない。

マミーのゾンビは明かりに弱い。

だから、昼間は余り活動出来ない筈だ。

だから、襲撃してくるとすれば、おそらくは夜。

それまでに、彼女の居場所を突き止めなければならない。

教会の子供達を連れて、車で逃げる、という方法も考えたが、かえって逆効果だ。

やはり、教会を砦にするしかないと思った。

危険だけれども、とても危険だけれども、それ以外に思い浮かばない。

キマイラには小型の通信機を渡しておいた。

これで、お互いの状況を話せる。

二人で、知恵を絞ればいい。

「それにしても、マミーは何を考えているの？ ……」

かつて親友だった者。

今は、戦わなければならない、……倒さなければならない敵。……。

レデルは街の人々を、凝視しながら歩いていた。

人々の心の傷が形となって、視えてくる。

様々な傷の痕。みんな、何処かしら傷を背負って生きているのだ。この力を使うのは、レデルだって心苦しい。みんなの悲しみが、苦しみが、自らの心の中へと入ってくるようで。

けれども、使わずにはいられない。

マミーの戦略上、いる筈だ。

この中に、“最近、知人が行方不明で悲しい”といった傷を持つ者が。

だが。……気付いて立ち止まる。

情報を追っていく時間は残されていない。……。

現状は。

……何十名。ひょっとすると、何百名ものゲリラが襲ってくる場所で。二人でゲリラの司令塔を倒そうとしている。そんな軍事戦略ってあるの……？

地図を開く。

地上層にある数々の工場。地下層にある数々の住宅街。

一体、どこに敵は潜んでいる？ ……。

通信機が鳴り響く。

レデルはそれに手を取る。

「仕込みが終わった？ って。……私と合流せずに、あなたはみんなを守って欲しい」

十

キマイラは開けた天井を閉じる。

そして、時計を見た。

大体、三時間くらい掛かった。

今は、もう十二時か……。

「天井と下水。もし昼間攻めて来るとすれば、光の当たらないあの辺りの場所よね。それから、裏庭と森林も見ておくか。……」

マミーは電話で、今日中に事を終えようかと考えている、と言ったらしい。

だとするのならば、夕方から夜辺りに襲撃してくるのが妥当だが。……。

「普通ならそう考えるのだけれども。……」

彼女は手当たり次第に、教会内部の窓という窓を開けていく。

日の光が当たらない、陰になっている部分を可能な限り減らす。

「マミーが直接襲ってくる、という事も考えられる。おそらく、アップル側の判断としては。教

会の子供達全員の奪取。マミー本人の判断としては、子供達全員の始末。そこにズレが生じていると思う。……もっと、考えろ、私。……」

まず、目的を整理しなければならない。

マミー・キャットの始末。

そして、彼女が作り出すゾンビ全ての撃退。

教会の子供達全員の生存。

そして、今は考えられないが、マミーを倒した後の、アップル側との交渉。……。

……そして、余り考えないようにしているが。……弟の安否。

「誰かを守る戦いが、こんなに大変な事だったなんて。……私独りだけなら、どんなに楽だったのだろう？」

思わず、口に出して呟く。

持久戦になるかもしれない。

ゾンビを何体倒そうが意味が無い。司令塔であるマミーを倒さなければならない。

おそらく、マミー本人は襲ってこない。ゾンビでこちらの兵糧攻めを狙う可能性が高い。

だから、守りだけでは駄目なのだ。

こちらから攻めなければならない。

「なあに、してんだよお」

後ろから、声を掛けられる。

少年は陰鬱とした視線を投げ掛けながら、彼女を見ていた。

「ああ、オルギア」

彼女は淡々と言う。

「お前さ、何してんだよ。一体。ゼロムが大変だってのに」

「ちょうど良かった。貴方に頼みがある」

彼は意表を付かれたみたいだった。

「森の辺りにいて欲しい。そこから来る奴は、全員、敵だから。全員、殺しちゃって。後は、私が“仕掛け”を置いておいた」

オルギアは彼女の異常な話に黙らざるを得ない。

「どういう……」

「今がまさに、戦争なの。教会の子供達全員が殺される。貴方のエートルが役に立つ時が来たの。貴方が散々、訓練していた事は無駄じゃない。私はこの教会を守る為に、軍隊から送られてきたの。私には本当の“軍事訓練”があるから、貴方が私に嫉妬しても無駄以外の何物でもないの。私は本当に実戦を積んできたの。……ねえ、オルギア。今日は本当に実戦が行われる、敵の兵隊がこの教会にやってくる。レデル先生は、今、敵の司令塔を探している。オルギア、貴方も戦って欲しい」

強い口調で一度に言った。

有無を言わせない口調。

「……も、森に行けばいいのか？」

「ええ。今日中ずっと。裏庭の森の辺りは、私じゃカバー出来ない。多分、沢山、襲ってくる。全員、射ち殺して欲しい」

そして、彼女は服の中から通信機を取り出す。

「ねえ、レデル先生。“仕込み”は終わった。今から、合流しましょう。もし、兵糧攻めをされたら私達に勝ち目は無い。今、場所は？」

オルギアは困惑しているが、すぐに森へと向かって行った。

キマイラは考える。

後は、教会の入り口の洞窟。

そこも封鎖しておかなければならない。

「みんなには、今日は出ないように行っておくか」

後は、マミーの戦略次第だ。

兵糧攻めにされる事だけは避けなければならない。

今日中に攻めてこない可能性だってあるのだ。

今日、事を起こすと宣言しておいて。何日も敢えて何もせず、こちらの精神を削いでいく方法に可能性だってある。そうやって、焦燥感を与え続ける作戦だって存在する。

時間が経って、みんなの疑心暗鬼が生まれる。何も起こらなかったら、オルギアがこちらに怒りをぶつけてくるだろう。

だったら。……。

「マミーを急かす必要がある。こちらから、罠に嵌めようか……」

彼女は再び、通信機を耳に当てる。

十

「正気なの？ 子供達を敢えて危険に晒すって。……」

レデルは思わず、声が裏返った。

「とにかく、あなたは待機していて」

……マミーが今日中に攻めてくるかどうかすら分からない。私達の精神力を削ぐ事が目的だとすれば、十分に不安定になるまで待って、仕掛けてくる。一週間後か、二週間後かもしれない。子供達の“弱さ”に付け込むかもしれない。

「出来ないわ……」

……街が大き過ぎる。マミーの作成したゾンビを見つけて、そこから痕跡を探すとかも、余り意味を感じない。

「だったら、どうすれば……」

……余りにも危険だけれども、みんなを車で街の外まで連れていく、という事も考えた。でも、それだとやはり危険過ぎる。教会が実際、砦のようになっている長所も無くなる。じゃあ、どうするべきだろう？ 私に考え、というかアイデアがある。

「アイデア、って……。成功するかどうか、分からないじゃない……」

.....無駄かもしれないけれども。やる意味もあるんじゃない？ 駄目だったら、駄目で構わない。

「.....でも、それなら。合流せずに、私一人でやるわ。やっぱり、あなたは教会にいて。その“作戦”なら私一人でも出来るから」

.....マミーを直接、倒さなくちゃならない。貴方、出来る？ 勝てる自信、ある？

「あるわ。拳銃の訓練は受けている。だから、彼女の頭は私が撃ち抜く。あなたは教会にして」

.....分かったわ。やるわよ？

「ええ」

十

レデルはトラックを動かす。

大型トラックだ、街の車の貸し出し屋から借りてきたものだ。

荷台の中に、人が十名くらいは乗れるようなトラック。

雨の街の外へと向かって、トラックは走り続ける。

たとえ、マミーの狙いが外れていたとしても、教会にはキマイラがいる。

だから、自分一人でいい。

時計を見る。

時刻は、夕方の五時頃。

そろそろ、日の光が無くなっていく時間。

山中に近い場所を通った。

ごりゃ、と勢いよく音が聞こえる。

トラック全体が振動する。

.....来た。

バックミラーで後方を確認した。

トラックの一部に孔が開いてある。

身体の所々に、死斑が出た男が、トラックにしがみ付いてコンテナを食い破っていた。

彼女は速度を落としながら、運転席の扉を開く。

そして、全身を丸めて、運転席から飛び降りた。

トラックはそのまま、走り続けて、途中、地面の凹凸にぶつかり、横倒しになる。そのまま、トラックのコンテナに沢山のゾンビ達が群がり、コンテナを食い破り続けていた。

レデルはそれには眼をくれずに、辺り一面を見回す。

自身のエートルを既に“発動”させていた。

他人の心の傷が見える能力。

それを、辺り一面に巡らせている。

.....いた。

此処から、十メートルとちょっと先の木の陰。

そこから、よく知っている。顔のぐしゃぐしゃに解体したい衝動のヴィジョンとして現れている、黒い霧が集まっている。

マミー・キャット。……。

彼女は、そこまで走った。

服のポケットの中から、二つの拳銃を取り出している。

走る。とにかく走る。

木の陰まで向かった。敵は逃げる気配が無い。

目的の場所まで辿り着く。

木の下にはいない。

彼女は拳銃を上へと向ける。

そいつは、顔面を変形させて蛇とも魚とも猫とも付かない形相になっていた。

木の幹に逆さまに張り付きながら、口から、大量の唾液を垂らしている。

「トラックが困ったなんてねええ。てっきり子供達全員を連れて逃げると思ったのだけれども。あのゾンビの物量なら、さすがのキマイラも全員を守り切れなかつたろうしねええ」

遠くで横転している空っぽのトラックの荷台を見ながら、マミー・キャットは少し悔しそうな顔をしていた。

「あなたも、変わったものねえ。昔を覚えている？ 組織の創設時」

「さあてえねえ。でも、組織も変わったわ。人体実験及びエートルの開発に余念が無くなった。今では実験は順調。私一人の独断で教会を潰しても、アップルに損害は無いわ」

「なんで、教会を潰すの？」

「アップルとしてはどっちでもいいのよ。あいつらは役立たず。でも、この先、アップルの手を離れて、未知の脅威になる可能性だってあるわあ。それは何とかしなければならない。だから、私は始末する事を選んだ」

「キマイラも巻き込んで？」

「それもどっちでも良かった。彼女の弟君、きっと組織が育てるでしょうけれども。彼女の方は駄目ね。自我が強過ぎる。組織にはねえ、いらぬのよ。ああいう個性は。必要なのは、目的の為にちゃんと動いてくれる道具。キマイラの才能、実力は私も評価しているわあ。でもねえ、そんなに才能や実力があると困るのよ。組織としては。扱い辛くなる。組織ってのは、適度に優秀で、適度に愚鈍で、適度に無個性の奴が必要なの」

レデルは強い怒りを伴う形相で睨み付ける。

「キマイラの自主性。独自性。行動力を組織は持て余している、と？」

「ああ、そういう事になるわねえ」

怪物は舌を垂らす。

「組織が欲しているもの。重宝しているものは、命令通りに動いてくれる“生きた道具”だから」

レデルは銃口を正確に、マミーの頭部へと向ける。

「言い付け通りに動けない子はいらぬのよお。大体、この世界だってそういう風に成り立っているでしょうお？ ほら、私達がそれぞれの会社や医療施設から追い出されたのだって。そうだ

ったじゃなあい」

淡々と、淡々と、化け物は言う。

「そう、ね」

無心。

銃声。

マミー・キャットの顔面が撃ち抜かれる。

頭蓋骨の破壊される音。

「子供達は、もう教会にはいないわ……」

マミーの右手が深々と、レデルの顔面を握り潰していた。

それは、潰れたトマトのよう。

マミーは左唇から頬骨に掛けて、大きく損傷していた。

彼女の生命を維持するダメージには、まるでなっていない。

レデルはぼそぼそと呟いた。

「キマイラが教会で一人、待っている……」

それだけ聞くと、マミーはレデルの首をごきりっ、と回した。

……………。

十

時刻はもう、夜の七時を過ぎていた。

すでに、外は暗い。

レデルに何度も、連絡しているが、繋がらない。

「……拙いわね。……。通信機を押せる状況じゃないのか。……」

嫌な考えが頭を巡る。

オルギアはまだ、森の中にいる筈だ。

そろそろ、騙されたのかと思って、戻る頃だろうか。

キマイラはその間、念入りに仕込みのチェックを行ったり、リーダーを見に行ったり。ノルンと無駄話をしたりした。

レデルの書斎で電話が鳴る。

彼女は書斎へと向かった。

電話を取る。

「あらあ。キマイラでしょ？ 元気している？」

不快な女の声。

キマイラの顔が憎悪に歪む。

「教会は見つけたわよ。私は此処で電話をしている、貴方はどこから？」

「私？ 私は雨の町にいるわ。何処かはいずれ話すわあ」

権謀術数。

お互いの嘘を探り合っている。

「ちょっと、会いに来てくれないかなあ。子供達はみんな、確保したわよお。任務はもう終わり、すぐに街を出しましょう？」

「あら、子供達を確保したの。何処で？」

少し、電話の音が途絶える。キマイラにはそれが、舌打ちのように思えた。

「ねえ、マミー。今、何処にいるの？」

「キマイラ。子供達の一人だっけ。ちょっとあなたと話したいと言っているわあ」

「誰？ 何で私と？」

お互いが、お互いの失言を誘っている。

キマイラは頭をめまぐるしく回転させていた。

レデルはもう駄目かもしれない。……しかし、確認したいのが本心だ。焦燥は正直、ある。

もしレデルから何らかの情報を引き出していた場合、それが付け入れられる隙になる。だから、レデルにも、オルギアも動かす事などの戦略は教えていない。

「何でって。仲良くなったんでしょ？ この子、ガーデンというのかしら？ 可愛い子ね」

キマイラは状況を把握した。

マミーの狙いも大体、分かった。

教会の人間の名簿を持っているのだろう。だから、当たりを付けているだけだ。

キマイラがガーデンの姿を見たのは、二十分くらい前。リーデラと一緒にいた。

そして、キマイラに失言させたいのだ。……ガーデンはまだ、教会にいる、と。……。

「取り合えず、ガーデンさんと話をさせて」

それだけ告げる。

「ああ、そうそう。キマイラ、今、何処にいるか教えるわ」

それは、ドス黒い。漆黒に満ちたような声音だった。

「私、教会の敷地の中にいるわ。ごくろうさん、待っているわねえ」

それだけ言うと、電話を切られた。

キマイラは蒼褪めた顔をする。

……嘘だ。

もし本当なら、ガーデンの声を聴かせている。

大体、マミーのゾンビが侵入したとしても、撃迎出来るように仕掛けは張り巡らせている。

だが、ゾンビでなく、マミー本人だとすれば……？

キマイラの手の内など、読まれている。トラップの仕掛け方などを教えてくれたのは、他でもないマミー・キャットだ。

取り合えず、ガーデンのいる場所に向かった。そこにはリーデラもノルンもいる。

嫌な予感がする。

ガーデンのいる部屋に向かった。

そこには、ノルンが一人で座っている。

「あれ、ノルン、二人は……？」

ノルンは困惑した顔をする。

「夜風に当たりに」

こんな時に、何故？

「何で、こんな時に？ ……」

「気分が優れないからって。……」

キマイラは頭を抱える。

そして、ノルンには現在の状況を話す事を決意した。

それから、あの二人にも、ガイツォにも話す必要がある。

おそらく、ひょっとすると、このままではキマイラ一人が全てを抱えなければならなくなるから。

十

不確定要素。

ひょっとすると、敵は不確定要素に付け込みたいのかもしれない。

「ねえ、ノルン」

灰色の髪の少女はキマイラの話聞いて、驚きこそしたが、何処かそうなんだろなあ、といったような顔をしていた。

此処は異物以外の何物でもない。

それは分かっている。

「ねえ、ノルン」

「なに？」

「貴方も力を持っているんでしょう？」

ノルンは首を縦に振る。

「うん」

「それはどんな事が出来るの？」

「えっとね」

後ろから、ずかずかと歩いてくる音が聞こえた。

その気配を知っている。

「なああ、何もいないぜ。一日中、森の中を歩き回らせてよお」

オルギア。

彼は不機嫌そうな声に聞こえたが、どこか楽しんでいるようにも思えた。

まるで、本当に軍事の演習気分浸っていたのだろう。満更でもなかったといった顔だ。

彼は頭の中で、空想を働かせて、架空の敵と戦う事を楽しんでいたのかもしれない。

「何も出てこねええじゃねえか」

「聞いて、オルギア」

キマイラはノルンにも聞かせるように、強い口調で言う。

「レデル先生が戻らない。……多分、敵と戦っているのかも。状況は余り良くない。さっき、敵の首領から、電話があった。相手はこちらを苛々させる事も狙っている。混乱させる事も、だからオルギア。森はもういい。ガイツォ、ゼロムの傍にいて。私達は、何処かへ行ったリーデラとガーデンを捜している。とにかく、どんどん拙い状況になっている」

念を押すように言う。

そして、付け足すように言う。

「敵が現れたら、頭を狙って。粉々に吹っ飛ばすのよ。近付かないように」

「あ、ああ」

オルギアの目は輝いている。

本当に楽しそうだった。

水を得た魚のよう。

もし、これが冗談だったとしても、きっと彼は彼女をそれ程、恨まないだろう。

認められた。彼の中ではそんな気持ちが溢れ出して、高揚しているように思えた。

オルギアが走り去った後、キマイラはノルンを見る。

「まさか、本当に既に教会内に侵入しているのかしら？ ……だとすれば、トラップは無駄か」

「……キマイラ」

ノルンは言う。

「大丈夫だから。リーデラとガーデンは、彼女達は。彼女達は私が“隠している”から」

灰色の少女は奇妙な事を言う。

「……それが貴方のエートル？」

「うん」

十

リーデラとガーデンは教会の屋上へと向かっていた。

空を見上げる。真っ暗な闇。

そして。

空の所々から、星屑が生まれた。

流星群が降り注ぐ。

「綺麗……」

リーデラが笑っていた。

ガーデンが、彼女の服の袖を掴んで、同じように微笑む。

こんなに空が綺麗だったなんて。

二人は嬉しそうに微笑んでいた。

悲しみに暮れる二人を気遣ってか、ノルンはおまじないをして上げる、といった。

彼女は魔法が使えるのだと。

それは夜の時間だけ使える魔法。

星屑は、まるで川のような形へと変わる。

本の中だけで見た数々の星座が現れた。

気象の関係で、この雨の街では眼にかかれない世界。

世界がこんなにも綺麗だったなんて。

街の外では、このような星座が見えるらしい。

外に出てみたいな、と二人は思った。

この小さな教会の中だけの生活ではなく、広い、広い外の世界。

そこにはきっと、これまで自分達が見た事もないような景色が広がっているのだろう。

二人は地面を見る。

すると、奇妙なものに気付いた。

教会の周りを、沢山の獣のようなものが奔っている。

それは、まるで円を描くように動いて、こちらを観察しているかのようだ。

十

「敵のボスであるマミー・キャットは、一対一なら私が勝てる」

キマイラは断言した。

私は彼女の話を一言も聞き漏らさないように、聞いている。

「問題は彼女の作り出すゾンビ達。物量で来られたなら、私はともかく、貴方達は拙い。マミーの方も、さすがに命が惜しいでしょうから。一人で此処に向かってくるとは考えにくい。私達の側の何名かを道連れにする事は出来ても、負ける事が分かっているだろうから。それから、下手に人質を取るのも考えにくい。私の運動能力、反射神経、反応速度を侮っているとは思えない」

私達は階段を上って、屋上へと向かう。

私は自分の作り出す世界に、切れ目を入れて、キマイラも巻き込んだ。

屋上には、二人の少女が立っている。

リーデラとガーデンだ。

「良かった……」

キマイラは満面の笑顔になる。

何だか、嬉し泣きでもしてしまいそうだ。

「ノルン、キマイラ……」

リーデラが呟く。

「ありがとう、ノルン！」

ガーデンが、か細いけれども、力強い声で私に礼を言う。

「いえいえ」

私は自然と顔が綻ぶ。

キマイラは憮然とした顔をしていた。

屋上から教会の外を見ていた。

森に覆われている場所。

私もそれを覗く。

沢山の何かが、蠢いている。

「屋上に固まった方がいいかもしれないわね……」

キマイラは神妙な顔をしていた。

「ノルン、オルギアを呼んできて。なるべくなら、ゼロムとガイツォも」

十

「ガイツォが何処にもいねえんだよお」

オルギアが困ったような顔をしていた。

彼は背中にゼロムを背負っている。

それにしても、人間って重いなあ、と愚痴る。

「じゃあ、私はガイツォを捜す。ノルン、みんなを宜しく」

キマイラは、屋上から見える光景をオルギアに教えた。

彼は眼の色を変えている。

「本当なんだな……？」

「今更でしょう」

オルギアはしばし、絶句していた。

「あいつら、人間なのか……？」

暗闇の中で轟く悪鬼達の姿形を確認出来たらしい。

「ねえ、オルギア。貴方、眼が凄くいいの？」

「ああ？ お前らには見えないのか？ あいつらの姿」

キマイラは驚いていた。

「上出来よ。オルギア。貴方の能力、私じゃとても真似出来ない。私はガイツォを見つけてくる。今、奴らを射ち殺すのも手だけれども。それが狼煙になる危険がある。全員で固まらないといけない。でも、十分、十五分くらい経って、私が戻らなかったら、容赦無くあれらを射ち殺しちゃって。敵の戦力を先に少しでも削いでおきたい」

そう言い残して、彼女は屋上を降りる。

ガイツォ。……。

彼の姿は何処に行ったのか。

彼にも強く言っている、今日は教会の外を出るな、と。

けれども、嫌な予感が拭い去れない。何故、消えた？ 何処へ？

思わず、奥歯を歯軋りする。

暗闇の中だ。

森の方向。

そいつらは、姿を現していた。

ぼしゃり、ぼしゃり、といった音が聞こえる。

それは肉を骨を、内臓を貪り食う音だった。

キマイラは頭に手をやる。

あの屈託の無い少年。でっぷりとした体格の対人関係が苦手そうな、しかし愛嬌のある。

そういえば、花を貰ったっけ。青い花だ。

彼は地面に横たわり、今や生きたまま動く死体達の餌へと変わっていた。

キマイラの決断は早かった。

彼女はゾンビ達を殺さずに、屋上へと向かう。

一分も掛からずに、屋上に辿り着く。

そして全員の姿を確認すると、屋上の扉を腕力で変形させた。

凄い形相をしている彼女を見て、ノルンとオルギアが振り返る。

「どうしたんだよ？」

「オルギア」

憎しみのこもる眼。

「射ち殺せ。奴ら全員を、皆殺しよ。ガイツォの仇を討つわよ」

憎悪を孕んだ、底冷えする声で言った。

十

オルギアの両手から、マシンガンのように空気の弾丸が発射される。

それが、次々と森の中の化け物達へと命中していく。

「全員、生き残るわよ」

キマイラは強く言った。

「ああ！」

オルギアが叫ぶ。

キマイラも、服の中から様々な物を取り出して次々とゾンビ達に命中させていく。

夜風で、彼女の帽子が飛ぶ。

二つの角が露になる。

そして、彼女の頭部に、幾つかの細い針が刺し込まれていた。

オルギアはそれを見て驚いたが、すぐに敵を射ち殺す事だけに集中する。

ノルンも力を使い続けている。

夜の闇に、みんなを溶かす魔法。

ノルンの力は、既にみんなに話している。

彼女は夜や闇、影の中に好きな景色を作り出す事が出来る。更に、夜や闇の中にいる者達の姿を、闇によって覆い隠す事が出来るのだと。

ゾンビ達は森の中を行進していく。

マミー・キャットは一手、見誤った。

強力なエーテリオンが、キマイラー人では無い事を知らなかった。

リーデラは息を飲んでる。

ガーデンは今にも泣き出しそうだ。

ゼロムを地面にそっと、寝かせている。

「ははっ、あはははっ、はははっ」

オルギアは笑っていた。ずっと、ずっとこのような状況を願っていたのだろう。

彼が理解され、認められる日々を。

彼の哄笑は続く。

建物の何処かで、破壊音が響いた。

「何？ あれ？」

リーデラがおそろおそろ訊ねる。

「ああ。私の仕掛けが発動しただけ。位置的に考えて下水かな。やっぱり狙ってきた」

キマイラは振り向きもせずに、ゾンビの群生を倒し続ける。

破壊音、何かを勢いよく命中させる音、爆発音が教会と教会の敷地内のあらゆる場所で鳴り響く。

更に、階段の下辺りで、破壊音が響いた。

キマイラは手を止める。

「ついに、階段の辺りまで来たわ」

そう言って、オルギアの肩を叩く。

「後は任せたわよ」

「.....ああ！」

彼は叫ぶ。

キマイラは走る。

そして、階段の扉を開かずに。

そのまま、扉に全身を溶かすようにすり抜ける。

既に、ゾンビの群れは建造物内に侵入していた。

仕掛けておいたトラップは悉く発動している筈。という事は、それらを使い切る程の物量で押し寄せてきた事になる。

何十体所ではない。何百体、ひよっとすると何千.....？

敵はまるで手段を選ぶ気は無い。街の住民を幾ら犠牲にしても、街一つを潰してでも、教会の子供達を全滅させるつもりのようなのだ。

早めに司令塔であるマミーを倒して、この惨状を止めるべきだ。

確か、レデルが言っていたように、この雨の街自体が実験場らしい。とすると、この街の住民自体の命なんて、駒としか思っていないという事か.....？

.....アップルはマミーを止めるつもりは無い。やはり、アップルも敵だ。私達だけでなく、この街の人間全ての。そして、人類全てに対しての。

階段をゾンビが登ってくる。

男もいれば、女もいる。子供も、老人も。

キマイラは壁に触れる。そのまま、彼女の腕は壁の中へと溶けていく。

「私の『カクテル・パーティー』がどれだけ優れているか。分かっていないみたいね。ひよっとすると、何だって出来るわよ？」

彼女は壁から取り出したコンクリートの塊を、階段の下にいるゾンビ達へと放り投げていく。ゾンビの一体の足に、コンクリートの塊が激突する。

すると、コンクリートの塊とゾンビの身体が階段で溶けるように接着された。

キマイラは次々に、ゾンビ達の肉体へ向けて、コンクリートの塊を放り投げていく。今度は、なるべく頭を狙って。

あっという間に、ゾンビの身体で階段は塞がれてしまった。

後列の部隊は、時間を掛けて、壁となったゾンビを食い破っている。

キマイラは更に、両手を壁に溶かす。

泥遊びでもするかのように。幾重もの連なる、檻を築いていく。

階段の通路は、キマイラの手によって塞がれていく。

これで、奴らの行く手をしばらく阻む事は出来た。

しかし、防戦一方では駄目だ。

こちらから、この事態を率先して終わらせなければならない。

.....マミーを叩くか。さて、何処にいる？

もし自分だったら、どうするか？ 問題はきっとそこだ。.....。

おそらくは、なるべくマミーとしては、キマイラと他の者達を分断させたい筈。

ならば、敢えて、しばらく仲間達と離れておくべきなのかもしれない。

マミーを嵌め込む罠が必要だ。

でも、大丈夫なのか？考えろ。少しでも。

敵は何を狙っている？ 自分が奴の立場ならば、どうしたい？ 考えろ。.....。

キマイラは、すぐに決断した。

オルギアに、頑張っ欲しい、と。.....。

.....。

彼女は壁をすり抜けていく。

そして、四階へと向かった。

壁の間から顔を出す。

ゾンビの群れが溢れている。

彼女は片っ端から、襲ってくるゾンビを適当に倒して回る。

ちょうど、今、頭に針を刺し込んで、肉体を強化している。

だから、ゾンビの動きなどスローにしか映らないし、不意打ちされようが、大量に襲ってこようが、まるで問題なく反応出来る。

適当に、壁と混ぜたり、頭を蹴り飛ばしたりしながら、建物内を走り続けた。

教会の構図を思い出す。

頭の中に叩き込んだ、教会の地形。

今、彼女がやるべき事はだ。

逃げなければならない。仲間達を逃がさなければならない。

そして、逃げながら、倒す。……。

もし、マミーが不意打ちしてくるとすれば。……。

……おそらくは、屋上目掛けて、直接、跳躍してくる。

あの女の肉体も生半可じゃない。

オルギアが反応出来るかどうか……。

……。

屋上の射撃音が途絶えた。

……来た。

彼女は窓を開いた。

十

オルギアはかつてない、高揚の中で思った。

ああ。

此処で死んでもいい。

と。

……。

ゾンビ達は沢山、教会の周りに群がっている。

そいつらを弾けた果物のように、倒していく。

これから先、果たしてこのような快感があるのだろうか。

これから、みんなの中で、生きていく事が出来るのだろうか。

誰かに認められたい。それを糧に生きてきた。

自分が戦争孤児である事を認めるのが嫌だった。

ただ、同情されるだけの存在。教会の中に入れられて、弱い奴らと一緒に過ごしていくのが嫌だった。自分の生きている殻の外へとずっと出たかった。

強い。自分は強いんだ。オルギアの中には、情念が渦巻いている。

誰にでも、勝てると心の底では思っている。

突然。

勢いよく、そいつが飛んできた。

オルギアのいる場所へだ。

幾ら、ノルンが闇に隠しているとはいえ。外側からは、何も無い闇の中から、弾丸が発射されているように映るのだろう。弾丸が飛び出してくる場所へ向かってこればいい。

そいつの跳躍力は異常だった。

森の樹木を蹴って、此方まで飛んできた。

ゾンビの群れの一体と言うには、あまりにも形容しがたい、そいつ。……。

オルギアは思わず、口を開いて呆けていた。

細長い長躯。

蜘蛛のように長い手足。

そいつはそこに立っていた。

オルギアは両手を注意深く、そいつに向ける。

ノルンの能力で、オルギアの姿は闇に覆い隠されている筈だ。

「初めまして。君は誰かなあ？ 私はマミー・キャットと言う。よろしくね」

顔中が蜘蛛の巣のように、ヒビ割れた女だった。

そいつは蛇のように長い舌を垂らす。

「君もエートル。力に目覚めたんだろう？ この辺りに隠れて見えないみたいだが。もし、見えていたら、首くらい着地の時に落とせたのにねえ」

ケタケタケタ、と怪物は嘲笑う。

ぺき、ぼき、とそいつは全身の間接を鳴らす。

間接の節々からは、長い円月刀のような刃物が飛び出してくる。

オルギアは本能的に悟った。

迂闊に射ち込んだら、それだけで位置がバレて、殺される。……。

ノルンは機転で、オルギアと自分達を覆う闇を、分散させている。

その怪物は、全身の間接を、バキバキッと異様な音を立てて鳴らす。そして、まるで得物のカエルを今にも飲み込もうとする蛇のような眼で、そいつは彼のいる辺りを見ている。

……ううっ。

オルギアは心の中で唸る。

怪物は、素手でコンクリートの地面を抉る。

そして、その中から破片を選んで、適当な場所へと勢いよく放り投げていく。

石飛礫。

命中したら、軽く肉の一部くらいこそぎ落ちる威力だ。

もし、悲鳴を上げれば、それだけで命取りになる。

今にも、気を失ってしまいそうな恐怖。

オルギアは慎重に、怪物の頭部を狙った。

怖い。

怖い。

怖い。

怖い、……これが戦争。

戦場でも、敵兵士からの攻撃はこんなものなのだろう。浅はかだった自分に嫌気がする。

怪物は再び、石飛礫を投げる。

ノルン達のいる場所へとそれは、飛来していく。

運良く、彼女達には当たらない。

オルギアは限界だった。
両手からの攻撃を発射していた。
怪物の頭部へと。
めしゅり、という音を立てて。
蜘蛛とも蛇とも付かない顔の化け物は、額の一部と片耳を削られるだけで、平然と立っていた。
もう駄目だ、とオルギアは思った。
怪物は、こちらへと向かってくる。
「さよなら。このまま死んでね？」
オルギアは再び、弾丸を発射する。
しかし、既に、そいつは横に避けていた。
オルギアのすぐ隣にいる。
彼が見えているわけではない。だが、大体の位置を把握されたのだろう。
そいつは、刃物で薙ぎ払ってきた。死ぬ、殺される。……。
服を引き裂かれた。ぎりぎりの処で攻撃をかわせた。
皮膚にさえ、傷を入れられては拙い。ゾンビへと変える毒物を注入してくると聞いている。
ゆらり、と化け物は身体をふらつかせる。
まるで、遊んでいるような。
オルギアは指先を化け物へと向けた。
全力で、発射する。
だが、気配を感じ取っていたのか、彼の姿が見えない筈なのに、事前に攻撃を避けられる。怪物は跳躍して、オルギアの背後へと回る。
後ろを振り返れない。
彼は悟っていた。
もし、振り返ったその瞬間に、首を落とされるだろう。
ノルンの能力で見えない筈のオルギアの気配は、正確に敵に察知されている。
ひたりひたりとそいつはオルギアの下へと向かってくる。
どの道、このままだと殺される。だから、賭けなければならない。
自分の首が落とされるイメージが頭の中に広がる。
けれども、最悪でも相打ちだけでも狙おうと。
彼は振り返った。遅かった。
化け物の腕が、すでに目の前に向かってきていた。
風を切る音。
オルギアは呆気にとられていた。
引き裂かれ、切り落とされたのは、怪物の右腕だった。
「よくやった、オルギア。ありがとう」
キマイラは、壁を伝って、屋上に登っていた。
彼女は相変わらず、何かを超高速で投げ飛ばしたみたいだった。

見ると、屋上の扉に、大きなガラスの破片が突き刺さっている。

「キマイラァ」

怪物は咆哮する。

そして、彼女の下へと走っていく。

オルギアはその隙を見逃さなかった。

キマイラは、後方に飛んで屋上から落下する。

そして、オルギアは気力を振り絞って、弾丸を怪物の背中に向けて発射させた。怪物の肉体が孔だらけになる。怪物は再び、立ち上がろうとする。

キマイラは、屋上に戻っていた。そして、即座に怪物の頭を叩き割るように、地面に沈めた。奇怪な顔をしたそいつの頭部は、コンクリートの地面と混ざって、ぐしゃぐしゃになっていた。

完全に、行動不能へと追い込む。

「やった……」

オルギアが叫ぶ。

キマイラは首を横に振った。

「駄目だ」

頭をコンクリートに混ぜ込まれても、怪物はまだ全身を痙攣させていた。

そして、びくん、びくん、と全身を動かしながら。

ぶしゅっ、ぶしゅっ、と体液を周囲に撒き散らしている。

「一撃も当たっては駄目よ！」

キマイラは全員に叫んだ。

そして、彼女は指先で、空中をなぞる。

怪物の肉体は、破裂した。

体内から、肋骨やら何やらの骨の破片を周囲に飛ばす。

しかし。

まるで、空中に見えない濁流でもあるかのように。

骨片や液体は、キマイラ達には届かずに、軌道が曲がりながら、遠くへと飛んでいく。

キマイラが空気の気流を掻き混ぜて、防御膜を作ったのだった。

もはや、人の形をしていたものは、そこにはいない。

そうして、一人の化け猫は最期を迎えたのだった。

だが。

骨片の一つが、オルギアの左腕へと突き刺さっていた。

キマイラは走る。

そして、骨片を引き抜く。

その後、削り取るように、彼の傷口を指でこそぎ落とした。

「い、痛ええええええええ！」

「悪い。死に際に、全身から毒を放射していた。捌き切れなくて、貴方に命中しちゃった」

彼女は心底すまなそうな顔をする。

そして、彼の服の一部を切り取ると、傷口を強く縛り付けた。

「さてと」

彼女は呟く。

「後は、有象無象のゾンビ達から、何とか身を守りましょう」

オルギアは頷く。

全員、生き残った。……。

確かに、みんな、生きている。

みんな、生き残っている。……。

後、どれくらいの時間で夜が明けるのだろうか。だから嘔み締めたい。この喜びを。

生きている、という実感を。

……………。

夜が明ける。

六名はお互いの無事を確認し合う。

といっても、ゼロム一人はまだ昏睡状態から戻らなかった。

脈拍も余り、良くない。助かってくれれば嬉しいのだが。

ゾンビ達は、主人が死んだ後。明け方になると、ばたばたと倒れていき、動かなくなる。

オルギアは完全に疲れ切った顔をしていた。他の者達も。

「私達は、これからどうやって生きていくんだろう……？」

リーデラがぼつりと言った。

教会は徹底的に破壊されてしまった。

きっと、家畜達も全滅しているのだろう。

それ所ではない、此処に街の警官達もやってくる。

それだけではない。マミー・キャットを倒したのはいいが。……アップルから逃れたわけではない。……。

「一つ、身を隠す場所がある」

ノルンが言った。

「私の、私の家なら。みんなを隠せる」

十

教会の金庫から引っ張り出した金で、食料品などを買い込むと。キマイラの機転で、ヒッチハイクを行って、ノルンの住んでいた家を目指した。

キマイラは頭の中で、昔、観たホラー映画の登場人物達、彼らは家族を殺されて自分だけ生き残ったなどというパターンがあったが。あの後、彼らはどうやって生きていくのだろうか、などと考えていた。

夕方くらいになって、ノルンは森と茂みによって囲まれている場所に下りるように言った。乗せてくれた親切な人には、ガソリン代を多めに渡した。

それから更に、数時間。藪を掻き分けて、道を進んだ。

大きな屋敷へと辿り着いた。

六名は、その中へと入った。

途中、ゼロムは眼を覚ましていた。

ふらふら、とした足取りで、眼もおぼろげだった。

彼も助かった。

屋敷の中を見て、みんな驚いていた。

彼女が、こんな場所に住んでいた事に。

“ヘッドレス”という名前の首無し機械も、相変わらず、健在だった。

みんなは、それぞれ、シャワー・ルームを使い。それぞれ、冷蔵庫に入っている食料などを食べ漁った。

「いいなあ、ノルン。こんな所で生活していたのか」

オルギアは言う。

ノルンは笑う。

十

四名が寝静まった頃。

ノルンとキマイラの二人は、リビング・ルームの中にいた。

「凄いハードだったよね」

ノルンは言う。

「ええ、そうね」

キマイラは答えた。

沈黙。

二人とも考えていた。

……これから生きていく事に、関してだ。

他の四名も考えずにはいられないだろう。

「ホラー映画ってあるじゃない。あれって、最後に一人だけ生き残った主人公はどうするんだろうって。普通の生活を送れるのかなあって。ひょっとすると、映画の途中で死んでしまった連中の方がマシだったんじゃないかって……」

「うん、そうだよ。なんだろう……」

これから、何を目指して生きていくべきなのだろう。

キマイラは人質となっている弟の事も話した。

ノルンはそれを聞いて痛ましく思う。けれども。

彼女は、もう弟の事はいい。あれはもう、諦めた。……それだけ言った。

「ノルン、疲れているでしょ？」

「えっ？」

「ずっと、力を使い続けている。この屋敷全体も、暗闇の中に隠している。疲れていない？」

「そんな事、無いよ」

ノルンは笑った。

確かに、余り疲れは見えない。まるで呼吸でもするかのよう、出来てしまうエートルなのかもしれない。

「名前、何て付けている？ 力の名前」

「えっとね、『ア・ノット』。無い、って事」

「そう。良い名ね」

時計は夜中の四時。

もうすぐ、五時頃。夜が明ける。

何となくだが、二人は待っている。

何を待っているのかは分からないが、疲弊した身体にムチ打って、待っていた。

朦朧とした空間の中から。

そいつは現れた。

フロック・コートに身を包んでいる。

帽子を目深に被っている。顔は見えない。

「ああ、三人目の男。いらっしゃい」

キマイラは淡々と言った。

男は会釈する。

「で、単刀直入に聞くけれど。アップルは私達をどうしたいわけ？」

彼女は男を睨み付ける。

そして、情報を聞き次第、この場で始末する事を考えている。

「今回は。マミー・キャットさんの独断でした。アップル側としても、彼女の行動には目に余るものを感じていました」

「ああ、そう」

淡々と返す。

「それで、私達の処遇はどうしたいの？」

まるで恫喝するかのように言う。

「生きて、下さい」

男はそれだけ言った。

そして、闇の中へと消えていく。

ノルンが、ふと何かに気付く。

「……ルージュ……？」

ぼんやりとした影へと変わった男は帽子をつかんで、振り返る。

「ルージュでしょう？ 貴方が私に手紙を送り続けていたのよね？ ルージュなんでしょう？」

「よく気付きましたね。何故？」

「ルージュには、よく理想の男の人を書く時に。貴方のイメージがあって。それで、キマイラから、ルージュは架空の人物じゃないかって聞かされて……だったら、貴方かなって」

「慧眼ですね。ご名答。そうです、それからルージュというのは。私の元妻で。病気で死んでしまいましたが、昔から娼館での仕事を好んでおり。私は死んだ彼女を思い出しながら、貴方に手紙を送り続けていました」

「ありがとう、偽ルージュさん！」

ノルンは叫んだ。

男は闇の中へと完全に消えていた。

外を見る。もう、夜が明けていた。

小鳥の鳴き声が聞こえる。

空を見る。

綺麗な水色の空が、綿菓子のような雲を浮かせて姿を現していく。

リーデラには見せられない光景だ。

そして、ノルンの能力も、この時間帯は使えない。

二人とも、いつの間にか、ソファの中で眠りに付いていた。

十

これから、みんなどうやって生きていくのだろう。

リーデラは相変わらず、青を怖がり、日中、外に出られず部屋の中に閉じ籠っていた。

ガーデンも相変わらず、節食障害で、まともに食事をする事が出来なかった。此処に着いた夜だって、水とオレンジ・ジュースと、ビタミンの錠剤を頑張って飲んでいただけだった。

夜中に突然、ガーデンが、あの時にガイツォみたいに死んでいれば、と泣き叫ぶ時がある。それを聞いて、オルギアは怒る。ゼロムは宥める。

リーデラは彼女の言葉に共感する。

キマイラは、生きる事は死ぬ事よりも残酷な事なのかも、と呟く。

ノルンは何も言わない。

みんな、これからどう生きていけばいいのか分からない。

元々、みんな弱い人間なのだ。

キマイラだって、強がっているだけだ。

元々、どうやって生きていけばいいのか分からない者達の集まりだった。

みんな思い返す。

雨の街とは何だったのか。

いや、この社会とは、何なのか。

ノルンは、そんな事を考えていた。

「みんな、それぞれの道を生きなければならないな」

ゼロムは言う。

確かにそうだ。

生きる事とは何なのだろう。

私は、私達は、ずっとそれを思索している。追い求めている。

.....

キマイラは弟を連れ戻しに行く、とアップルへと向かった。

みんなには迷惑を掛けるつもりは無い、と彼女は言った。

私達はどうしているのかというと、何もしていない。

ゼロムは、元のバイト先を首になっていたし。

リーデラ、ガーデン、オルギアなんて元々、教会以外に居場所なんて無かった。

オルギアは、隣国に行って志願兵になり、戦争の手助けをしてくると言っ。キマイラが出て行った数日後に屋敷を出た。

相変わらず、屋敷の中には、何処からか食料が配給されてくる。衣類なども。

此処はやはり、実験場で。私達は、みんなは、実験動物として、教会や雨の街から、この屋敷へと移されただけなのだろうと。

自由は何処にあるのだろうか。

ずっと、監視されて、管理され続けるだけの人生。

外の世界もこんなものだと思うよ、とゼロムは言う。

彼は毎晩眠れなくて、睡眠薬を何錠も飲んで眠りに付いている。

このままだと、また薬物過剰摂取で昏睡状態に陥るんじゃないだろうか。

何とかしなければ、と思う。

みんな、生きる目的を見つけなければならない。

私だって、そうだ。

私だって、生きる目的が欲しい。

この屋敷を出て、やるべき事があつた。やろうと思った事。

それは、恋をする事だ。

でも、相手がいない。

だから、違う目的を探さなければならない。

そういえば、恋に関して男の子達にも聞いた事がある。

オルギアは。

教会の女の子達は、家族みたいなものだから、恋愛対象に出来ないと言っていた。

彼は地図と食料品をバックに詰め込んでいた。

しばらくは一人で生きていくという。

彼は強いんだなあ、と思った。

すると。

強いのは憎しみだけだ。俺の両親は隣国に殺されたから。

そう返された。

.....何も言えなくなる。

私の夢は娼婦になる事だった。

だったというのは過去形。

キマイラから、その実態などを散々聞かされたし、何より、ルージュの件で幻想を持っていたんだと思う。

三人目さんの事を思い出した。

何となく分かったのだ。

きっと、奥さんを亡くした原因は、奥さんは娼館で移された病に掛かっていたのだろう、と。

.....

そう思うと、とてつもなく苦しくなる。きっと、彼は苦しい思いをずっと背負って生きてきたのだろう、と。.....

それから、色々な事があった。

ガーデンは絵を描き始めた。

クレヨンと色鉛筆で。

自分の中の苦痛を、言葉を吐き出すようにだ。

以前も絵を描いていたらしい。でも、何だか見てくれる人がいないようで、自信が無かったのだと。

今は、屋敷に四人だけしかいない。

いつも、会話は途切れがちだ。

ゼロムも、もう無理してみんなのリーダー・シップを取るのを止めにしたいらしい。

ただ、最近ではいつも自分の悪夢と戦っている。

睡眠薬の錠剤が増えていく。

この屋敷にも、何故か睡眠薬が常備されている。ヘッド・レスが何処かから運んでくるのだ。

私は書庫を開けて、みんなを連れ込んだ。

沢山の本が並んでいる。私は小説とかばかり読んでいたが、童話や絵本、宗教の本、哲学の本だって揃っている。他のみんなが興味を示すかもしれない。

その中から、ガーデンは何冊かの絵本を手にとって、模写を始めた。

「私、.....絵本職人になりたいかな.....」

淡い夢。

どうやったら、絵本職人になれるのかは分からないが。

それでも、ガーデンはそこに意味を見出している。

彼女は何時間でも、画用紙に絵を書いていた。

自分の内面を吐き出すかのように。

クレヨンを床に散りばめて、懸命に絵を描いていた。

まるで、自分の全てを吐露するかのように。

きっと、彼女にはそれ以外に出来る事が無かった。才能だって、きっと無かった。傍から見ると、ただの落書きにしか過ぎない。

いつしか、白いキャンバスも使うようになっていた。

キャンバスに沢山の色鉛筆とクレヨンを塗りたくる。

そうして、絵が完成していく。

それはまるで、ぐしゃぐしゃと、もじゃもじゃとミミズのようなようでもあり、風の動きのようでもあった。

けれども、それは彼女が視ている世界なんだろうなあという事だけは分かった。

中央には、白い皿が置かれている。スプーンとフォークも描かれている。

皿の中には、沢山のバラバラになった人の欠片や、奇妙な昆虫、植物達が描かれている。そう、彼女の眼には、食事、料理がこのように映っていたのだろう。

醜いな、と思った。

同時に、美しいな、とも思った。

彼女は自らの傷口を抉りながら、表現し続けている。

結局の所、彼女の拒食の原因は分からない。レデル先生も突き止められなかったし、私達にだって全然、分からない。けれども、分からないものだからこそ、訴える必要があるのだと。

キマイラは、それから二週間くらいして帰ってきた。

弟の事はもういい、と言う。

「大切な弟だったんじゃないの？」

「ああ、あれはもういい。会って話した。姉の私の思いなんてまるで考えていやしない。もう二度と会いたくない。生涯、ずっと人殺しの金魚の糞でもしていればいい」

忌々しそうに言う。

「確かに大切だったけれども、今はそうじゃない」

と、そっけなく答えられた。

この二週間、一体、何があったのだろうか？ それは聞くべき事ではない事だけは分かった。

その間にあった事。

リーデラとゼロムが付き合う事になった。

二人とも、お互いを大切にしているらしい。

どんな関係を築いていくのか、私には分からない。でも、恋をして、付き合っている者同士を間近に見て、とても胸の奥が熱くなった。

二人は、屋敷の外で生きていくとあって、屋敷を出て行った。

青が怖いリーデラを気遣って、夜の間二人は向かった。

この森の外に行く為には、藪と崖を越えていかなければならない為、キマイラの帰還を待って出発する事にしたらしい。

キマイラは二人の手助けをして、二人を屋敷の外へと連れて行った。

二人は、必要な荷物を背負って、ヒッチハイクで遠くを目指すという。

二人はこれから何処へ行くのだろうか。

何処かで仕事でも見つけて、二人で生きていくのだろうか。

フラッシュバックに悩まされる青年と。

青という存在自体が怖い少女の恋。生活。

それから、二ヶ月くらい経過した。

.....

十

オルギアが戦争で戦死したらしい。

情報だけが届いた。

軍隊で厳しくしごかれた後、少年兵として戦場へと向かった。

そして、自身の特異な能力を使って、敵兵を沢山、射ち殺したらしい。

けれども、地雷の爆発に巻き込まれて死んでしまったとか。

そのような情報を、キマイラから聞いた。

私は、胸にぽっかりと孔が開いた気持ちになった。

あんなに強かったオルギア。あんなに、将来が輝いて見えたオルギア。

でも、彼は彼らしく生きられたのだろう。

強く、生きたのだろう。……。

それからしばらくして。

ガーデンは自分の絵本を完成させた。

十五ページの絵本だ。

やっぱり、絵はそんなに巧くはない。

今、屋敷の中には、私とキマイラとガーデンの三名だけがいる。みんなそれぞれ、好きな事
をやって、好きに生きている。食料や衣料品などは、何処からかヘッド・レスが持ってくる。積
極的に私達が動く事なんて何も無い。

生きる事と死ぬ事。

私達は、どちらも等価だ。

私達は強く生きていけるのだろうか。けれども。

……………。

ガーデンは、またいつものように食べたものを吐く。それは治らない。

けれども、絵を描く事を決して止めない。

痩せ細った身体にムチ打つように、描き続けている。

私は怖くなって、ビタミンやカルシウム、鉄分の錠剤を溶かした水を彼女に飲ませる。

零しながらだが、彼女はそれをどうにか口にする。

彼女の眼は鬼気迫っているかのようだった。

でも、何だかとても楽しそう。

邪魔するのは、凄く悪いな、と思った。

彼女は、今、生きる行為をしているのだ。

十

生きる事とは何なのだろうか、と私は思う。

キマイラは強さ故に、疎外され、アップルに身を置く事になった。今はただ、平穩に暮らした
いと言っている。

オルギアは強さ故に、軍隊へと向かい、……死んだ。

私は今も生きている。

何故、弱い事がいけないのだろうか？ 分からない。

結局、私はこの屋敷に戻ってきた。何処にも行けなかった。これから、何年も何十年も此処で
生涯を終えるのだろうか？ 分からない。

私の人生は続いていく、物語は幕を開けはしない。

「ねえ、キマイラ。これから何がしたい？」

私は訊ねる。

「分からないわ」

彼女は答えた。

まるで、張り詰めた糸が途切れるように、彼女は最近、どうでもいいといったような態度を示している。

彼女には目的があった。弟を守るという。その後、教会のみんなを守るという使命が。

けれども、今はただ倦怠ばかりが続いていく。

終わってしまった後も、生きていかなければならない。命ある限り、ずっと。

特にやる事が無いので、私とキマイラは本ばかり読んでいる。たまに、ヘッド・レスを押しつけて、一緒に食事を作ったり、屋敷の掃除をしたりもする。

私達三名は外の世界では生きていけない。

キマイラは角のせいで。

ガーデンは弱さのせいで。

そして、私は、外での生き方、作法がまるで分からないせいで……。

「私達は、今も籠の鳥か。どうすれば出られるのだろうか？」

生きる意味。生きていくだけの価値。

「ねえ、ノルン。私は強くなろうとした。誰よりも。ノルンは？」

「私は恋がしたいかな。外に出て、恋がしたい。白馬の王子様って凄く恥ずかしくて陳腐な言い方だけれども、そういった理想の男の人が目の前に現れてくれないかなって。なんか、羨ましいなあって。リーデラがとっても。彼女は見つける事が出来たんだから、すごく彼女は幸せそうだった」

「そう」

屋敷の屋上に登る。

あれから、三ヶ月近くも経っている。

死んだ人間の顔も、頭に思い浮かぶ。

「ねえ、オルギアは幸せだったのかな？ 望みの通り、戦争に行けて。自分の力を存分に使えて。そして、死んだ。幸せだったのかな？」

私達の知らない場所、知らない所で死んだ茶髪の少年。彼は最後に何を思ったのか。分からない。彼は強かったのだろうか？ ひよっとすると、強がっているだけで、本当はとてつもなく、弱かったのかもしれない。……。

「分からないわ」

彼女はそっけなく答えた。

辺りは暗闇。

森の輪郭もよく分からない。

私は空に手を上げる。

すると、流星群が生まれる。私のエートルで作った幻。

閃光が辺りを包み込む。キマイラはまるで、音楽でも聴いているかのように、眼を閉じて。夜

風に揺れている。

星は燦々と輝いている。まるで、命の灯火のよう。

大きな星と、小さな星。沢山の星が煌いている。

私のエートルは、決して敵を打ち倒せるような力じゃない。

けれども、大切な人に、大切なものを見せられればいいな、と。

夜空に幾つもの花火を作った。

それは、いつかガイツォという小太りの少年が見せてくれた青い花を模した形をした花火だった。

十

雨の街の情報は、ヘッド・レスから渡される新聞によって確認している。

住民の数百名以上が死亡、千名近くが行方不明。これは、三ヶ月前の情報だ。今は、未知のウイルスのようなものが蔓延しているらしい。マミー・キャットの作り出したゾンビ達の骸が感染源になっているのだろう。肉体がどんどん壊死していく病気。死者は増え続けているらしい。

結局の所、雨の街なんてものに生きていた人々は、みんな実験動物だったのだ。

一体、何の為の戦いだったのか分からなくなってくる。

アップルは、一体、何を狙っているのだろう。

世界の統治？ どれ程の人間を犠牲にしても？

キマイラは憤りとも、諦めとも付かない顔になる。

自分は何かを守るのに向いていない。弟に対してもそうだった。

きっと、両親と共に平穏に暮らせれば、どんなに良かったらう？

今、アップルを潰したとしても何の意味がある？ アップル自体がもはや、自動的に動き続けている存在なのだと聞かされた。まるで、一つの国家のように。

分かりやすい敵が死ねば、マミーが死ねば、全ては終わる。そう思っていた。

けれども、余計、事態は悪化している。

そして、自分は安全圏からそれを傍観している。どうでもいいと。……。

アップルから聞かされた事の一つに、人類の未来に貢献したいという話があった。

その為に、どれだけ人間に犠牲を強いてでも。それは正しい事なのだと。

キマイラは今もなお、分からない。弟を助けに行った時に、アップルにいる幹部達全てを皆殺しにすればよかったのか。それで解決出来たのだろうか？

……アップルという組織の構成員自体、この社会から弾き出された才能の持ち主ばかりだと聞いた。そして、アップルは外国の秘密機関からも取引をしていて、実験体を作ったり、兵器を作ったりしていた。この世界は膿ばかりなのだと、彼女は知る。

……………。

彼女はゼロムの飲んでいた錠剤を大量に服用する。

これで、楽になればどれ程よい事だろう。

この世界では、生きてはいけない。正しきものを見失ってしまった。……。

実の両親を殺してしまった弟は、これからもずっと、親殺しという宿命の十字架を背負って生きていく。彼女は彼を支えられない。彼はきっと血塗られた道を歩き、惨めで無様に死んでいくのだろう。きっと、それ以外には考えられない。

十

生きる意味を作ろうと、私は思った。

キマイラを誘って、屋敷の裏庭を掘り起こす。

ヘッド・レスに頼んで、シャベルと種を持ってきて貰う。

汚してもよい服を集める。

私は力が弱いので、シャベルを地面に突き立てて、すぐに手が豆だらけになった。

キマイラは呆れながら、地面を耕し続けていく。

本で読んだ通りに事を進めていくが、中々、進まない。

結局、私とキマイラで、一日近く掛かってしまった。もちろん、その殆どを行ったのは、キマイラだったのだが。

次の日は、ひたすら、耕した地面に根を張っている雑草を取り続けた。私は要領が悪い。

根っ子ごと、ちゃんと取りなさい、とキマイラに言われる。

そして、種を植える。

その後、毎日、その場所へと水を撒いた。

しばらくして、ミントの芽が生えてくる。

それを積んで、玉子焼きや肉料理へと入れた。

とても美味しかった。

食べる事に強い恐怖を抱いているガーデンも、私達の作った料理を、ほんのちょっとだけ、口に入れて、飲み込んでくれた。

そして、ミントのお茶はちゃんと飲んでくれた。

少なくとも、此処しばらくの時間は、私達の生きる意味になった。

「このまま、老いていくのかしら？」

私は二人に訊ねた。

二人とも沈黙する。

十

それから、一ヶ月後くらい経った頃だと思う。

もう、季節は雪がぽつりぽつりと降り積もっている。

最初に新聞を手にとったのは、キマイラだった。

新聞の記事を隅から、隅まで読んで気付いたのだ。

わなわな、と震えた。

けれども、彼女は涙を零さなかった。まるで、諦めにも似た感情。

キマイラは二人の友人に新聞を渡した。

そこには、小さく顔写真が載っていた。

ゼロムとリーデラの二人だ。

状況から考えて、無理心中だという。

どうやら、最初にゼロムが慢性的に服薬していた薬物の中毒で死に。

後から追うように、リーデラの方が部屋の中で首を括ったらしい。

外の世界で何があったのか。何が辛かったのか。

三人には知る術が無い。

「ノルン、ガーデン。私達は生きましょう」

羊角の少女は、泣く代わりに、力強く言った。

灰色の髪の少女は頷く。

長い茶色い髪をした少女も、泣きじゃくりながら頷く。

「私は生きるよ。ずっと、ずっと、何十年も。未来はあると信じたい」

「……私は、絵を描き続けるよ、沢山。だから、死なない」

二人は羊角の少女に告げた。

季節は冬だ。

暖炉に炎が灯っている。

今では、ガーデンも料理をする。食べる事は出来ないが、みんなに振舞う。

味は当然、余りよくない。それでも、二人とも気にも留めない。

.....

強さとは何なのだろうか。ノルンは思う。

弱さとは何なのだろうか、とも同時に思う。

結局の所、国家が強くて、その反動としてアップルを生み出して。アップルがあのおぞましい怪物を生み出して、街一つをめちゃくちゃに破壊した。そして、街も全部、実験場でみんな飼育された動物みたいなもの。その中で強く生きようとしたキマイラは苦しみ、オルギアは死亡した。.....そして、教会に生きる者達は、みんなそんな強者の中で生きていく事が出来ず、みんな心が弱かった。.....

キマイラはただ、家族と一緒に幸せに生きたかっただけだし、強さなんて欲しくなかったという。結局の所、彼女には弟を止める強さは無かったのだ。.....

十

一週間後の事だ。

新聞を読んでいると、雨の街や、その周辺の街は凄い気象に襲われているらしい。

じめじめとしていた雨の街では、何と、しばらくの間、雨が降らなくなり、灰色だった空が、

今では真っ青になっているという。

一面の青だ。

あの子が怖がっていた青。

私には、それが何を意味するのか分からない。

彼女はもしかしたら、生きていく上で、周囲の青そのものを封じていたのかもしれない。あるいは逆に、彼女の中には青が封じられており、それが漏れ出していったのか。

青空は色々な国でも起こった。主に最初の頃は、雨ばかり降り注いでいる街や、灰色の空の街で。

彼女が怖がっていた青。青が開花していく。

それは決して良い事ばかりではなかった。

日照りの為に、水を失って、死者ばかりが増え続けている国だって存在すると聞く。

雨粒を欲している国では、深刻な問題と化しているらしい。

水不足。

きっと、彼女は死ぬ時に、自分自身の恐怖をみなに知らせる為に、世界に呪いを掛けたのかもしれない。生き辛い自分を厭った世界に対して、呪詛を。

異常気象は、続いていく。

私達の住む屋敷の周辺では、まだ雪が降り注いでいる。

けれども、屋敷の土地の外では、狂乱が巻き起こっている。

一人の、理解されない少女の恐怖が、今や世界を飲み干そうとしている。

恐怖、悪夢、死が、青によって、渦巻いていた。

人々は、青い空を、青を恐れ続けたのだった。

けれども、春が近づく頃には、それも次第に収まっていった。

雨や雪が、春が近づくに連れて、また降り出してきた。……。

あの青い冬の時代に、どれ程の死者が出たのだろう。分からない。

私達は、自らが栽培したミント・ティーで冬を過ごした。

寒い季節の間、編み物などをして過ごした。雪掻きなども、ヘッド・レスにやらせず、頑張っ

て三人で行った。楽しい時間を過ごした。

これから、三人とも、どのように生きていくのか分からない。

けれども、長く生きたいと思う。

それぞれ、道は違うかもしれないけれど。

キマイラは言う。

「雪が溶けたら、私は何処かに行こうと思うの」

「何処に……？」

ガーデンが寂しそうに訊ねた。

「分からない。けれども、人のいる所。私は世界を見ようかな、って。そして出来れば、余り誰も傷付けたくない。私だって、心の中に悪魔を抱えているけれども。出来れば、ひっそりと生きたいなって。だから、また此処に戻ってくると思う。でも、旅をしよう」と

彼女は切なげに言う。

「強い人間と弱い人間。二種類の人間を見る旅をしてくる」

彼女はそう、毅然と言った。

私は思い返す。

「私も。私も、恋をしたい。理想の相手を探しに行く」

それを聞いて、ガーデンが不安そうな顔をした。

「私は？」

「大丈夫」

私は彼女の頭を撫でる。

「夏になったら、私は戻ってくる。ガーデンは此処を守っていてね」

「出来ないよ」

彼女は泣きそうな顔をした。

「出来ない……」

「そか」

私は言う。

「じゃあ、ガーデン。私と一緒にいこう？ 恋を探す旅に。それでいいかな？」

すると、彼女は満面の笑顔を見せた。

懸命に、首を縦に振る。

「途中までは、三人一緒ね」

キマイラは言う。

もうすぐ、雪が溶ける。

そしたら、三人とも、屋敷を出ようと思う。

生きる目的、生きる理由、生きる意味を見つける為の旅。

私達はまだまだ生きている。私達は弱いかもしれない、けれども。

白い結晶の中から、小さな若葉が萌え出していた。

空は相変わらず、薄蒼い。霧が屋敷の周辺を覆っている。

世界は静謐としている。

「私は強さを求める。ノルンは弱さを求めて欲しい」

ふいに、キマイラは言った。

私は頷く。

「私は？」

ガーデンは訊ねた。

「貴方は、これから選べばいいと思う。どちらでもない、という選択だってあると思う」

ガーデンは嬉しそうだ。

暖炉には赤々と炎が燃えている。もうそれも、役目を終える。

私達は食事を終えた。かちゃかちゃと食器を片付けていく。

ガーデンは、テーブルに載っているパンを齧った。残り物のスープも口に入れる。そして、そ

れらを飲み込む。

すぐに、気持ち悪くなって吐き出した。

そして、胸元を押さえる。強い動悸。

その後、しばらくして、彼女は私達を見る。

「……………私は、私のままなのかな？」

「そうね。でもガーデン。貴方はそれでも、貴方を大切にして」

キマイラは茶髪の少女の額を撫でる。

私達は変わらないのだと思った。何処まで行っても、何処に行っても。……。

けれども、生きていく。生きて、幸せになれるのだと信じている。

空を見た。沢山の雲が浮かんでいる、全部、様々な形をしていた。

私達は弱さの中で生きている。けれども。

生きて、幸せになるのだと。

決意を胸に。……それが見つかるのか、どうかさえ、分からずとも、……。

……………。

END

ブルー・ローズ・ウェイク

<http://p.booklog.jp/book/62421>

著者 : oboroduka

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/oboroduka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/62421>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/62421>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ